

植民地支配期ベンガル農業社会の地域構造 (III-1)

谷 口 晉 吉

序 言

本稿は、イギリス植民地支配後期のベンガル州東部ダッカ地方のバカルガンジ県を扱った前々稿 (I)、ファリドプル県を扱った前稿⁽¹⁾ (II) と同様の視角、即ち、県内の地域諸類型を明示的に導入するという視角から、同じくベンガル州東部ダッカ地方の中心をなすダッカ県の社会経済的状况を考察するものである。

バカルガンジ県では、広大な中洲と森林 (シュンダルバン) の開発、ファリドプル県ではジュートが 20 世紀初頭の両県の経済社会を特徴付けた。ダッカ県でも、中洲と森林 (モドゥプル) の開発、ジュート栽培の拡大は重要な意義を持つが、それに加えて、衰退したとはいえ世界的な名声を博した最高級手織綿布 (Dacca muslin) 製造業、及び、東ベンガルの政治、経済、文化の中心都市ダッカを擁したことがこの県のもう一つの特徴といえるであろう。

本稿の基本史資料は、前二稿と同じく、『地籍事業報告書 (1917)』、『季節と作況報告 (1891-1945)』 (*Season and Crop Report of Bengal*)、『ベンガル センサス (1872-1941)』、『リズレイ 資料集成』 (*Risley Collec-*

tion) であるが、その他に、19 世紀前半にダッカに長期間滞在したイギリス東インド会社の医官 (surgeon)、テイラー (James Taylor) の素晴らしい百科全書的研究 (1840)、19 世紀後半に同じく植民地官僚としてダッカ県に赴任した土地記録・農業局長官補佐セン (A. C. Sen) のダッカ農業に関する報告書 (1889) が豊富な情報を与えてくれる。⁽²⁾

この他に、ベンガル随一の古都ダッカに相応しく、20 世紀前半にベンガル語で書かれた地方史書、そして、バングラデシュ成立後に出版された研究書、史料集などが相当数にのぼるが、本稿では、これらには殆ど触れることが出来なかった。⁽³⁾

又、時間と紙幅の制約から、ここには、本稿の第 1 章から 5 章までを収め、続編において、残された第 6 章 (土地制度)、第 7 章 (住民の経済生活) を発表することにせざるを得ない。興味を持ち、本稿をひもといて下さる方々には、大変ご不便をお掛けすることになり、深くお詫び申し上げたい。

第 1 章 ダッカ県の形成

行政単位としてのダッカ県の形成史を簡単に述べる。⁽⁴⁾

古代東ベンガルには実に多様な系統の王国が入り乱れ登場し、又、一見あい矛盾する様々な伝承が各地に残されており、確実な文献的あるいは考古学的な証拠が乏しい現状では、この県の前史の明確な見取り図を書くことは困難である。その事を認めた上で、幾つかの大掴みな把握を試みたい。

テイラーによれば、インド史上名高い王ビクラマディティヤ (Bikramaditya) がインド各地を巡った後、ガンジス河とブラフマプトラ河の合流地点に位置するダッカ県南部の島に数年間宮廷を置いたという伝承があり、そこから県南東部にビクランプル (Bikrampur) という地名が付けられ

た。このビ克蘭プルにおいて様々なヒンドゥ王が都を築いており、有名なゴールの王アディ スール (Adi Sur) やセナ朝のバッラーラ セン (Balla Sen. 在位 1158-79 年) もここを都としたという地方伝承がある。そして、ビ克蘭プルを拠点とするこれら正統バラモン教の勢力と対峙したのが、ダッカ県を北西から南東に走るブリガンガ (Buriganga) 河とダレッシャリ (Dhaleswari) 両河の北側に広がる広大なモドゥプル (Modhupur) の森林地域を支配し、サヴァル (Sabhar) 近郊やヴァワール (Bhawwal) のカパシア (Kapasias) に都した仏教系の王族 (Booneah Raja と呼ばれる) であった。その遺跡はテイラーの時代にはなお見ることが出来た。彼は、県北部に、ジャルバイグリからアッサムにかけて広く定住する大きな非アーリヤ系部族集団であるクッチやラージバンシ (kuch, rajbansi) が相当数居住することや、王族の名前の類似性などを根拠として、県北を支配した王族は、北ベンガルからアッサム下部にかけて築かれた古代カーマルーパ (Kamarupa) 王国に属していたと考える。

ダレッシャリ河—ブリガンガ河の北岸と南岸のこの対立の構図は、しかし、バッラーラ センがバラモンの姿をしたブラフマプトラ河の息子であり、北岸の森林で生まれ育ったという地方伝承によって止揚される。バッラーラ センは、女神ドゥルガ (durga) に守られて育ち、モドゥプル森林のある場所から隠れた女神像 (dehaka ishwari) を見つけた。バッラーラ センは、この女神像を安置する寺院を建て、その地が現在のダッカ (Dhaka) 市となったというのである。対立する 2 陣営が大河を挟んで対峙したが、やがて統一された歴史が、この伝承に暗示されている様に思われる。

13 世紀初頭にムスリムがベンガルを征服すると、ダッカ地方はイスラム法官達 (kazi) の統治に委ねられ、彼等による行政の中心は、ビ克蘭プル、サヴァル、ショナールガオン (Sonargaon) に置かれた。その後、

表1 ダッカ県行政

地籍事業 (1917)		1872		1881		1891	
Thana	Area	Thana	Area	Thana	Area	Thana	Area
Kapasia	418.42	Kapasia	411	Kapasia	420	Kapasia	420
Keraniganj	311.73	Lalbagh	319	Lalbagh	316	Keraniganj	310
Kotwali	5.63					Lalbagh	6
Sabhar	368.48	Sabhar	388	Sabhar	370	Sabhar	370
Nawabganj	137.94	Nawabganj	148	Nawabganj	160	Nawabganj	160
Sadar Subdivision	1242.2	Sadar Subdivision	1926	Sadar Subdivision	1266	Sadar Subdivision	1266
Narayanganj	127.75	Narayanganj	117	Narayanganj	116	Narayanganj	116
Rupganj	244.68	Rupganj	242	Rupganj	227	Rupganj	227
Raipura	318.18	Raipura	301	Raipura	298	Raipura	298
Narayanganj Subdivision	690.61	Narayanganj Subdivision		Narayanganj Subdivision	641	Narayanganj Subdivision	641
Srinagar	195.85	Srinagar	216	Srinagar	203	Srinagar	203
Munshiganj	173.69	Munshiganj	230	Munshiganj	198	Munshiganj	198
Munshiganj Subdivision	369.54	Munshiganj Subdivision	446	Munshiganj Subdivision	401	Munshiganj Subdivision	401
Sealo	208.84	Jafarganj	203	Jafarganj	172	Jafarganj	172
Manikganj	218.4	Manikganj	230	Manikganj	208	Manikganj	208
Harirampur	102.14	Harirampur	92	Harirampur	109	Harirampur	109
Manikganj Subdivision	529.38	Manikganj Subdivision	525	Manikganj Subdivision	489	Manikganj Subdivision	489
Total of the District	2831.73	Total of the District	2897	Total of the District	2797	Total of the District	2797

注 『地籍事業報告書』及び各回『センサス報告書』より。

植民地支配期ベンガル農業社会の地域構造（III-1）

区画の変遷（1872-1931）

（平方マイル）

1901		1911		1921		1931	
Thana	Area	Thana	Area	Thana	Area	Thana	Area
Kapasia	420	Kapasia	420	Kapasia	139	Kapasia	139
				Sripur	174	Sripur	174
				Kaliganj	107	Kaliganj	107
Keraniganj	310	Keraniganj	310	Keraniganj	62	Keraniganj	62
				Jaidebpur	142	Jaidebpur	142
				Tezgaon	108	Tezgaon	108
Dacca	6	Dacca (Kotwali)	6	Dacca Town	6	Dacca City	6
Sabhar	370	Sabhar	370	Sabhar	137	Sabhar	137
				Kaliakair	117	Kaliakair	117
				Dhamrai	114	Dhamrai	114
Nawabganj	160	Nawabganj	134	Nawabganj	91	Nawabganj	91
				Dohar	33	Dohar	33
Sadar Subdivision	1266	Sadar Subdivision	1240	Sadar Subdivision	1230	Sadar Subdivision	1230
Narayanganj	116	Narayanganj	116	Narayanganj	3	Narayanganj	24
				Fatulla	34	Fatulla	33
				Baidyabazar	73	Baidyabazar	73
				Sonakanda	12		
Rupganj	227	Rupganj	227	Rupganj	155	Rupganj	90
				Narsingdi	77	Narsingdi	87
						Araihazar	58
Raipura	298	Raipura	298	Raipura	129	Raipura	129
				Shibpur	88	Shibpur	88
				Manohardi	95	Manohardi	98
Narayanganj Subdivision	641	Narayanganj Subdivision	641	Narayanganj Subdivision	666	Narayanganj Subdivision	680
Srinagar	189	Srinagar	197	Srinagar	83	Srinagar	83
				Sirajdikhan	63	Sirajdikhan	63
				Lohajang	47	Lohajang	47
Munshiganj	197	Munshiganj	189	Munshiganj	44	Munshiganj	52
				Rajabari	38		
				Tangibari	43	Tangibari	49
Munshiganj Subdivision	386	Munshiganj Subdivision	386	Munshiganj Subdivision	318	Munshiganj Subdivision	294
Sealoo Aricha	172	Ghior (Sealo)	198	Ghior	59	Ghior	59
				Sibalay	66	Sibalay	66
				Daulatpur	75	Daulatpur	75
Manikganj	208	Manikganj	218	Manikiganj	75	Manikiganj	75
				Singair	82	Singair	82
				Saturia	61	Saturia	61
Harirampur	109	Harirampur	94	Harirampur	91	Harirampur	91
Manikganj Subdivision	489	Manikganj Subdivision	510	Manikganj Subdivision	509	Manikganj Subdivision	418
Total of the District	2782	Total of the District	2777	Total of the District	2723	Total of the District	2713

この県との関わりで歴史上有名なのは、フサイン シャヒー (Husain Shahi) 王国を築いたスルタン アラウッディン フサイン シャー (Sultan Ala-uddin Husain Sha. 在位 1493-1519) である。彼は、県北部の強固な砦エクダッラ (Ekhdalla) に本拠を置き、カーマルーパに遠征軍を送り、ベンガルのイスラム系独立王の中で最強を謳われた。その後、ムガル皇帝アクバル (Akbar) の軍勢がベンガルのアフガン系ムスリムを駆逐した時、多くのアフガン系兵士が北部の森林に逃れ砦を築き、抵抗の拠点としたと言われている。

1639 年、スルタン モハッメド シュジャ (Sultan Mohammed Shujah) が州太守になり、ダッカを州都としつつ、国家体制を整備した。彼の下で、アクバルの時代に定められた地税が改訂され、地租額は大幅に増加した。その後、スルタン シュジャは州都をビハール州とベンガル州の境界にあるラージマハル (Rajmahal) に移し、ダッカ地方などの東ベンガルの統治は副太守に委ねられた。1660 年にベンガル太守となったミール ジャムラ (Mir Jamla) は、再び州都をダッカに戻し、彼とその後継太守シャイスタ カーン (Shaista Khan) の下で、ダッカ地方の物価は安定し、繁栄と安寧を享受した。

1704 年、太守ムルシド クリ カーン (Murshid Quli Khan) がベンガルの州都をムルシダバード (Murshidabad) に移し、ダッカ地方は再び副太守 (naib) の統治下に置かれた。その範囲は、北はガロ (Garo) 山地から南はシュンダルバンの大森林、東はティペラ (Tipperah) の山地から西はジョ⁽⁵⁾ショール (Jessore) までの広大なもので、約 15,397 平方マイルに達した。

1765 年、ベンガルにおける英国東インド会社政府の統治が開始され、行政区画の編成替えが行われたが、1793 年の永久地租査定時のダッカ県は、現ダッカ県の他に、バカルガンジ県、ファリドプル県の一部を含んで

いた。1803年のダッカ県の地租は125万ルピーであり、土地所有者数は、従属地主 (dependent talukdar) の独立が許されたことに伴い、16,000人に達した。

大河に囲まれた県であり、河川の造地作用による増地、減地により、しばしば県境が変更され、隣接県との間で土地の交換が行われたが、それを除けば、1871-75年の県区画調整により、ダッカ県とファリドプル県等との境界が定まり、それ以降は、表1に示される様に、県の範囲はほぼ固定され2700～2800平方マイル台を推移している。

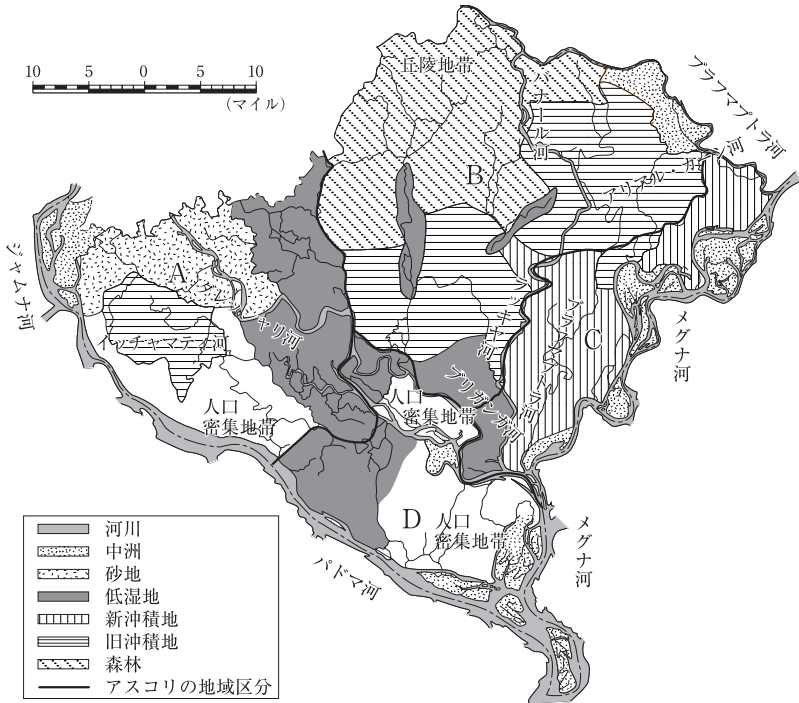
第2章 ダッカ県の地域諸類型

本章では、ダッカ県内の諸地域類型を摘出し、タナ (thana. 警察区) をそれに合わせて再配列する。又、それぞれの地域類型を設定した理由を説明する中で、この県の自然・農業・生態環境に関する簡単な記述も併せて行いたい。

I 地域類型の設定

ダッカ県は、西境をジャムナ河 (Jamuna. ティベット東部に発し、アッサム溪谷を経てベンガル平野に流れ出すブラフマプトラ河の中下流)、南境をパドマ河 (Padma. ガンジス河下流)、東境をメグナ河 (Megna) に囲繞され、これら3大河及びその支流が織りなす水系と県北部の丘陵地帯という2つの要素によって形成されている。実際、センは、この県を、地高が高く、森林や丘陵の多いダッカ市以北の県北と、それを取り囲む様に県東、県西、県南に広がる低湿地帯という2つの地域類型に分けている。(Sen, パラ10) しかし、この県の『地籍事業報告書』の著者アスコリ (F. D. Ascoli) は、低湿地を更にその水系の違いにより3つに分け、ダッ

地図1 ダッカ県生態地形

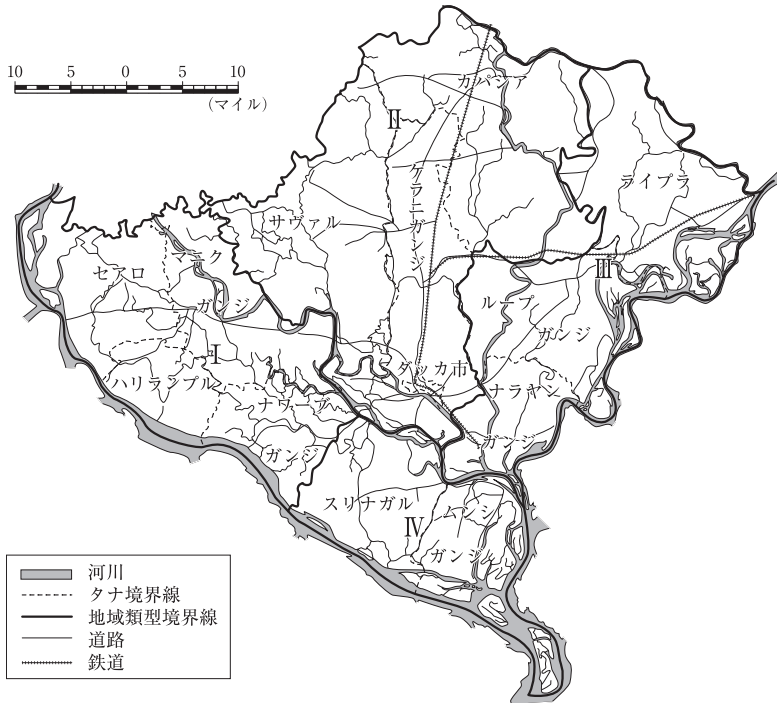


カ県の4地域類型（A, B, C, D）を提示している。本稿では、基本的には、アスコリの4地域類型⁽⁶⁾を採用する。

県西地域（アスコリのA地域）は、沖積地層からなる低湿地帯である。これは、地図1に見られる様に、マニクガンジ地区（Manikganj subdivision）全体、サダル（Sadar）地区のナワーブガンジ（Nawabganj）タナの一部、サヴァル（Sabhar）タナのバンシー（Bansi）河西側の部分からなる698平方マイルである。

県北地域（B地域）は、ダッカ市北部に広がる丘陵・森林地帯である。

地図2 ダッカ県タナと地域類型



サヴァルのバンシー河以東と、ケラニガンジ (Keraniganj) (但し、南部のパンチムディ (Paschimdi) 島を除く)、広大なカパシア (Kapasias) タナ、ループガンジ (Rupganj) タナのラッキャ (Lakhya) 河以西、ライプラ (Raipura) タナのアリアルカーン (Arial Khan) 河以西からなり、合計 1148 平方マイルに達する (地図2)。

県東地域 (C 地域) は、東部の沈降地帯で沖積性の堆積物で覆われる。ライプラとループガンジの東部、ナラヤンガンジ全域からなり、メグナ河沿いに南北に走る地帯である。

県南地域（D 地域）は、ムンシーガンジ（Munshiganj）、スリナガル（Srinagar）の両タナと、ナワーブガンジの 3 分の 1 ほど、そして、ケラニーガンジのパシチムディ島からなり、合計 528 平方マイルである。

II 修正された地域類型

以上が、アスコリによる 4 地域区分である。だが我々はこの区分に、重要な変更を加えなければならない。アスコリの 4 地域は、上述の様に、1 つのタナを分割して設定された場合があるが、我々が利用できる諸統計はタナを単位とする。従って、諸統計を利用する為には、地域区分として多少の問題が生じることになっても、アスコリの 4 地域区分を修正し、タナを単位とした区分に組み直す必要がある。こうして組み直した地域類型を以下で説明しよう（地図 2）。

地域類型 I： 県西の低湿地帯である。A 地域に含まれていたサヴァルの 4 割ほどの低地を地域類型 II に移動させ、他方で、地域 D からナワーブガンジの 3 分の 1 ほどの低湿地帯を受け取る。これによって、第 I 地域は、マニクガンジ地区とナワーブガンジとを併せた地域のみとする。この修正により、面積は 667.3 平方マイルとなり、アスコリの定義した A 地域より、約 30 平方マイル減少する。特に、サヴァル西部の低湿地帯が除かれるが、類型としての均質性が大きく損なわれることはないであろう。

地域類型 II： アスコリの B 地域を中心とする旧沖積土地帯であり、サヴァル、カバシア、ケラニガンジ、コトワリ（ダッカ市外地区）の 4 タナからなる。B 地域に含まれたライプラの約半分、ループガンジの約 4 分の 1 が地域 III に移され、他方、地域 A に属したサヴァルの西部が戻ってくる。この結果、面積は 1,104.3 平方マイルとなり、B 地域より 44 平方マイル減少する。基本的には丘陵・森林地帯であるが、多少の低湿地も含む事になる。

地域類型 III： メグナ河水系とブラフマプトラ河水系の堆積物で覆われた新沖積地帯である。アスコリの地域 C に、地域 B からライプラの東部、ループガンジの東部を移し、結局、ナラヤンガンジ地区を地域類型 III とする。従って、その面積は 690.6 平方マイルとなり、地域 C と比べると 230 平方マイルも膨張する。この結果、地域 C よりも区分内の均質性が低下することは否めない。

地域類型 IV： メグナ河水系とガンジス河水系、ブラフマプトラ河水系により形成された新沖積地帯である。地域 D から、ナワーブガンジの 3 分の 1 強が類型 I に移り、ケラニガンジの南部が類型 II に移る。こうして、類型 IV は、スリナガル、ムンシガンジの 2 つのタナから構成されることになり、面積は、369.5 平方マイルとなる。この修正によって低湿な 2 つの地帯を除くことになるが、残された地域の均質性が損なわれることはない。

III 地域類型のまとめ

修正された地域類型のそれぞれについて、生態学的な特徴をまとめておきたい。

地域類型 I は、西境でジャムナ河、南境でパドマ河という 2 大大河に接する。この地域内部を通る河川では、ダレッシュアリ河（ジャムナ河の支流）が重要である。大河の河岸とシアロの北西部分を除くと、この地域の全体が周囲の河川の河床よりも低くなっている。特に、マニクガンジ地区南部における沈降が顕著である。この地域の新沖積地は、県内の同種の地層中では古層に属し、最も肥沃度が低い。この地域の中央部は過去数世紀にわたって大河の造地作用の影響の外にあった為に、この間、堆積による地高の上昇が見られず、造地作用により上昇した周囲の地域から溢れた水が流入して滞留してしまう。この滞留水の排水は中央部を通るイッチャマ

ティ (Ichhamati), カリガンガ (Kaliganga) の両河川に依存するが, どちらも不十分であり, 滞留状態が長期化する. こうして, マニクガンジ, シアロ, ハリアランブルの浸水地帯は 1 月になると濃緑色に濁り, コレラ, マラリアの温床となる. ジャムナ河岸には広大な砂地の荒蕪地があり, 又, グレッシェリ河の旺盛な造地作用により放棄された旧流路は, 何平方マイルにも及ぶ広大な不毛の砂地と化している. このことは, この地域の農業的, 人口学的な衰退の一因となっている. とはいえ, ナワーブガンジ市を中心とする一帯は, 人口密集地帯をなしている.

以上の状況を, 表 2 & 3 で確認すれば, 総面積に対する沼沢地面積 4.0% (集中度指数 1.3), 河川面積 4.4% (1.34) のどちらも県内で最も高い比率を示している. 又, 竹林や茅場の集中度指数は, 1.61, 1.36 であり, これらも県内で最高の数値である.

地域類型 II は, 隆起した古い沖積地層が大半を占め, そこは鉄分を含んだ固い粘土質の赤色ラテライト土壌 (kunkur) からなるが, 所々に植物腐食物からなる黒土地帯や大小の低湿地も散在する. 又, トウラング (Turang) 河とブリガンガ (Buriganga) 河の合流点, バルー (Balu) 河とラッキャ河にはさまれた地帯等々には, 比較的新しく形成された沖積地もある. 主要部分をなす古い沖積地帯は, その中央部と南部に中位の肥沃度の平野部が存在するが, 北部・北西部は 30 メートルに満たない低い丘陵地帯である. ここをモドゥプルと呼ばれる広大な森林が覆い, 様々な樹木が見られる. 丘陵の麓に存在する窪地 (baid) は植物の腐植土が覆い, 豊かな収量の稲を産する. この地区の沼地は 2 種類からなる. (1) トウラング, バルー両河の河川敷の低湿地. 後者はベライ沼沢地 (Bil Belai) と呼ばれ, 県内で最も広大で制御し難い沼地である. (2) かつては肥沃であった窪地が, 土地の隆起により徐々に水はけが悪化し, 遂に, 不毛な湿地に変わったものである. 県の北東部に被害を出した 1897 年地震

以降に、この様な窪地の衰退が早まった。地籍確定事業の行われた時点までに、モドゥプル森林の大きな部分が開発され、耕地やマンゴー・波羅蜜の果樹園となった。この地域の地高は全体として毎年の氾濫水の水位を上回るが、灌漑は行われていないので、降雨による天水農業のみが行われた。

表3を参照すると、第Ⅱ地域では、県内で突出して大きな森林比率(9.3%、集中度指数2.48)、最も低い河川比率(2.4%)と低い多毛作率(15.4%)、低い冬米比率(34.2%)、高い新旧の休耕地割合(集中度1.51, 1.58)などが見られる。生態学的状況が如実に土地利用状況に反映していると言える。又、未利用の可耕地(9.4%)、非可耕地の割合と集中度がともに最大(9.4%, 1.50; 23.4%, 1.22)であることも、この状況と整合的である。

地域類型Ⅲは、西、南、東をアリアルカーン河、ラッキヤ河、ブリガンガ河、メグナ河、北をブラフマプトラ河の旧流路に囲まれている。メグナ河の支流が網の目の様に張り巡らし、ブラフマプトラ河の最古の流路が南北に走る。この河岸を除くと、殆どすべて新沖積土からなり、土地は極めて肥沃で、排水もよい。旧ブラフマプトラ河の東側は最近出来た乾燥した砂の多いロームの土壌からなり、西側の土壌はより古く更に砂が多い。河岸には竹林があり、ココナッツ、ベテル椰子などが豊かに実る。この為に、高い河川面積比率(3.5%)、純耕地比率(83.4%)が記録されている。

地域類型Ⅳの境界には、パドマ河、メグナ河、ブリガンガ河、ダレッシェリ河などの中～大河が走り、その他に、無数の小さな川があるので、比較的水はけがよい。ムンシーガンジの東と南には新中洲があり、ダレッシェリ、ブリガンガ両河にも、それほど多くはないが、中洲がある。それ以外は新沖積地の中では最古層からなる。この地域の東部は河床より高いが、西部は低地でアリアル沼沢地(Arial Bil)という名前で知られる、県内第2の広大な湿地をなす。この西の低湿地は殆ど無人で未耕地が多い。

表2 土地利

タナと地域類型	耕 作 地							可 耕 非		
	夏 米	冬 米	春 米	雑穀類	合 計	多毛作地	純作付地	旧休耕地	新休耕地	竹 林
ナワーブガンジ	7.4	70.3	35.0	7.2	119.9	37.4	82.5	0.5	0.1	1.0
セ ア ロ	28.5	46.0	33.6	3.7	111.8	39.0	72.8	1.5	0.6	1.4
マニクガンジ	24.6	52.5	44.1	3.0	124.3	48.1	76.2	0.4	0.3	0.5
ハリランブル	16.5	60.3	36.8	7.1	120.6	39.5	81.1	0.3	0.3	2.4
地域類型 I	21.2	55.2	38.0	4.7	119.0	41.9	77.1	0.8	0.4	1.2
カ バ シ ア	28.7	31.6	11.4	7.3	79.1	12.4	66.6	2.3	0.8	0.6
ケラニガンジ	15.3	41.4	13.8	8.0	78.5	10.9	67.5	1.8	0.8	0.5
コ ト ワ リ	0.0	0.0	0.0	9.6	9.6	0.0	9.6	0.0	0.0	0.0
サ ヴ ェ ル	23.9	31.5	26.6	9.2	91.2	22.7	68.5	1.5	0.9	0.9
地域類型 II	23.2	34.2	17.1	8.1	82.6	15.4	67.2	1.9	0.8	0.7
ナラヤンガンジ	30.5	45.7	26.9	5.2	108.4	28.1	80.3	1.3	0.2	0.4
ループガンジ	36.2	47.6	22.7	4.5	111.0	30.1	80.9	0.6	0.3	0.5
ラ イ プ ラ	40.2	42.3	16.2	14.7	113.4	27.0	86.4	0.5	0.4	0.6
地域類型 III	37.1	44.8	20.4	9.4	111.7	28.3	83.4	0.6	0.3	0.6
ス リ ナ ガ ル	28.2	46.5	24.2	5.2	104.1	26.4	77.7	1.5	0.2	0.3
ムンシガンジ	37.7	26.2	23.5	9.4	96.7	23.4	73.2	1.1	0.2	0.5
地域類型 IV	32.3	37.7	23.9	7.0	100.9	25.1	75.8	1.3	0.2	0.4
県 合 計	27.2	42.1	23.6	7.5	100.4	25.9	74.5	1.3	0.5	0.7

注 『地籍事業報告書』, 付表Cより。

表3 土地利用

タナと地域類型	耕 作 地							可 耕 非		
	夏 米	冬 米	春 米	雑穀類	合 計	多毛作地	純作付地	旧休耕地	新休耕地	竹 林
ナワーブガンジ	0.27	1.67	1.49	0.96	1.19	1.45	1.11	0.42	0.23	1.31
セ ア ロ	1.05	1.09	1.43	0.49	1.11	1.51	0.98	1.22	1.18	1.97
マニクガンジ	0.91	1.25	1.87	0.40	1.24	1.86	1.02	0.33	0.51	0.75
ハリランブル	0.60	1.43	1.56	0.95	1.20	1.53	1.09	0.20	0.64	3.32
地域類型 I	0.78	1.31	1.61	0.62	1.19	1.62	1.04	0.61	0.68	1.61
カ バ シ ア	1.06	0.75	0.48	0.98	0.79	0.48	0.89	1.84	1.48	0.88
ケラニガンジ	0.56	0.98	0.59	1.06	0.78	0.42	0.91	1.43	1.53	0.65
コ ト ワ リ	0.00	0.00	0.00	1.28	0.10	0.00	0.13	0.00	0.00	0.00
サ ヴ ェ ル	0.88	0.75	1.13	1.23	0.91	0.88	0.92	1.22	1.76	1.24
地域類型 II	0.85	0.81	0.73	1.09	0.82	0.59	0.90	1.51	1.58	0.93
ナラヤンガンジ	1.12	1.09	1.14	0.70	1.08	1.08	1.00	0.46	0.54	
ループガンジ	1.33	1.13	0.96	0.60	1.11	1.16	1.09	0.46	0.65	0.69
ラ イ プ ラ	1.48	1.00	0.69	1.96	1.13	1.04	1.16	0.37	0.71	0.88
地域類型 III	1.36	1.06	0.87	1.25	1.11	1.09	1.12	0.51	0.64	0.75
ス リ ナ ガ ル	1.04	1.11	1.03	0.70	1.04	1.02	1.04	1.17	0.46	0.47
ムンシガンジ	1.38	0.62	1.00	1.25	0.96	0.91	0.98	0.90	0.32	0.71
地域類型 IV	1.19	0.90	1.01	0.94	1.01	0.97	1.02	1.05	0.40	0.57
県 合 計	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00

注 『地籍事業報告書』, 付表Cより。

植民地支配期ベンガル農業社会の地域構造（III-1）

用（百分率）

非 耕			作 地								総 計
耕 作 地			非 可 耕 地								
屋根 葺草	その他	純可 耕地	居住 地・ 寺院	貯水 池・堀	河川・ 水路	沼沢地	道 路	その他	森 林	純非可 耕地	
0.7	0.8	3.0	6.2	1.7	3.6	1.0	1.7	0.3	0.0	14.4	100.0
3.8	1.1	8.4	4.8	0.8	3.4	4.6	2.2	3.0	0.0	18.7	100.0
0.5	1.2	3.0	4.7	0.8	7.0	6.2	1.8	0.3	0.0	20.8	100.0
2.7	0.6	6.3	5.9	1.2	1.3	1.8	2.2	0.2	0.0	12.6	100.0
1.9	1.0	5.2	5.2	1.0	4.4	4.0	1.9	1.1	0.0	17.7	100.0
0.7	3.4	7.7	2.4	0.7	1.0	3.9	1.7	1.9	14.0	25.7	100.0
1.9	5.3	10.2	4.0	1.6	3.0	3.4	1.3	2.1	6.9	22.3	100.0
0.0	0.0	0.0	69.4	3.0	3.2	6.4	7.6	0.9	0.0	90.4	100.0
2.8	4.5	10.7	3.4	0.6	3.3	2.6	1.4	3.1	6.2	20.8	100.0
1.7	4.3	9.4	3.6	0.9	2.4	3.4	1.5	2.3	9.3	23.4	100.0
1.2	1.3	4.3	6.6	2.3	3.7	1.2	1.2	0.4	0.0	15.3	100.0
1.2	1.6	4.2	5.4	0.9	5.4	1.5	0.9	0.8	0.0	14.8	100.0
0.7	0.6	2.8	5.0	0.4	1.9	2.2	1.2	0.2	0.0	10.8	100.0
0.9	1.1	3.6	5.4	0.9	3.5	1.8	1.1	0.4	0.0	13.0	100.0
0.1	1.0	3.2	7.9	4.7	3.0	1.8	1.2	0.5	0.0	19.1	100.0
0.3	1.5	3.6	6.9	4.0	4.5	5.0	1.1	1.7	0.0	23.1	100.0
0.2	1.2	3.4	7.5	4.4	3.6	3.2	1.2	1.0	0.0	20.9	100.0
1.4	2.4	6.3	4.9	1.4	3.3	3.1	1.5	1.4	3.8	19.2	100.0

（集中度指数）

非 耕			作 地								総 計
耕 作 地			非 可 耕 地								
屋根 葺草	その他	純可 耕地	居住地・ 寺院	貯水 池・堀	河川・ 水路	沼沢地	道 路	その他	森 林	純非可 耕地	
0.48	0.32	0.48	1.28	1.23	1.10	0.32	1.15	0.21	0.00	0.75	1.00
2.73	0.45	1.35	0.99	0.59	1.03	1.50	1.47	2.09	0.00	0.97	1.00
0.38	0.52	0.48	0.98	0.60	2.16	1.98	1.23	0.18	0.00	1.08	1.00
1.94	0.26	1.01	1.22	0.86	0.41	0.58	1.50	0.11	0.00	0.65	1.00
1.36	0.42	0.83	1.08	0.76	1.34	1.30	1.33	0.77	0.00	0.92	1.00
0.48	1.42	1.24	0.50	0.51	0.32	1.27	1.14	1.30	3.72	1.33	1.00
1.36	2.22	1.63	0.83	1.14	0.92	1.09	0.88	1.48	1.83	1.16	1.00
0.00	0.00	0.00	14.28	2.18	0.99	2.07	5.16	0.61	0.00	4.70	1.00
2.00	1.92	1.70	0.70	0.47	1.03	0.85	0.96	2.21	1.65	1.08	1.00
1.23	1.81	1.50	0.73	0.68	0.73	1.08	1.03	1.65	2.48	1.22	1.00
0.85	0.54	0.69	1.35	1.72	1.15	0.37	0.81	0.25	0.00	0.80	1.00
0.84	0.69	0.67	1.10	0.67	1.66	0.48	0.62	0.54	0.00	0.77	1.00
0.50	0.27	0.45	1.02	0.26	0.59	0.72	0.80	0.11	0.00	0.56	1.00
0.68	0.47	0.57	1.11	0.67	1.07	0.57	0.74	0.29	0.00	0.68	1.00
0.10	0.41	0.50	1.63	3.48	0.91	0.58	0.84	0.34	0.00	0.99	1.00
0.25	0.63	0.58	1.42	2.91	1.37	1.61	0.78	1.17	0.00	1.20	1.00
0.17	0.50	0.54	1.54	3.23	1.11	1.03	0.81	0.70	0.00	1.08	1.00
1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00

しかし、その他の地域は、前稿でも度々登場したベンガル東部の郷紳の最大の故地ビ克蘭プルとして知られる一帯である。ここは、1平方マイル当たり2,500人以上という農村としては驚くべき人口密集地帯である。この為に、非常に肥沃な土壌であるにもかかわらず、多くの土地が密集する家敷地で覆われ、耕地は少なく、農作物生産量は小さい。農村であるにもかかわらず、曲がりくねった道が家々の間を走るという都市的な様相を示す。それぞれの家の周りには堀が回らされ、小さな菜園、果樹、椰子、こんもりした森があり、又、堀からとれる肥料は野菜・果樹・砂糖きびの栽培に使われる。敷地内には大小の貯水池が多数散在するが、排水路のある貯水池は殆どなく、無計画に掘られている。その多くは干上がり、雑草が茂り、不衛生であるが、それにもかかわらず、肥料を得る為に、毎年貯水池は掘り続けられている。これがビ克蘭プル農村の景観である。マハラシュトラ州に見られたという農村都市化（rurban）に類似した現象がここにも見られたと⁽⁷⁾いってよい。

ここでは、沼沢地（3.2%）、河川面積比率（3.6%）が比較的高いが、最大の景観上の特徴は、農村都市化状況に対応して、屋敷地が全面積の7.5%（集中度指数1.54）、貯水池が4.4%（3.23）と非常に高い割合を占めたことである。

第3章 人口動態（1881-1931）

本章では、センサス・データに基づいて、1881～1931年のダッカ県の人口動態とその変動要因を、地域類型との関わりで考察する。

本研究は地域社会の実態を地域類型に沿って把握することに重点を置いているから、社会の最も基本的な構成要素である人々の地域毎の変動のあり様は、まさしく、説明されるべき最も重要な変数といえよう。

以下、第 II 節で、各地域類型における人口動態を跡付け、第 III 節において、その要因の初歩的な検討を行う。

I 人口統計利用上の諸問題

前稿で指摘した様に、県やタナの面積は、行政上の理由から多くの手直しが行われるので、表 1 に示される様に、絶えず変動している。従って、タナ人口の絶対数の時系列比較は、人口学的な変動のみならず面積の変動をも含んでしまい、経済的、社会的、疫学的な理由による変動要因を把握する方法としては不適切である。従って、本章の分析では、この様な攪乱の影響が小さい人口密度を用いて分析を進める。

II 人口密度の地域・時系列分析

1 センサス以前の県人口

ベンガル・センサス報告書 (1872) に拠れば、ダッカ県の人口は、1801 年 93.9 万人であり、1824 年、ダッカ県の警察長官による県人口推計は、512,385 名、1851 年 60 万人、1857 年 90.5 万人 (3,218 平方マイル) である。又、ダッカ市の人口については、1801 年 20 万人、1823 年 30 万人 (9 万軒)、1830 年 66,989 人 (治安判事補がダッカ市人口センサスを行い、人家は 10,708 軒だった)、そして、1838 年、テイラーの行ったダッカ市センサスによると、人口 60,617 名、内、ヒンドゥ 28,154 名、ムスリム 32,463 名であった。(Taylor, パラ 266)

既に 1872 年の予備センサスにおいて、ダッカ県の人口は 185.3 万人に達し、ベンガル州内で最も人口周密な地域の一つであった。この時期は、まだ、ジュート栽培が拡大を始めてから 10 年も経過していない (前稿 II, 56 頁) から、この時期のダッカ県の周密な人口をジュート耕作のみに結びつけることは出来ない。

表4 ダッカ県タナ・地

年 度	ナワーブ ガンジ	セアロ	マニク ガンジ	ハリラ ンブル	地域類型 I	カバシア	ケラニ ガンジ	コトワリ
1881	1001.5	831.5	885.6	917.5	905.2	284.6	531.7	15815.2
1891	1066.9	864.8	961.7	920.3	955.0	339.5	601.7	13838.8
1901	1067.8	929.8	998.9	928.9	985.8	415.3	666.4	15613.8
1911	1297.0	798.2	1015.5	1014.8	1007.2	523.8	780.8	18847.7
1921	1395.1	802.2	1084.4	1050.2	1051.2	577.0	856.0	19650.0
1931	1514.0	861.8	1170.4	1164.9	1139.4	676.8	939.1	23086.3

注 各回センサス報告書より作成。

表5 1881年を基準とす

年 度	ナワーブ ガンジ	セアロ	マニク ガンジ	ハリラ ンブル	地域類型 I	カバシア	ケラニ ガンジ	コトワリ
1881	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
1891	1.07	1.04	1.09	1.00	1.06	1.19	1.13	0.88
1901	1.07	1.12	1.13	1.01	1.09	1.46	1.25	0.99
1911	1.30	0.96	1.15	1.11	1.11	1.84	1.47	1.19
1921	1.39	0.96	1.22	1.14	1.16	2.03	1.61	1.24
1931	1.51	1.04	1.32	1.27	1.26	2.38	1.77	1.46

注 各回センサス報告書より作成。

表6 各回センサスの県平均値を基

年 度	ナワーブ ガンジ	セアロ	マニク ガンジ	ハリラ ンブル	地域類型 I	カバシア	ケラニ ガンジ	コトワリ
1881	1.32	1.10	1.17	1.21	1.20	0.38	0.70	20.90
1891	1.23	1.00	1.11	1.06	1.10	0.39	0.70	15.99
1901	1.12	0.98	1.05	0.98	1.04	0.44	0.70	16.39
1911	1.22	0.75	0.95	0.95	0.94	0.49	0.73	17.68
1921	1.22	0.70	0.94	0.91	0.92	0.50	0.75	17.12
1931	1.20	0.68	0.93	0.92	0.90	0.53	0.74	18.25

注 各回センサス報告書より作成。

表7 セン

年 度	ナワーブ ガンジ	セアロ	マニク ガンジ	ハリラ ンブル	地域類型 I	カバシア	ケラニ ガンジ	コトワリ
1881～91	6.53	4.01	8.60	0.30	5.51	19.31	13.16	-12.50
1891～1901	0.09	7.51	3.87	0.94	3.23	22.33	10.75	12.83
1901～11	21.46	-14.15	1.66	9.25	2.17	26.13	17.16	20.71
1911～21	7.56	0.50	6.79	3.49	4.37	10.14	9.63	4.26
1921～31	8.52	7.43	7.93	10.92	8.39	17.31	9.71	17.49
1881～1931	51.18	3.64	32.16	26.96	25.88	137.85	76.61	45.98

注 各回センサス報告書より作成。

植民地支配期ベンガル農業社会の地域構造（III-1）

域類型の人口密度（1881-1931）

サヴァル	地域類型 II	ナラヤン ガンジ	ループ ガンジ	ライブラ	地域類型 III	スリナ ガル	ムンシ ガンジ	地域類型 IV	県合計
472.5	487.2	894.5	723.2	680.3	734.3	1359.5	1229.6	1295.4	756.6
560.7	560.3	1191.4	868.1	802.9	896.3	1546.6	1479.0	1513.2	865.5
637.7	642.6	1362.0	995.1	928.9	1030.8	1787.1	1525.8	1653.8	952.4
715.3	759.3	1618.6	1157.3	1104.3	1216.2	1914.6	1667.8	1793.8	1066.0
759.6	819.9	1790.5	1247.0	1161.0	1306.2	2052.8	2301.5	2150.6	1148.0
826.5	922.2	1799.6	1424.9	1311.5	1444.0	2275.5	2675.9	2413.1	1265.2

るタナ・地域類型の人口密度指数

サヴァル	地域類型 II	ナラヤン ガンジ	ループ ガンジ	ライブラ	地域類型 III	スリナ ガル	ムンシ ガンジ	地域類型 IV	県合計
1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
1.19	1.15	1.33	1.20	1.18	1.22	1.14	1.20	1.17	1.14
1.35	1.32	1.52	1.38	1.37	1.40	1.31	1.24	1.28	1.26
1.51	1.56	1.81	1.60	1.62	1.66	1.41	1.36	1.38	1.41
1.61	1.68	2.00	1.72	1.71	1.78	1.51	1.87	1.66	1.52
1.75	1.89	2.01	1.97	1.93	1.97	1.67	2.18	1.86	1.67

準とするタナ・地域類型の人口密度指数

サヴァル	地域類型 II	ナラヤン ガンジ	ループ ガンジ	ライブラ	地域類型 III	スリナ ガル	ムンシ ガンジ	地域類型 IV	県合計
0.62	0.64	1.18	0.96	0.90	0.97	1.80	1.63	1.71	1.00
0.65	0.65	1.38	1.00	0.93	1.04	1.79	1.71	1.75	1.00
0.67	0.67	1.43	1.04	0.98	1.08	1.88	1.60	1.74	1.00
0.67	0.71	1.52	1.09	1.04	1.14	1.80	1.56	1.68	1.00
0.66	0.71	1.56	1.09	1.01	1.14	1.79	2.00	1.87	1.00
0.65	0.73	1.42	1.13	1.04	1.14	1.80	2.11	1.91	1.00

サス間人口成長率

サヴァル	地域類型 II	ナラヤン ガンジ	ループ ガンジ	ライブラ	地域類型 III	スリナ ガル	ムンシ ガンジ	地域類型 IV	県合計
18.67	15.00	33.20	20.04	18.01	22.07	13.76	20.28	16.82	14.38
13.73	14.69	14.32	14.64	15.70	15.00	15.55	3.17	9.29	10.04
12.17	18.17	18.84	16.30	18.88	17.99	7.14	9.31	8.47	11.93
6.19	7.98	10.62	7.75	5.13	7.41	7.21	38.00	19.89	7.69
8.81	12.47	0.51	14.27	12.96	10.55	10.85	16.27	12.21	10.21
74.92	89.30	101.19	97.03	92.77	96.66	67.38	117.62	86.28	67.21

2 人口変動の地域・時系列分析——センサス・データに基づいて——

1881年から始まる正式なセンサスの数値に基づいて、人口密度を1881～1931年の50年間について計算し整理したものが、表4～7である。これらの表に基づいて、この県の半世紀間の人口動態の概要を県全体、地域類型、タナの各レベルにおいて把握することを試みよう。

対象とする全期間の人口密度成長率についてみると、成長の遅い（年成長率0.46%）第Ⅰ地域と、比較的高い成長（1.25～1.35%）を示した他の3地域（Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ）とに分かれる。

第Ⅰ地域をもう少し詳しく見ると、そこにも年成長率の比較的に大きかった（0.83%）ナワブガンジと、50年間で殆ど人口密度の増加が見られなかった低成長（0.08%）のセアロとに分かれる。この地域の他の2タナは、この両者の間に位置する。だが、この地域では最も早い成長を遂げたナワブガンジも、第Ⅱ～Ⅳ地域の成長率には遥かに及ばない。第Ⅰ地域の4つのタナの人口密度の成長をより詳しく考察すると、表5 & 7に見られる様に、1891～1911年にかけて極めて深い成長の谷間があった。特に、セアロ タナは、1901～11年の10年間に人口密度の急減（-14.5%）を経験し、それに続く1911～21年も殆ど成長はゼロ（0.5%）という軌跡を描いている。ハリランブルは、19世紀末の20年間は殆どゼロ成長が続き、20世紀に入りやっと継続的な成長が始まり、特に、1921～31年の成長は目覚ましい。ナワブガンジでは、1891年のゼロ成長の後、1901～11年にかけて急激な人口成長が生じた。

第Ⅱ地域を見よう。ここで最も特徴的なのは、カパシアにおける持続的で急速な人口密度の上昇である。表7に見られる様に、特に1881～1911年の増加は極めて顕著であった。1911～21年のペースダウンの後、21～31年には、再び、高い伸びを達成している。ケラニガンジ、サヴェール両タナでは、1911年まで早い成長が続いた後、成長は鈍化している。

ダッカ市とその近郊からなるコトワリでは平方マイル当たりの人口が、20世紀になると20,000人に近付き、桁違いの高密度であった。だが、ダッカ市の人口は、1901年までは減少ないし停滞傾向にあり、はっきりした増勢に転じたのは20世紀に入ってからであった。1901～11年に高い伸びを示し、1911～21年の低成長を経て、1921～31に再び高成長を遂げている。

第III地域は、メグナ河西岸の人口の高成長地域であり、ダッカ県内で最も早い人口密度の上昇を遂げた。表5&7によりこの地域を構成する3つのタナの人口成長パターンを観察すると、ライブラ、ループガンジの2つのタナの成長パターンは極めて類似しており、ほぼ全期間を通じて持続的な成長を示している。1881～1921年まで最も高い増加率を示していたナラヤンガンジは、1920年代に入ると人口密度の上昇がピタッと止まった。興味深いのはこの最後の10年間（1921～31年）にループガンジ、ライブラ両タナでは、人口成長の再加速が見られたことである。こうして、高い人口成長を達成した第III地域の3タナにあっても、成長の原動力は同一ではなかった。

第IV地域は、特異な地域である。この地域を構成する2つのタナには大都市は存在しないにも拘わらず、1901年には既に人口密度が1平方マイルあたり1,500人を越し、1920年代には2,000人を超えた。農村地帯としては極めて高い数値である。だが、両タナの人口の伸びのパターンを見るとそこには興味深い差違が見られる。スリナガルでは、1881～1901年の20年間、人口密度は年13～16%の高成長を遂げたが、1901年以降は明らかに成長は鈍った。ムンシガンジでは1881～1891年の急増の後、1891～1901年にかけて人口成長は急速に落ち込んだが、1911年以降、再び急激な人口成長が復活したのである。特に、1911～21年の増加率は38%（年平均3.3%）という極めて著しいものであり、局地的な人口爆発

が生じていたと言っても過言ではない。なお、第 III 地域類型に属するナランガンジでも 1881～1891 年にこれに匹敵する急成長（33%）が見られたことを指摘しておきたい。第 IV 地域の 2 タナは、どちらも農村地帯における人口高密度化、高い比率の非農業人口の存在という典型的な農村都市化現象を示していたのだが、その人口動態の原動力としては、異なる要因が存在したと考えられる。

4 つの地域類型間の人口密度の相対的な関係を示すものとして表 6 を作成した。これを見ると、地域 I は、相対的に人口密度を低下させ、地域 II, III, IV は僅かに上昇させた。全体としての順位を見ると、第 1 位と第 4 位は全期間を通じて変化することなく IV と II であったが、第 2 位と第 3 位は、1901 年までに逆転し、それまで全体で第 2 位の人口密度を有した第 I 地域と第 3 位であった第 III 地域が入れ替わり、それ以後、この両者の順位は固定し、更に、その差は拡大した。そして、第 3 位の第 I 地域と第 4 位の第 II 地域の間にあった大きな差は徐々に縮まっている。以上の観察によって、人口衰退の第 I 地域と成長する第 II, III, IV 地域という対比が可能である。しかし、後者の中でも、地域 II は全期間を通じて相対的な密度を上げたが、地域 III は 1881～1911 年に掛けて上昇した後、1911～1931 年の間は相対的に停滞した。又、地域 IV は 1881～1911 年までは停滞ないし微減したが、それ以降は、相対的に密度を上昇させている。なお、ダッカ市の人口を見ると、1881 年から 1891 年にかけて絶対的にも相対的にも人口を減少させた。20 世紀に入ると徐々に人口は成長したが、相対人口密度（即ち、ダッカ県総人口の中でダッカ市が占める比重）は、1931 年に至っても 1881 年の水準を回復することはなかった。

III 人口変動の要因について

この節では、前節で示した、各地域、タナの人口変動の要因を、『セン

サス』、『地籍事業報告書』から探ることにしよう。

1 ダッカ県の人口変動の要因について——一般的考察——

1881年センサスは、「東ベンガルの人口の著増を否定できない。ベンガル州内でこの地方の住民が最も栄えている」として、「東ベンガルの繁栄」を指摘し、その理由として、地代は低く、市場が発達し、農業が安定し、急速な森林や沼沢地の開発が進行し、ジューツ需要が拡大していることを挙げ、その結果、住民の婚期が早まり、多産（特に、ムスリムの間で）傾向になった、とする。又、「地域の経済活況は、外部からの人口流入を促した。」（1881、パラ 114）とも述べ、地域の経済的繁栄が域内人口の自然増と域外からの人口流入をもたらし、その結果人口の早い成長が生じたと論じている。

1891年センサスは、新たな論点として、ダッカ県は、「ガンジス、ブラフマプトラ両河の洪水により毎年洗浄され、よい飲料水が得られ、衛生状態がよいこと」を挙げた。⁽⁸⁾ 又、人口移動についても一層立ち入った考察が試みられる。即ち、「近接県との出入りはほぼ均衡している。より遠い県・地方で見ると、ビハール州から 17,063 名、他のガンジス上流域から 13,702 名が流入し、他方、カルカッタ市に 13,320 名、バカルガンジ県に 13,550 名を送り出している。その他に、ノアカリ（Noakhali）県、アッサムにも大量に出稼ぎ集団が出ている」と述べ、ダッカ県の人口移動は、移出と移入とがほぼ均衡しているという重要な考察を行っている。更に、「流入者は、殆ど、下層労働者だが、流出者のかなりの部分は、上位カーストの者が書記、専門職の雇用を求めて出て行ったものである。彼等のベンガル州の遠方の諸県への流出は 42,885 名に達する。これらの諸県からダッカへの流入は 9,771 名だから、明らかな出超である。ダッカ県は北インドからヒンディ語を話す労働者を輸入し、弁護士、医者、書記、商人を

ベンガル他県に輸出している。ダッカ県の船頭は多数が他県に船を進めており、彼等の多くは近接県でセンサスされた」、とも述べる。こうして、1881 年報告書で述べられた人口移入が県の人口増加の原因の一つであるという主張は斥けられ、逆に、ダッカ県がベンガルにおける知的労働者の一大供給地であったことが明らかにされた。(1891, パラ 102)

1901 年センサスでは、「発展を続けるジュート工業（圧搾所を指す）へ、ビハール州、連合州から多くの労働者が引きつけられていること」、及び、「家内労働者、街路労働者、駕籠かきなどの多くはガンジス上流域からきた人々」であることが指摘された。(1901, パラ 143) だが、次の 1911 年センサスでは、「ダッカは、……近隣諸県との間では人口移動によって人口を失っている。ベンガル以外からの移入民は人口の 2% 以下であり、その 3 分の 1 はダッカ市内に居る。ダッカからの移出民はベンガル分割時代には減ったが、その後、(東ベンガルと西ベンガルが) 再統合されると、増大した。流入者が減り、流出者が増えているのは人口圧力の増大によるものであろう。」と述べ、ジュート産業の発展に伴い、一方で、ダッカ県への移入民が増加したが、他方で、カルカッタや近隣県への流出も増加し、全体としては、むしろ、流出者が流入者を上回るという帰趨を示している。又、州都が置かれた時期に流出人口が減ったとの指摘も興味深い。(1911, パラ 62)

アスコリは、ダッカ県の人口密度の増勢が衰えなかったのは何故かと問うている。1 エーカー当りの扶養人口を見ると、県平均は 1.68 名、スリナガル(第 IV 地域)は 3.22 名、カパシア(第 II 地域)は 0.82 名と、県内で大きな偏差が見られるが、1 エーカー当りの農産物価値が 57 ルピーであるから、県全体では一人当り 34 ルピーとなる。アスコリは、この農業所得では、この県の人口を扶養できないことは明らかであるとする。それでは、この全体的な所得不足を埋める為に、どの位の労働者が他県に出稼

ぎに出ているのであろうか？ 1911年センサスによれば、ダッカ県内には114,621名の移入者がいるが、他方、150,042名が出ているから、35,421名の出超である。移入者の内、36,019名は連合州、ビハール州、オリッサ州などベンガル州外からダッカ市やナラヤングンジ市に一時出稼ぎ労働者として来た者であり、ベンガル州内からの移入者78,602名の大半は、妻子を伴って県内の農村に永住目的で近隣県からやって来たと考えられる。そのうち、41,930名はマイマンシ県から、12,975名はティッペラ県からやってきた耕作者である。彼等は、森林開発がなお進行中の第II地域（カパシア、サヴァル、ケラニガンジ）とジュート栽培とジュート取引で繁栄する第III地域のライブラ、ループガンジに集中し、全てが、この5つのタナに吸収された。他方、県外に出た者の60%（96,210名）は、他県で農業労働者として働く為に一時的に出稼ぎに出た者である。内訳は、マイマンシン県に35,179名、ファリドプル県に31,757名、ティッペラ県に16,031名、バカルガンジ県に13,243名である。カルカッタへの移出者は16,574名で、主に教育のある層である。いずれにしろ、過大な扶養人口の一部は県外への出稼ぎによって支えられていたといえる。（『地籍事業報告書』、パラ76）

2 各地域類型における人口変動の要因

第I地域の人口に関して、1891年センサスは、成長が殆ど停滞していると指摘し、マニクガンジでは、ダレッシュアリ河の南と西側で衰退が生じ、多くの土地が耕作されず、又、耕作されても収量が低いとする。ハリランプルの人口減少は、河川浸蝕で多くの土地が失われた結果であり、ナワーブガンジでも同様な理由で人口流出が生じたと述べており、本章第2節2項で検出した第I地域の人口動態が的確に認識されている。

1901年センサスは、「河岸地帯は河川の浸蝕に常に脅かされており、か

なりの人口が土地流出地域から新中洲に向かって移動する。特に、ナワール・ブガンジとハリランブルはパドマ河による浸蝕が大きく、人口が抑制された」とする。(1901, パラ 144)

1911 年センサスは、人口停滞が見られる「マニクガンジ地区は農業的には肥沃だが、不健康な為に人口を失っている」と指摘し、河川浸蝕に加え、疫病を人口抑制因として示唆した。(1911, パラ 27) 特に、この地区のセアロ……は、パドマ河とダレッシュリ河に挟まれ河川による土地浸蝕が甚だしく、人口流出が生じ、人口成長率が……低下したと指摘している。(1911, パラ 260)

1921 年センサスは、マニクガンジ地区の人口衰退要因として、マラリアの被害に注目する。この為に、この地区では 20 世紀初頭の人口成長率は僅かであったし、その前の 20 年間の増加率も低位だった。中でも、1901～11 年のセアロでは人口減少を記録した。しかし、1912 年の大洪水がマラリア発生源を押し流した様であり、その後は改善が見られ、僅かではあるが、増加に転じ、地区全体では 10 年間で 4% の人口成長増加があったとする。ただし、1910 年代の人口回復を全てマラリアとの関連だけで論じてよいかについては疑問が残る。

アスコリは、第 I 地域の人口衰退のメカニズムを次の様に説明する。ここでは、人口衰退は県の最西端のセアロのパドマ河河岸地域でまず始まり、そこを基点としてハリランブルに及び、更に、ナワール・ブガンジ、マニクガンジへと拡大した。パドマ河の堆積物がこの一帯の地高を押し上げ、域内の排水システムを破壊し、自然の流水を妨げ、浸水状態が恒常化した。この滞留水がマラリア蚊の大量発生培養池となり、この地域の死亡率を引き上げ、それと共に、出生率も下がり、人口増加率は急速にゼロに接近したというのである。人口衰退の直接因はマラリアの発生であり、乾季にコレラ、天然痘が流行ったこともこれに拍車をかけた。(『地籍事業報告書』、

パラ 79)

第 II 地域は新たな人口成長地帯であり、それは、「森林の開拓、耕作の拡大によってもたらされた。」しかも、ここにはなお、耕作拡大の余地がある。1901 年センサスは、この頃には、第 III 地域に次いで県内第 2 位の人口成長地帯となったこの地域について、「県北は様相が異なる。地高が上がり、土壌も堆積土から固い粘土に変わる。ここでは人口は過疎であり、様々なモンゴロイド系部族民による開発が進んでいる。この県北では冬米が中心で、氾濫水ではなく天水による農業が行われる」と、指摘している。(1901, パラ 143) 1921 年報告書も、モドゥブルの森林はなお広大で、多少の米作地はあるが、人口扶養力は低く、人口密度は低い。だが、この旧沖積地帯でもジュート作が大きく拡大し、急速な人口増加が生じた。その人口成長の速度は、河岸の新沖積地帯では見あたらないほどのものである、と記している。(1921, パラ 62)

第 III 地域は、ダッカ県のジュート栽培、ジュート取引において中心的な地位を占める。早くも、1881 年センサスは、この地域の急速な人口成長とジュートとの関係を見抜いて、「ダッカ県の 14.21% という高率の人口増加は、ジュート取引の拡大による。収税官によれば、1877 年の時点において、県内のジュートの集まるナラヤンガジ市でのジュート売買は、県内の全地代をまかなうのに十分な所得を農民にもたらし、更に、80～130 万ルピーの剰余を与えた。」と指摘している。(1881, パラ 115) 1891 年センサスも、「最大の人口増加」の生じたナラヤンガンジ地区長官の次の様な報告を引用している。「1872 年のセンサス以降、地区内全域で人口が相当に増加した。その理由は、過去 20 年間に農民がジュート作を拡大し、又、良好な天候に恵まれたことにある。……（この人口増加は）、この地区内に広大な森林地帯や荒蕪地があり、ジュート取引の拡大に応じて耕作が拡大する余地が豊富にあった（ことによって可能になった）。」

(1891, パラ 103) 1911 年センサスも, 「ナラヤングンジ地区は, 肥沃で米, ジュートに適 (する). …… (この) 地区の 18% の人口増加は, 地区内に均等に生じている. ここは肥沃な健康な土地で, しかも, ジュート産業が拡大しているので, ガンジス上流から多くの人々が集まる.」としており, 1921 年センサスも, ジュート作付けの大きいこの地域で, 最も急速な人口増加が生じていると述べ, ジュートによる人口増加が過去 40 年間にわたって続いたことを示している. (1911, パラ 27; 1921, パラ 62) ジュート生産が大きな打撃を受けた筈の 1931 年センサスも, ダッカ県の過去 10 年で特に増加率が大きいのはナラヤングンジ地区の 12.9% であるとして, 依然, この地域の人口増加が続いたことを報告している. 過去 10 年間は, 工業, 運輸業の特別な発展はなかったし, 目立つほどの移住民の流入もなかったから, この間の増加は自然増による. (1931, パラ 67)

アスコリも, 2つのタナ (ライプラ, ループガンジ) では, 最近では森林の大半が耕地化されたが, 1872~1911 の年人口増加率は 3% に達した, と第 III 地域で人口爆発が生じたことを指摘している.

第 IV 地域でも, 早い人口増加が見られた. 1891 年センサスは, その理由として, 地区長官の報告を引用し, 「マラリアが発生しないこと, 毎年の洪水が土地を洗い流し清浄にすること」を挙げている. だが, センサス担当官も指摘する様に, 「この地区ではコレラの害が大きいから, この説明は不⁽¹⁰⁾充分」である. この年の報告書は, 又, この地域がよく知られる様に, 「郷紳の故郷である. 彼等は, 書記, 教育を受けた政府役人や私的な事業所の事務官などの職を占める. 彼等は, 農業に直接に依存するのではなく, 広い分野から生計を得る」とし, この地域の農村都市化現象を可能にしたメカニズムを示唆している. 1911 年センサスも, 最高の人口密度を抱える「ムンシガンジ地区では, 住民は農業には余り頼っていない. ここでは, 農業に依存する人口は 51% のみであり, 極めて多数の男子は書

記などの仕事をしに外に出ている」という指摘を行っている。この報告書は更に「ムンシガンジ タナの人口密度は東ベンガルで最高であり、ここからは、人口が外に出ている。ムンシガンジ タナではこうして人口増加にブレーキが掛かったが、スリナガルでは人口増が続く」として、第IV地域内のタナ間の異なる特徴に言及する。（1911、パラ 260）1921年センサスは、人口密度が高いにもかかわらず、人口成長が続くこの地域の人口動態は、「ビクランプルの人々の知性が逆境を乗り切ったことを示す」と述べている。（1921、パラ 62）

こうして、高人口成長を続けた結果、1931年センサスは、「ダッカ県南のタンギバリ（Tangibari）、ロハジャング（Lohajang）などでは、人口密度が実に……3,000人を超えている。ムンシガンジ地区の平均は2,413人である。」と指摘する。実は、「タンギバリは北側でダレッシェリ河、南側でパドマ河による浸蝕を被った。スリナガル、ロハジャングでも河川浸蝕があったが、その被害のあった住民はタナの内側の地域に移ったので、人口減少は生じなかった。同様の被害のあったタンギバリでは、住民はタナの外に移住した」のであり、タンギバリの高い人口密度はこの逆境にも拘らず達成されたのである。この一つの理由として、報告書は、「この10年で、県の衛生状態と保健施設が大幅に改善している」ことを挙げている。（1931、パラ 67）

アスコリは、スリナガルは、インドで最も人口密度の高い農村地帯であるが、そこでの急激な人口増は、主に巨大な沼沢地（アリアル沼沢地）の開発による、と述べる。この開発によって増加した人口の大半はムスリムが占め、このタナに多数存在するヒンドゥー郷紳の増加は少なかった。これが、1901～1911年の期間における、スリナガルと隣のムンシガンジとの人口増加率の差を説明するであろうとして、センサス報告書では言及されていない。沼沢地開発に注目している。（『地籍事業報告書』、パラ 78）

第4章 社会経済構成の諸指標

I 社会諸集団の地理的分布

ここでは、ダッカ県の住民を構成する基本的な集団であるヒンドゥとムスリムの地理的分布をまず大掴みに捉える。それぞれの集団内部に存在する更なる諸区分の分布状況については、続く II, III で見ることにしよう。

表 8 が、基本的な事実を伝える。県全体で見ると、ヒンドゥとムスリムの人口比は 37% 対 63% であるが、地域毎にその分布状況にかなり大きな偏差が見られる。

地域 I は、県平均とほぼ同水準の割合で両社会集団が分布しており、4 つのタナの間にも大きな違いは見られないが、強いて言えば、ナワールガンジのヒンドゥ人口がやや大きい。

第 II 地域は、構成する 4 タナの内、カパシアにおいてムスリムが人口の 69.6% を占め、県平均よりヒンドゥの割合がかなり大きい他の 3 つのタナ（44～54%）と異なった様相を示す。県内で最もムスリム人口比の高い県東や県外からムスリム人口が流入しているのかもしれない。又、ダッカ市とその近郊からなるコトワリは、ダッカ県内で最もヒンドゥ人口が大きい地域をなしている。

第 III 地域は、人口の 76% がムスリムであり、メグナ河川沿いの開発が主にムスリムによって行われたという指摘に合致した分布である。中でも、県北東のライプラは、人口の 81% がムスリムであり、県内で最もムスリム人口の割合が高い。この第 III 地域では、港湾都市ナラヤンガンジを含むナラヤンガンジ タナにおいて、比較的にヒンドゥが多い。

地域 IV は、旧ビ克蘭プル郡を含む上位ヒンドゥ多住地域として著名であり、確かに、県内で最もヒンドゥ人口の割合が大きい地域である。ス

植民地支配期ベンガル農業社会の地域構造（III-1）

表 8 宗教別人口分布（1901 年）

タナと地域類型	人 口			比 率		
	ヒンドゥ	ムスリム	県人口	ヒンドゥ	ムスリム	県人口
ナワーブガンジ	67190	98416	165606	40.6	59.4	100
セ ア ロ	56782	101479	158261	35.9	64.1	100
マニク ガンジ	69639	135963	205602	33.9	66.1	100
ハリ ランプル	37919	62185	100104	37.9	62.1	100
地域類型 I	231530	398043	629573	36.8	63.2	100
カ パ シ ア	52331	119964	172295	30.4	69.6	100
ケラニガンジ	89036	115586	204622	43.5	56.5	100
コ ト ワ リ	48139	41419	89558	53.8	46.2	100
サ ヴ ェ ル	102035	132700	234735	43.5	56.5	100
地域類型 II	291541	409669	701210	41.6	58.4	100
ナラヤンガンジ	48832	106741	155573	31.4	68.6	100
ループガンジ	57692	163280	220972	26.1	73.9	100
ラ イ プ ラ	52309	223763	276072	18.9	81.1	100
地域類型 III	158833	493784	652617	24.3	75.7	100
ス リ ナ ガ ル	173108	162676	335784	51.6	48.4	100
ムンシガンジ	117438	182209	299647	39.2	60.8	100
地域類型 IV	290546	344885	635431	45.7	54.3	100
県 合 計	972450	1646381	2618831	37.1	62.9	100

注 1901 年センサスより。

リナガルは、コトワリと並んで、人口の過半数（52％）がヒンドゥである。しかし、ムンシガンジでは、ヒンドゥ人口は 39％であり、県平均を上回るとはいえ、地域Ⅱのケラニガンジ、サヴァル、ナワーブガンジの 3 タナよりもヒンドゥ人口比が低い。タナの東半分がメグナ河の中洲地帯であることが、このやや意外な結果をもたらしているのかもしれない。

なお、県内のヒンドゥ人口の25%が、ダッカ市とナラヤンガンジ市に住んでいる。

II ムスリム社会

ダッカ県のムスリム社会については、テイラーやリズレイ資料集成（特に、「モハメダンの間の宗教的社会的区別」という巻のバサー（Jogendra Kumar Bose）とチャンドラカル（Chandrakar）の2つの長大な報告書⁽¹¹⁾）が貴重な情報を与えてくれる。

1 ムスリム諸階級

他県と同様にダッカ県でも、殆どのムスリムはシェイク（Sheikh）であり、サイイド（Sayyid）、モゴル（Mogul）、パタン（Pathan）など上級ムスリムはごく少数である。モゴルはダッカ市内に集中し、農村には殆どいない。よく知られる様に、ムスリムは、シーア派とスンニー派とに大別されるが、県内でシーア派はモゴルのみであり、その他は全てスンニー派である。

アシュラフ（ashraf. 上層ムスリム、貴族）、アトラフ（atraf. 下層ムスリム）という言葉は当県のモハメダンは使わない。上層ムスリムは名門（bhadon）ムスルマン又はミア（miah）と呼ばれ、下層ムスリムは農民（grihasta）ムスルマンと呼ばれる。前者は大抵は地主や政府役人であるが、後者には、農業を行ったり、労働者、屋根葺き、船頭などの肉体労働を行うこの県のムスリムの大多数が属す。下層モハメダンは上層モハメダンと並んで座ることは許されず、許可なしに椅子に座ることもできない。モスクで礼拝（namaj）を行う時には、名門階級は前の席を占め、下層階級はその後に座る。

結婚の際に両者の違いが更にはっきり見られる。上層ムスリムの男が下

層ムスリムの娘を嫁にすることは例外的にありうるが、その逆は通常は禁じられている。だが、下層ムスリムの男が財を成せば、膨大な花嫁料を払うことによって、これが可能となる。

チャンドラカルは、マニクガンジ地区の状況を報告している。この地区のムスリムは地方改宗者が大半を占め、外国起源の家族は数家族のみであるという。正真のサイイッドを主張し得るのはあるチョードリー (Chowdhuri) 一族だけである。だが、彼らは、今や貧窮化し、インド・ムスリムとの結婚を繰り返している。カーン (Khan) 一族はパタンの末裔で 11 世紀中頃にダッカ太守の役人 (amin) であったミール カーン (Mir Khan) の子孫だという。彼は、ヒンドゥーザミンダールの娘を妻とした。

ムスリムには第 3 の階級があり、一般に外道 (berabi) と呼ばれる。彼等は、「道から外れ」、宗教規則を厳格に守らず、未だに、ヒンドゥー俗信を信じ、ムスリム聖者 (pir) に供物 (shinni) を捧げる者である。その数は非常に多数とはいえないが、ファライジー (Farizi) の信者よりは明らかに多く、その大半は、ダレッシュアリ河東岸 (第 II 地域) に住む。(Bose, Note II-A)

2 改宗

ヒンドゥー世界の東端に位置するダッカ県で人口の約 63% をムスリムが占めるという状況が、何時、どの様にして、出現したのかに関しては、19 世紀以降今日に至るまで種々の見解が表明されてきた。テイラーは、1565 年、シーザー フレデリック (Caesar Frederick) が「サンディープの住民は回教徒である」と記し、又、16 世紀末のパーチャス (Purchas) の旅行記集成に、「海岸近くの住民は大半がモハメダンである」とあることなどを根拠にして、イスラム勢力がベンガルを征服した時点には既に東部諸県にムスリムが大量に定住し、メグナ河口の住民の主要部分を為したと

考えている。(Taylor, 第8章)

バスーは、次の様に述べる。ダッカ市内には旧太守の末裔がいるがその数はとるに足らない。ムスリム兵士がベンガル征服後に定住し、住民を強制的に改宗させ、その女を妻にしたという説も否定できない。実際、チッタゴン県には、イスラムの地方司令官(hajaris)が知行地(jagir)を得て部下の兵士と共に定住した入植地が見出される。しかし、このような征服者とその兵士の他に、ダッカ県では最下級ヒンドゥーからの改宗者がいる。改宗したのは主に下級ヒンドゥーであり、上級ヒンドゥーの改宗者は殆ど見られない。この事は、県内のキリスト教への改宗者が殆どチャンダーラ又はジュギー カーストであったことから類推される。

19世紀末においても、ヒンドゥーがムスリムに改宗した例が数多く報告されている。その多くは、宗教を超えた恋愛をきっかけに、改宗している。現地のムスリム社会は、彼等を丁重に受け入れたのである。(Chandra-kar, Note II-A)

県内のムスリムの間にカースト的差別が存在していることから、彼等の大半は下層カーストからの改宗者だと考えられる。彼等は劣った地位に甘んじており、通常のムスリムとの通婚はできない。彼等は、ムスリム改宗後も、ヒンドゥーにおいて下層とされた職業を維持したからである。

3 社会的差別を受けるムスリム(最下層ムスリム)

ムスリム社会の内部には幾つもの亀裂があった。よく知られているのは、既に述べた上層ムスリムと、その他の農民・労働者階級からなる圧倒的多数の下層ムスリムの区別である。だが、前稿でも指摘した様に、後者の中にも更に幾つもの社会的差別を受ける集団が存在した。

テイラーは、「下層ムスリムは職業と雇用によって幾つかの集団に分かれ、カースト的な性格を持つ。結婚、食事において、彼等はヒンドゥーと同

様に極めて厳しく排除されている」と述べている。そして、このような差別の中に置かれた集団は、それぞれ、別個の内婚集団をなした。テイラーは下層ムスリムとして 15 集団、バサーは社会的差別を受けるムスリムとして 12 集団、チャンドラカルは 10 集団を挙げる。多くは共通するので、ここでは、バサーの 12 集団を示そう。1. クル (kulu. 搾油業), 2. ジョラハ (jolah. 織工. ヒンドゥのジュギー jugi に対応), 3. バイディヤカル (baidyakar. 楽師. ヒンドゥのノト not 又はムチ muchi に対応), 4. ダファダール (daffadar. 蓆製造業. ヒンドゥのブナ buna 又はチャンドール chandal に対応), 5. マヒファラシュ (mahifarash. 漁師と魚屋. ヒンドゥのジャリア jalia に対応), 6. ニカリ (nikari. 魚屋), 7. ダイ (dai. 産婆), 8. ハジャム (hajam. 散髪屋. 割礼も行う.), 9. カハール (kahar. 駕籠かき. ヒンドゥのナマスードラ namasudra に対応), 10. ベルダール (beldar. 労務者. チャンドールに対応), 11. ヴェディア (vedia. 更に 5 つの小集団に分かれ行商する。小刀, 釣り針売り, 蛇使い, 鳥取り, 曲芸師など), 12. ガヤン (gayan. ヴェディアと同じ職種だが, 冬を過ごす家を持ち, 雨季には船で香辛料等を行商する)。

こうして、職業差別に基づくカースト的な差別がムスリム社会にも入り込んだ。諸集団は、それぞれ他から分離された閉鎖集団となり、通常のムスリムとの通婚は普通は許されない。更に、これらの集団内の亜集団も、相互の通婚はしない。1901 年のセンサスで、これらの差別された集団はシェイクと記録されることを強く望んだが、一般のシェイクはそれに反対した。(Bose, Note I)

これらのムスリムの最下層階級は、通常のムスリムと自由に交わったり通婚することは許されず、一方の階級のムスリムが別の階級のムスリムを社会的な儀式に招くことはない。だが、食事を共にしても上層ムスリムが身分を失うことはなく、ただ非難されるだけである。

ムスリムの各集団は、通常、自分達のモスクを持ち、そこで礼拝を行う。だが、他の集団のモスクに入ることは自由だし、そこでは、平等に扱われている。この点は、バスターが意見を聞いたすべての聖職者 (maulvi) が認めている。通常の葬式には、聖職者が呼ばれる。この時、彼は料金を取らない。(Bose, Note I)

4 ムスリムの社会組織

テイラーは、ムスリムのかがり縫い職人 (ruffogur) と魚屋 (mahifarash) には、ヒンドゥの「結社」(dal) と類似の組織がある、と述べる。前者の組織長の地位は世襲で、祭りの時に最も良い場所に座り、食事を2倍得る。争いを調停し、規則違反(同じ結社の構成員の宴、葬式、宗教祭事への出席の拒否など)に罰金を科す。後者の長は、構成員に義務を守らせ、全体に関わる揉め事を調停する。彼は、毎日、構成員から貢納を集め、その代わりに、年末に宴を開き、構成員に馳走を振舞う。(Taylor, 第8章)

5 ドゥドゥ ミアとケルマット アリ

前稿でも述べた様に、ダッカ地方でムスリムの新たな宗派ファライジー (Faraizi) が興り、ダッカ県、ファリドプル県、バカルガンジ県、マイマニンシン県に急速に拡大し、テイラーによれば、この教義は、これら諸県のムスリムの6分の1を信徒にした。特に、ダッカ市内では、ムスリムの3分の1に達すると推定している。彼等はモラルが高いが、他派に厳しく、市内でしばしば衝突と紛争を起こしている。(Taylor, 第8章) テイラーのこの記述から約60年を経た19世紀末に、チャンドラカルは、この地方のムスリムは皆スンニーであり、その大半はケルマット アリ (Keramat Ali) の改革教義の信奉者であると報告している。ムスリムの中で有力で

教育ある人々はケルマット アリに従っている。他方、ファライジーの信徒は少数で、マニクガンジ地区では、僅か5ヵ村に限定されている。信徒の間では、指導者ドゥドゥ ミア (Dudu Mia) の影響力は強く、その息子は、村のザミンダールより上位に置かれている。(Chandrakar, Note II-A)

6 ムスリム俗信

先に述べた様に、ムスリムの間に、外道と呼ばれる人々がいる。しかし、この外道的な行動は、ダレッシュアリ河東岸の住民の間だけではなく、実は非常に広く根深く、この県のムスリムの間に染み込んでいた。最下層ムスリムの大半は外道であるが、彼等の内でも教育を受けたり、商業で儲け地位が上がると、外道を改め、ケルマットの改革教義に変わっていく。

だが、政府勤務のあるムスリム紳士は、休暇を終え任地に戻る時、出発の日をヒンドゥの暦法に則って決める。彼は、明らかに改革派ムスリムであるが、常に出発の日をこうして決めている。彼だけでなく、ムスリムが商用で旅に出る時や結婚式を行う際には、ヒンドゥの暦を見て吉日を選ぶことは、一般的に行われていた。又、礼拝堂 (masjid) の建設は、全てのムスリムの最大の願望だが、そこで日に5回行う「参集の呼びかけ」(ajan) には、近隣の悪魔を祓う意味もあると村のムスリムは考えている。(Bose, Note I)

ヒンドゥとムスリムの混住する地域では、両者は、社会的に又宗教的にも自由に交流する。ドゥルガ女神の祭りにはヒンドゥの家に女神像を見に行く。他方、ヒンドゥもムスリムの宗教的供儀に加わる。しかし、このヒンドゥとムスリムの間の交流は、徐々に消滅しつつあった。(Bose, Note I)

ムスリム大衆の俗信としては、村の女性が時々墓廟 (darga) を訪れ、

供物を捧げ、又、病気の時などは、墓廟に住むファキール (fakir. ムスリム苦行僧) に治癒を願ったり、大河の船旅に出る時に無事を祈りムスリムの5聖人 (Paunch Pir) の名を厳かに唱えたり、子牛が生まれ、最初の母乳を与えた時に牛の守護神 (goraksha) に詣でたり、ファタマ (Fatama) への崇拜、家畜と作物の守護聖人 (Manib Pir) の信仰、疫病聖人 (Shah Zinda Madar) の祭り、河の守護神 (Bhuddur) への祈りなどがあった。これらには、ムスリムのみならずヒンドゥもしばしば参加し、供物を捧げた。高位カーストのヒンドゥは、これらを行わなくなったが、下層ヒンドゥは続けている。

ムスリムの間で、ヒンドゥの俗信 (不吉な時間の忌避、災厄払いの彩色土碗の懸架、戸に米粉で丸を描くチャンダールの風習) の多くも、行われている。

又、外道ムスリムは、「真実の聖人」(Satya Pir) の祭りをなお行うが、これは、ヒンドゥの「真実の神」(Satya Narain) の祭り (puja) と極めてよく似ている。彼等は、又、上記の各種の俗信の強固な支持者である。(Bose, Note I)

7 ダッカ県のムスリム諸集団の地理的な分布

この県のムスリム社会が、一色では塗りつぶせないことは最早明らかである。最後に、センサス データからムスリム諸集団の地理的分布を数量的に把握しよう。

この県のムスリム人口のうち、パタン、サイイドなど上層ムスリムは0.9%と極めて少ない。一般ムスリム農民と考えられるシェイクが95%と圧倒的な大部分を占め、社会的差別を受ける最下層のムスリムは、5%である。最下層のムスリムの中では織工が79%と飛び抜けて大きい集団をなし、次いで、搾油業が10%である。前稿でも述べた様に、フェライジ

植民地支配期ベンガル農業社会の地域構造（III-1）

表9 ムスリム諸階層のタナ・地域類型への集中度指数（1901年）

タナと地域類型	ベディヤ	ベルダール	ジョラハ	クル	ナガルチ	ニカリ	下層ムスリム合計	バタン	サイイッド	シェイク	ムスリム合計
ナワーブガンジ	1.98	1.53	3.76	0.62	0.00	1.32	3.13	2.78	0.53	0.89	1.00
セ ア ロ	3.38	0.60	2.52	0.75	0.36	1.17	2.19	0.79	1.91	0.94	1.00
マニクガンジ	1.24	0.78	1.94	0.94	0.16	1.62	1.72	2.16	0.65	0.96	1.00
ハリランブル	0.43	0.36	2.49	2.42	0.65	3.52	2.34	1.69	1.45	0.93	1.00
地域類型 I	1.85	0.85	2.62	1.04	0.25	1.73	2.28	1.89	1.07	0.93	1.00
カバシア	0.35	0.00	0.00	1.24	0.26	0.00	0.14	0.46	0.59	1.05	1.00
ケラニガンジ	0.06	0.00	0.24	0.22	0.07	0.13	0.22	1.86	0.34	1.03	1.00
コトワリ	0.15	0.00	0.01	0.01	0.00	0.70	0.04	3.19	7.96	1.01	1.00
サヴァル	1.51	0.00	1.56	1.30	0.52	2.57	1.48	1.87	2.01	0.97	1.00
地域類型 II	1.00	0.62	0.00	0.57	0.85	0.26	0.94	0.59	1.59	1.72	1.01
ナラヤンガンジ	0.00	0.00	0.00	0.17	0.09	0.56	0.04	0.10	0.26	1.05	1.00
ループガンジ	0.27	0.11	0.01	1.70	2.09	0.00	0.27	0.30	0.12	1.04	1.00
ライブラ	0.47	0.00	0.01	1.53	2.84	0.00	0.29	0.13	1.32	1.04	1.00
地域類型 III	0.30	0.04	0.01	1.29	2.00	0.12	0.23	0.18	0.70	1.04	1.00
スリナガル	1.51	7.84	2.11	0.04	1.01	0.75	1.93	0.86	0.55	0.96	1.00
ムンシガンジ	1.43	0.07	0.11	1.31	1.59	2.15	0.38	0.08	0.45	1.04	1.00
地域類型 IV	1.47	3.74	1.05	0.71	1.31	1.49	1.11	0.45	0.50	1.00	1.00
県合計	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00

注 1901年センサス報告書より。クル、ベディヤ、ベルダール、ジョラハ、ニカリは本文を見よ。ナガルチの職業は確認できなかった。

ー運動の創始者シャリアットウッラー（Shariattulah）は最下層ムスリムの最大集団である織工集団に属したから、織工の分布とこの運動の広がりとの関連が検討されて然るべきであろう。

次いで、それぞれの集団の県内分布を見る。

ムスリム人口中の最大集団であるシェイクは、ほぼ均等に県内に分散しており、各タナへのムスリム人口に対する集中度指数は、表8に見られる様に、0.89～1.05という狭い範囲に収まっている。

上位ムスリムであるパタン、サイイドの分布は偏っており、前者は、コトワリ（ダッカ市）、ナワーブガンジ、マニクガンジで高い集中度指数を示しており、第I、II地域に85%が集中している。サイイドも同じく第I、II地域に集中しているが、表9をよく見ると、コトワリ、サヴァル、ハリランブル以外では、パタンとサイイドの集中度指数には逆相関が見られるのは興味深い。両者の間に一種の棲み分けが見られるのである。

最下層ムスリムでは、織工の63%が第I地域に集中し、それにサヴァルとスリナガル両タナを加えると、県内の織工の97%に達する。この様に、織工の分布には、強い偏りがみられる。

他の最下層ムスリムも多かれ少なかれ偏った分布を見せる。即ち、ヴェディヤは、セアロ、ナワーブガンジ、サヴァル、スリナガルの4タナで集中度指数が1.5を超え、そこに約60%が居住し、労務者（beldar）は、スリナガルに実に78%が集中し、搾油業者は、ハリランブル、ループガンジ、ライプラで指数が1.5を超え、この3タナに全体の47%が住み、魚屋は、マニクガンジ、ハリランブル、サヴァル、ムンシガンジの4タナで指数が1.5を超え、全体の71%が居住している。

ダッカ県のムスリム社会を研究する上で、これらの数値は重要な手掛かりを与えるであろう。

III ヒンドゥ社会

1 カースト組織

19世紀中葉のダッカ県の自治的なカースト組織について、テイラーは、「ヒンドゥは、彼等の社会的交際でダール（dal）という仲間集団（結社）に分かれている。同一カースト内にしばしば一つ以上の結社があり、同一家族員が別々の結社に属することも珍しくない。各結社には長がおり、ブラフマンらの間では結社長（dalpati）と呼ばれ、織工、金細工師、床屋

などでの間ではプラマニクと呼ばれる。結社間の集团的闘争はダラダリ (dala dali) と呼ばれる。同じ結社の構成員は相互に訪問し、もてなし合い、カースト規則・慣行の侵害について審理し、構成員の行動を監視する」と述べている。これは、同一家族が異なる結社に属し得ることなどから考えて、ダッカ市内の職人ギルドの記述と考えるべきであろう。(Taylor, 第8章)

ダッカ県収税官ラウキン (I. T. Raukin) は、リズレイ資料集成に収められた「準カーストの起源とカースト順位」に関する報告 (1901年12月20日付け⁽¹²⁾) の中で、カースト自治組織パンチャヤート (panchayat) に言及している。洗濯人カーストである「ドーパは、……2つの準カーストに分かれる。ラームのドーパ (Ramer dhop) とシータのドーパ (Sitar dhop) である。この区分は昔からのもので、両者の身分はほぼ互角であるが、通婚は禁止されており、一緒に食事、飲水、喫煙も自由ではない。2つの準カーストそれぞれがパンチャヤートを持つ。」(Raukin, パラ 29) 動物の死体処理と生皮商い、太鼓叩きを生業とするリシ (ムチとも言う) には古くから3つの準カーストがある。どれも同じ職業を行うが、別々のパンチャヤートを持ち、飲水、食事、喫煙を共に自由に行うことは出来ず、通婚も出来ない。(Raukin, パラ 30)

ラウキンの報告書で明示的に自治組織の存在が示されたのはこの2カーストだけであるが、他の多くのカーストも内部に同様な準カーストを抱え、それぞれの間の社会的交際は制約されていたから、その様な制約を課し、守らせる為の自治的機関が存在したと推測する事が許されるであろう。⁽¹³⁾

2 ダッカ県における幾つかのカースト集団

(i) 上位カースト

ここでは、この県の郷紳層をなすヒンドゥー上位カーストを一瞥する。

ラウキンによれば、この県のブラフマンには、広く知られたラリ、バレンドラ、バイディク (rarhi, barendra, baidik) の他に、アグラダニ (agra-dani), ラグナチャリヤ又はガナク (lagnacharya or ganak), バルナ (barna) などの下層ブラフマン (通常 barna Sarma という名前をもつ) がいる。

アグラダニは下層カーストの葬式において死者を聖化した炊飯米を食べ、喜捨 (dan) を最初に受け取る為に、墮落していると見なされる。彼等は、高位ブラフマンとは全く別個の階級をなし、他のバラモンとは、飲み食いはもとより喫煙も共に出来ず、彼等との通婚は論外である。他のバラモン準カーストに受容されることもない。

バルナ ブラフマンは、下層カーストの司祭を勤める為に、この名前で呼ばれる。上位ブラフマンは、スードラ、ナバサク (浄カースト) の司祭となるが、不浄カーストの司祭となるのはバルナ ブラフマンのみである。彼等は、司祭を勤めるカーストごとに、異なる準カーストに分かれる。彼等は、下級カーストの司祭となったと同時に身分を失い、ナバサクは彼等から水を受け取らない。彼等は、上位カーストと同じ血統に属すことは認められている。従って、上位ブラフマンと食卓、喫煙を共に出来ないが、挨拶をすれば返礼はしてもらえる。上位ブラフマンらは、チャイタニヤ⁽¹⁴⁾ (Chaitanya) の時代以降、ゴスワミン (goswamin) と呼ばれ、下級カーストのグル (導師) となる者が現れた。だが、決して下級カーストの司祭職にはならなかった。

ラグナチャリヤは占星術師であるが、上位カーストと血統的に繋がっているかさえ疑わしいとされる。彼らには上位ブラフマンは挨拶を返さない。上位カーストと社会的に交わることは許されず、一緒に食事し、水を飲み、喫煙することも全くない。

3つの上位ブラフマンの社会的地位はほぼ同等である。バイディク プ

ラフマンは、学識と高い浄性の故に、又、彼等は、最近まで他のブラフマンの司祭のみを行い、ブラフマン以外のカーストの司祭としては如何なる勤行も行わなかった故に、ラリ、バレンドラより上位にあると主張している。上位3ブラフマンは、飲水、喫煙を共にし、食事と共にしうが、通婚は行われない。それぞれ、各々のサマージによって導かれている。上位ブラフマン間でも、他の準カーストの者を受容することはない。

ダッカ県のバイディヤは、全てバレンドラ系である。19世紀末になって、バイディヤ友好協会 (ambastha saumidani sabha) の会員は聖紐を着け、バッラールの伝承に縛られる同カースト員を軽蔑し、しばしば通婚を拒否する。ダッカ県のバイディヤは、ファリドプル県、ジョジョール県、ナディア県のバイディヤとは通婚するが、ブラフマプトラ東岸のバイディヤとは通婚しない。金の為にこれを行った者が19世紀末に出現したが、他のバイディヤとの社会的交際を断たれた。(Raukin, パラ 11)

カーヤスタには4つの準カーストがあるが、当県にはその内の1つのみが居り、他の準カーストとの通婚は禁止されている。だが、食事、喫煙は共にできる。テイラーによれば、ダッカ県では、彼等は、通常、ザミンダールに雇われる法曹、書記、会計などとなるが、1つの準カーストは、料理人や召使 (ベアラー)、菓子職人、米、塩、バター油 (ghee) の市内の小売商などになっている。(Raukin, パラ 13)

(ii) 浄カースト (ナバサク nabasakh 又はスードラ sudra)

テイラーは、バッラール センの定めた9つの清浄なカースト (nabasakh) は、スードラに含まれるとする。この内、県内では織工 (タンティ tanti) が最も多い。ラウキンによれば、ダッカ県のタンティ又はバサク (basak) は、2つの準カースト (ラリとバレンドラ) に分かれる。ダッカ市内のタンティはバレンドラであり、ラリより上位であると主張し、通婚を禁じている。カルカッタ、ムルシダバード両市のバサクは皆ラリで

あるといわれ、ダッカ市のバサクと食事、飲水、喫煙は自由に行われるが、メンバーの受容は行われない。(Raukin, パラ 14)

サンカリ (sankari) は、貝の腕輪を作る職人であり、富と人数においてダッカ市内でタンティに次ぐ存在である。ダッカ市創設以来、全員が1つの市場地又は街区 (bazar or street) に住むことを命じられてきた。(Taylor, 第8章)

散髪職人 (napit) カーストは、大半がティッペラ県から来ており、外科兼床屋である。このテイラーの記述に対して、ラウキン、更に詳しい記述を与える。散髪職人には、ブラフマンに水を渡せる通常の散髪職人とサハの散髪職人 (sahar napit) がいる。後者は、サハ カーストの髭を剃る。両者は全く別のカーストとなっており、食事、飲水はおろか喫煙も、共にできない。但し、前者も、カーストを失うことなくサハの髭を剃ることができる。かつては、サハの散髪職人は、爪は切らなかったが、サハの富と力が増すにつれ、この制限もなくなってきた。通常の散髪職人はムスリムの髭を剃ることができるが、下級カーストの髭を剃れない。これは、ムスリム政府が、ムスリムの髭を剃ることを強制した結果だという。現在、散髪職人は西洋人の髭を剃ることを名誉と考えている。

菓子屋散髪職人 (madhunapit) という人々が居る。彼等は、ラウキンの調査時には菓子製造業者であったが、元来は、散髪職人であったのかもしれない。彼等の先祖は聖チャイタニヤの髭を剃ったので、通常の散髪職人より高い地位にある。彼等は、通常の散髪職人と社会的に交わる。

ナマスードラ散髪職人 (namasudra napit) と呼ばれる人々も居る。彼等は、ナマスードラと同じ社会的地位にあり、両者は社会的に交わっていることを考えれば、ナマスードラの中からこのサービスをする者が出て来たと考えられる。(Raukin, パラ 18-21)

これらの他に、鍛冶屋 (kamar)、真鍮細工師 (khangsari)、壺作り (ku-

mar), 牛飼い (sadgop, gowallah), 生花職人 (malakar), 香料商人など4つの商人カースト (banik) が, 清浄なカーストと位置付けられていた.

(iii) 不浄なカースト

ここには, 様々な商業に携わる多くの階級の人々が属し, 県内ヒンドゥー人口の大きな部分を占める. テイラーは前述のガナク ブラフマンをここに位置付ける. 彼等は, 神像の製作, 塗装, 飾り付けを行い, 又, ピクランブルの学僧が作製した暦を写し, 占星術師, 占い師としても働き, しばしば, 罪を疑われた者の神裁を行う. 同様に, アグラダニ ブラフマンもここに位置付けている. (Taylor, 第8章)

スバルナバニク (subarnabanik. 金細工商人) カーストは市内のポッダール (poddar. 両替え商) と英国商品を扱う店舗所有者の大半を占める. 彼等は, 布, 宝石, その他も扱う. ラウキンによれば, バニク (商人) は, 一つのカーストが多数に分裂した良い例である. 彼等は, 元来単一のカーストで, 内部に5つの区分—香料商人 (gandhabanik), 真鍮商人 (kausabanik or kansari), サンカリ商人 (sankhabanik or sankhari), 布商人 (tantrabanik or tanti), 金細工商人 (subarnabanik) —があったが, 現在では, それぞれ, 全く別のカーストとなっており, 金細工商人以外は浄カーストであり, ブラフマンに水を渡すことが出来る. だが, 金細工商人は, バッラール セナの怒りに触れ浄性を失い, 不浄カーストに落とされたとされる. (Raukin, パラ 16-17)

商人のサフカル (sahukar) について, テイラーは, 彼等はバレンドラサハ (塩, 穀物, 砂糖, ベテルナッツを扱い, 村の店主ともなる) とラリサハ (醸造業者) の2つに分かれると言う. 若干名は豊かで, 近隣に地所を持つ. ラウキンもサハがラリとバレンドラに分かれ, 県内の最も豊かなサハがバレンドラに属するのでバレンドラ サハが上位にあると主張し両者

は通婚はしないが、その他の社会的交わりは自由に行う、と述べる。

洗濯人 (dhobi) は、ダッカ市、ショナルガオン、ダムライに住み、商人に雇われて高級綿布 (モスリン) の漂白を行う。農村部では、洗濯人は裕福な家族にのみ雇われ、貨幣か穀物で報酬を受ける。会社がここで商業を行っていた頃は、毎年 30 万ルピーを彼等に支払っていたので、当時、商館に雇われていた若干の家族は裕福になり、1830 年代でも市内にかなりの不動産を持った。(Taylor, 第 8 章) 先にも述べた様に、洗濯人カーストは、ラームの洗濯人とシータの洗濯人に分かれる。両者の身分はほぼ互角であるが、通婚は禁止され、互いに受容する事もなく、一緒にの食事、飲水、喫煙も自由ではない。

大工 (sutar, sutradhar) は、多数居り、近隣の森で伐採し、製材し、船や犁を造る。ラウキンの時代になると、カトリア ミストリとチルクティ ミストリ (katuria mistri と chirkuti mistri) の 2 つの準カーストに分かれており、前者は材木を商い、後者は押し米 (chira) を作り売る。前者が上位を主張し、通婚をしない。ラウキンは、後者が大工から押し米の製造販売に商売替えをしたのはそれほど昔のことではないとする。(Raukin, パラ 24)

死体火葬人 (dhome) は、市内にのみ住み、豚を飼い、バスケットを造り、犬殺しとしても雇われる。彼等に近い存在に、皮革職人 (chamar) と掃除人 (bhuimalli) がいる。前者は、生皮を鞣し、靴、馬具、ドラム、綿実の除去用の弓の腸線を作り、結婚その他の行進時の音楽隊となり、後者の大半は市内の清掃人として雇われている。

リシ (rishi, 又は, muchi) は、3 つの準カーストに分かれが、職業は同じで、生皮の商いと太鼓叩きをする。彼等は、それぞれ上位を主張し、別々のパンチャヤートを持ち、飲水、食事、喫煙も自由には共に行えず、通婚もしない。

ナマスードラ (namasudra 又は chandal) は、下層ヒンドゥーの中で非常に人数の多い集団であり、県北のヴァワールその他の地所の農民の最大部分を占め、又、草刈、庭師、船頭、市内・県内の駕籠かき、運び台担ぎの大きな部分を占める。テイラーの時代には、まだ、ナマスードラの呼び名は知られていなかった。ラウキンは、彼等の内部にすくなくとも7つの準カーストがあるとする。最上位はバグナル (baggнал) で、今や、別のカーストに近い。他に、ハルワ (halwa. Hal 犁から、耕作者)、バルハイ (barhai. 大工)、ベルア (berua. Ber という竹製の魚取用具から、漁師)、カラル (karal. 魚屋)、ハナ (hana. 奴隷。結婚式などのサービス)、カハル (kahar. 駕籠かき) がいる。この中で、ハルワとバルハイは上位を主張する。両者は通婚するが、それ以外の準カーストとの通婚は行わないし、食事、飲水さえ共にしない。ラウキンは、これらの準カーストは職業による区分であり、最近発生したと考えている。ナマスードラは、準カーストに関わらず、同じ司祭が勤行し、又、もし、下位の準カーストの者がその職業を止め、上位の職業を始めれば、やがて、上位の準カーストに受容されうる。(Raukin, パラ 26)

ジュギー (jugi) は、ダッカ県とマイマンシン県に居住する下層ヒンドゥーのもう一つの大集団である。他の下層カーストと同じく、彼等はバルナブラフマンを持ち、結婚や祭りを祝う。だが、一般のヒンドゥーと異なって、死者を火葬せず、土葬する。ジュギーは、元来はパール王家 (Pal Rajah) の仏教徒の司祭であったという説もある。ベンガル各地に居るが、特にガンジス河東岸に最も多い。彼等は織工であり、男も女も機を織る。彼等の製品は通常の現地粗布であるが、炊いた米の糊を用いるので、他の織工は彼等を非常に不浄な人種だと見なす。農民が雹から作物を守る為に雇うシアラリ (shealari) は、魔力を持つと考えられており、ダッカ、マイマンシン両県の多くの村に居る。彼等はジュギーであり、貨幣と穀物の

給与を村人達が共同で払っている。ジュギーにも最近 2 つの準カーストが生じた。一つは、マハトマ ジュギー (mahatma 又は mahanta jugi) で、聖紐を着け、シヴァ寺院で司祭を勤め、耕作はしない。もう一つは、ナート ジュギー (nath jugi) で、聖紐をつけず、耕作を行う。前者は後者の作った食事に触れないが、飲水、喫煙は共にする。だが、通婚はしない。ナート ジュギーは、もし耕作をやめ、上位カーストの振る舞いを身につければ、マハトマ ジュギーになることができる。(Taylor, 第 8 章)

これらの他に、不浄カーストとして、麻袋商人 (kapalli), マット職人 (patial), パトニー (patni は渡し守であり、余暇にバスケットを作り、魚の売買をする), カイバルタ (kaibarta. 農民カイバルタ (chasa kaibarta) と漁師カイバルタ (jalah kaibarta) に分かれる), 漁師カースト (jalia. ジャロ, マロ, ラージバンシ, ティオール (jhalo, malo, ranj-bansi, tior) の 4 つの準カーストに分かれる), タンブリー (tambuli. ベテルの葉の販売. テッパリー (teypalli), 即ち、油、穀物、塩商いも行う), グルワル (gurwaru. ダッカ特有の人々. カワウソ (皮を利用), 亀, イルカ (医薬用油), 鰐 (医薬用油) などを獲って生計を立てる), ブッディヤ (bhudiya. 水上生活者であり、紫貝や小真珠をとり、装身具などを作り、市場で売る. ビーズ, 装身具, 亜鉛や錫の指輪, 虎の爪の首輪 (子供用), 葉, 香辛料, 櫛 (hanna. 織工の道具となる竹の櫛) などを作る. 他のジブシーと同様、家禽を好み、船に鶏, アヒルを沢山飼う. あらゆる動物の肉を食い、麻葉 (ganjah) や酒を飲み、非常に不浄な存在と見なされている) などがいる。

(iv) 森の住民

クッチ (kuch) とラージバンシー (rajbansi) は、北部森林に住み、他の人々とは全く異なる顔や特徴を持つ。頬骨が突き出し、顔は平面で、細くつった臉をしたモンゴル系の人々である。周りのヒンドゥーやムスリム

よりずっと頑強で、明らかに、ラングプル県やアッサムの同名の人々と同じ人種である。ダッカ県北部の先住民であり、かつてブリガンガ河まで拡大していた古代カムルーパー王国の残党であろう。彼等は、県北のヴァワール、コシムプル (Cossimpore)、アッティアの森林、モドゥプル森林の全域に居住しており、斧と鋤で森林を開拓し、米、油性種子、棉花を栽培し、木炭を作り、鹿の角を集め、近傍の週市で売ったり、酒と交換する。クッチは開発した土地に地代を払うことを嫌い、耕地を捨て、より森林の奥に退き、再び開発を始める。ザミンダールは、彼等から地代を徴収することは殆どなく、その代わりに、彼等は、地主に要請された時には、銃士や戦士として働く。クッチは2~3の孤立家屋からなる小さな村に住み、羊、山羊、鹿、野豚、水牛の肉を食い、酒を飲む。ラージバンシーは、肉食をせず、ヒンドゥーの一般的慣行を守り、ヒンドゥーから排除されたとは考えていない。だが、彼等には司祭も床屋も居らず、ヒンドゥーは彼らがヒンドゥー教徒であるとは認めていない。クッチとラージバンシーの外見は変わらない。彼等は、独自の言葉を保持している。県北部とマイマンシン県に広がるモドゥプル森林に住むものを合わせて、8,000名ほどになる。以上は、テイラーの観察であるが、ラウキンは彼等に関する記述を残していない。(Taylor, 第8章)

(v) 宗 派

なお、ブラフマン、バイディヤ、カーヤスタの上位3カーストの7分の8、淨カーストの中では鍛冶屋、真鍮細工師は、カリ (Kali) 信者である。他方、上位カーストの残る8分の1、全ての織工 (タンティ)、貝細工師の半分、商人 (サフカル) の4分の3は、クリシュナ信徒 (ヴェイシュナヴ) である。テイラーの時代には、ダッカ市内に3名の導師 (ゴサイン) が居り、県内外に多くの信徒を持ち、毎年、布施を集めた。これらの導師は修道院 (akhara) を持ち、そこには、300名の修行僧 (bairagi)

が住んだ。(Taylor, 第8章)

3 ヒンドゥ諸集団の地理的な分布

以上の質的な考察に続いて, 1901年センサス データからヒンドゥ諸集団の地理的な分布を数量的に把握しておきたい。⁽¹⁵⁾ 我々が依拠するセンサスのタナ別カースト統計は, ダッカ県について43カースト(最大はnamasudra 235,541名, 最小はmallah 1,057名)を挙げている。ここでは, 主要なカースト(人口比2%以上とする)の各地域類型への分布状況, 幾つかのカーストの特定のタナへの集中という2点を見ることにしたい。

(i) 主要カーストの地域類型への分布状況

表10は, 人口1万人以上のカーストの各地域類型・タナへの分布状況を示している。

ダッカ県内諸カースト中で最大集団は, ナマスードラ(24.2%)であり, 次いで, カーヤスタ(8.8%), サハ(7.3%), ブラフマン(6.8%), カイバルタ(5.8%), スードラ⁽¹⁶⁾(3.8%), マロ(3.4%), ゴアラ(3.3%), パルイ(3.1%), ナピート(2.5%), カパリ(2.3%), ティヤール(2.3%), チャマール(2.3%)と続いている。

ナマスードラは, あえて言えば, 第II地域の集中度指数がやや高い(1.2)が, 3つの地域に比較的に均等に分布しており, 分布に著しい偏りのあったファリドプル県と好対照をなす。カーヤスタは, 第I, III地域の指数がやや高く(1.2), 第II地域で低い。サハは, 第I地域で高い集中度(1.6)を示し, 第IV地域ではかなり低い(0.5)。ブラフマンは, 当然予想される様に, 第IV地域に非常に厚く集中し(1.7), 他の3つの地域への集中度は低い。カイバルタは, 第III地域に高い集中度(1.3)を示すが, 他の3地域にもかなり均等に(0.9~1.0)分布している。スードラは, 第IV地域において極めて高い集中度(1.9)を示し, 郷紳層が高い割合で奴

隷を所有したことが窺われる。マロは、第 I, III 地域で高い集中度 (1.5 ~ 1.6) を示し、他方、第 IV 地域には非常に少ない (0.3)。ゴアラは、第 IV 地域に厚く存在し、ムスリム人口の多い第 III 地域には少ない。バルイは、第 IV 地域に極めて高い集中度 (2.5) を示し、他方、第 I, II 地域には非常に少ない (0 ~ 0.3)。ナピートは、第 II 地域で少なく、その他の 3 地域には比較的均等に分布している。カパリは、第 I 地域に極めて高い集中度 (2.5) で存在する。他方、第 III 地域には皆無に近い。そして、ティヤールとチャマルは、第 I, II 地域に集中し、第 III, IV 地域には少ない。以上が、人口比 2% 以上を占める 13 カーストの各地域への分布状況である。

(ii) カーストの集中性

上では、地域類型を単位としてカーストの分布を見たが、より仔細にセンサス統計を検討すると、多くのカーストが特定の数タナに集中していることが分かる。即ち、多くのカーストの分布は、我々の設定した地域類型よりはるかに小さな範囲に収まっている。

この点を捉える為に、特定カーストの特定タナへの集中を示す表 11 を用意した。この表は、上位 3 タナまでに、各カーストの何%が居住するかを示す。これによると、県内 43 カースト中、10 カーストが上位 3 タナで 80% を超え、次いで、60 ~ 80% が 8 カースト、そして、50 ~ 60% が 9 カーストであり、ここまでで 27 カーストに達する。これらの高い集中度を示す 27 カーストについて、集中する上位 2 タナを地域毎に抽出したのが表 12 である。

特定のタナへの高い集中を示すカーストを見ていくと、集中する契機として、(1) 都市・商業センターの存在 (バグディ、カパリ、タンティ、ジュギー、サンカリ、スバルナバニク、マイラ、マッラ、クルミ)、(2) ブラフマンやバイディヤの存在 (スードラ、ドバ)、(3) 原料入手や生産の

表10 ヒンドゥ諸カーストのタナ・地域類型への分布 (1901年)

タナと地域類型	Ahir and Goala	Baidya	Barui	Bhuin mali	Brah- man	Chamar	Dhoba	Jogi and Jugi	Kaibartta	Kamar and Lohir	Kapali	Kavastha	Kumar
ナワーブガンジ	4.2	0.1	0.0	2.5	4.4	3.9	0.5	0.2	5.7	1.7	0.3	7.0	4.0
セ ア ロ	1.6	0.4	0.0	1.2	5.2	2.1	0.6	0.9	3.9	1.7	7.1	18.7	1.4
マニクガンジ	3.0	0.8	0.0	1.3	5.0	5.3	0.3	0.3	4.4	1.7	10.1	5.0	1.3
ハリランブル	1.0	0.7	0.2	1.6	4.6	2.7	0.8	0.6	7.6	2.2	6.5	16.1	2.1
地域類型 I	2.7	0.5	0.0	1.7	4.8	3.7	0.5	0.5	5.2	1.8	5.9	10.8	2.2
カ パ シ ア	2.5	0.7	2.9	1.1	3.1	1.5	2.1	4.2	12.1	1.1	0.0	5.8	1.6
ケラニガンジ	3.2	0.4	1.0	0.9	3.3	2.7	0.4	0.9	4.6	1.2	0.8	5.5	2.5
コ ト ワ リ	5.8	2.7	0.2	0.4	9.5	2.6	2.5	0.2	1.6	2.6	0.0	14.1	4.8
サ ヴ ェ ル	3.0	0.4	0.0	0.8	4.4	3.8	0.3	0.0	3.5	2.1	3.4	4.0	2.6
地域類型 II	3.4	0.8	0.8	0.8	4.7	2.8	1.1	1.1	5.1	1.7	1.4	6.5	2.7
ナラヤンガンジ	3.6	1.1	4.0	1.1	5.9	1.9	1.2	2.0	2.1	1.5	0.1	13.8	3.4
ルーブガンジ	1.5	2.5	4.1	1.3	5.4	1.2	0.9	4.7	10.8	1.4	0.0	10.2	1.0
ラ イ プ ラ	1.1	0.7	1.1	1.8	3.7	2.0	1.5	6.6	9.9	1.3	0.2	8.7	1.3
地域類型 III	2.0	1.5	3.1	1.4	5.0	1.7	1.2	4.5	7.8	1.4	0.1	10.9	1.9
スリナガル	4.5	0.8	7.1	2.0	10.7	1.3	1.7	1.6	8.2	1.4	1.0	8.6	2.4
ムンシガンジ	3.8	2.7	9.2	0.9	12.2	0.5	2.5	3.4	2.9	2.2	2.4	8.5	1.9
地域類型 IV	4.2	1.6	8.0	1.5	11.3	1.0	2.0	2.3	6.1	1.7	1.6	8.6	2.2
県 合 計	3.3	1.1	3.1	1.3	6.8	2.3	1.2	1.9	5.8	1.7	2.3	8.8	2.3

注 1万人以上の人口のカーストについて百分率で表示, 1901年センサス報告書より.

表 10 つづき

タナと地域類型	Malo	Muchi	Namasudra (Chantal)	Napit	Rajbansi (Koch)	Sudra	Sunri or Shaha	Sutradhar (Chhutar)	Tanti and Tatwa	Teli and Tili	Tiyar	Total Hindus
ナワーブガンジ	3.7	0.0	34.8	2.3	0.0	2.0	12.3	1.8	0.1	0.4	5.2	100.0
セ ア ロ	9.3	0.5	19.2	3.0	0.2	1.9	7.5	3.1	1.3	0.2	2.1	100.0
マニクガンジ	4.0	1.3	22.7	2.2	0.2	1.6	13.4	4.3	3.8	0.4	3.6	100.0
ハリランブル	5.9	0.0	17.1	3.7	0.0	2.0	11.7	2.2	0.2	1.5	2.6	100.0
地域類型 I	5.5	0.5	24.4	2.7	0.1	1.8	11.3	2.9	1.5	0.5	3.5	100.0
カバシ ア	6.8	0.2	14.7	2.9	13.0	2.0	1.8	1.9	0.1	0.4	0.4	100.0
ケラニガンジ	4.0	2.4	45.5	1.5	1.1	2.9	4.2	0.8	0.4	0.8	3.7	100.0
コトワリ	0.9	1.0	2.0	1.0	0.0	2.3	11.4	1.6	12.1	2.5	1.0	100.0
サヴェル	1.8	0.5	31.8	1.6	3.2	1.5	10.6	3.6	2.3	1.0	5.6	100.0
地域類型 II	3.2	1.1	28.0	1.7	3.8	2.2	7.2	2.1	2.9	1.1	3.3	100.0
ナラヤンガンジ	2.8	1.1	24.6	1.9	0.0	3.2	9.0	1.4	0.6	1.2	2.5	100.0
ルーブガンジ	3.0	3.3	20.7	2.9	0.0	4.9	8.5	2.0	0.8	0.9	0.9	100.0
ライブラ	9.6	1.2	22.6	3.7	0.0	1.7	7.2	4.1	0.5	2.8	0.0	100.0
地域類型 III	5.1	2.0	22.5	2.9	0.0	3.3	8.3	2.5	0.6	1.6	1.1	100.0
スリナガル	0.4	1.1	24.3	3.1	0.0	6.5	4.1	0.3	0.3	4.1	1.0	100.0
ムンシガンジ	2.2	0.5	16.6	2.9	0.0	8.6	3.0	1.0	0.5	3.7	0.8	100.0
地域類型 IV	1.1	0.9	21.2	3.0	0.0	7.3	3.6	0.6	0.4	3.9	1.0	100.0
県合計	3.4	1.0	24.2	2.5	1.2	3.8	7.3	1.9	1.5	1.9	2.3	100.0

表 11 カーストの地域的集中

	Ahir and Goala	Bagdi	Baidya	Baishnab (Bairagi)	Baniya	Barui	Berua	Bhuin mali	Brahman	Chamar	Dhoba
上位 1 タナ	24.5	57.7	30.4	13.1	29.2	40.2	66.8	26.0	28.3	17.3	24.6
上位 2 タナ	38.6	83.0	43.9	25.3	52.3	75.6	80.3	39.0	50.1	33.8	48.9
上位 3 タナ	48.3	94.7	56.7	36.4	69.1	83.3	89.5	47.4	57.0	45.7	59.0
	Doai (Dioyai)	Gandha banik	Jogi and Jugi	Kahar	Kaibartta	Kamar and Lohir	Kapali	Kayastha	Kumbar	Kurmi	Malakar (Mali)
上位 1 タナ	76.7	19.9	22.3	17.3	25.0	15.5	31.1	17.3	18.6	42.1	17.7
上位 2 タナ	87.5	37.3	41.2	32.6	36.1	30.0	49.0	29.7	30.5	53.4	34.7
上位 3 タナ	94.1	51.6	56.3	43.4	47.1	43.1	64.3	41.3	42.2	62.3	46.8
	Mallah	Malo	Mayra	Muchi	Munda	Nama- sudra (Chandal)	Napit	Nuniya	Patial or Patikar	Patni	Rajbansi (Koch)
上位 1 タナ	48.3	15.7	29.0	21.4	60.5	17.8	21.6	35.3	47.8	13.7	59.9
上位 2 タナ	75.5	30.7	49.5	40.6	79.6	35.0	35.8	46.5	77.8	25.8	88.6
上位 3 タナ	90.9	41.3	57.4	59.3	88.7	48.8	43.8	57.4	89.8	36.2	97.2
	Rajput (Chhatra)	Sankhari	Subarn abanik	Sudra	Sunri or Shaha	Suraj bansi	Stradhar (Chhutar)	Tanti and Tatwa	Teli and Tili	Tiyar	Total Hindus
上位 1 タナ	29.4	84.2	31.9	30.4	15.2	56.4	19.5	41.0	38.6	25.4	17.8
上位 2 タナ	46.9	89.1	53.3	57.4	28.4	79.4	35.6	59.8	61.9	41.0	29.9
上位 3 タナ	61.4	92.3	67.7	65.0	40.0	100.0	47.0	76.0	69.8	55.7	40.4

注 上位 3 タナまでに、県内の当該カーストの何パーセントが居住するかを示す。Kurmi は農耕カースト、Berua は、農耕・漁業カースト、Mallah は Kapali と類似のカースト、Bagdi、Munda、Nuniya はドラヴィダ系の人々、Patni は下層漁民カースト、Patial はマット作り、Doai、Suranbansi は、モンゴル系の人々。他は、本文を見よ。

好条件（テリ、バルイ、サンカリ、ガンダバニク、ティヤール）、(4) 森林・未開地帯の存在（ドアイ、ムンダ、ラージバンシ、スールラージバンシ）、を読み取ることができよう。

逆の操作を行うことによって、県内に比較的均等に分布する 10～11 のカーストが浮かび上がってくる。即ち、バイシュナヴ、チャマール、カハール、カマール、カバリ、カーヤスタ、クンバル、マロ、ナピート、サハ、スッタルダールである。バイシュナヴは例外だが、その他は、生活上の基

植民地支配期ベンガル農業社会の地域構造 (III-1)

表 12 上位 2 タナまでに 50% が集中するカースト

地 域 類 型	上位 2 タナ		
	80% 以上	60～80%	50～60%
地域類型Ⅰ	Bagdi (セアロ, マニク)	Kapali (マニク, セアロ) Tanti (マニク)	Nuniya (セアロ) Tiyar (ナワープ)
地域類型Ⅱ	Doai (カバシア) Mallah (ダッカ) Munda (サヴァル, ケラニ) Rajbansi (カバシア, サヴァル) Sankari (ダッカ) Surajbansi (サヴァル, ケラニ)	Kurmi (ダッカ) Rajput (ダッカ, ケラニ) Subarnabanik (ダッカ) Tanti (ダッカ)	Gandhabanik (サヴァル) Mayra (ケラニ, ライブラ) Muchi (ケラニ) Nuniya (カバシア) Tiyar (サヴァル)
地域類型Ⅲ	Berua (ナラヤン) Doai (ループ) Mallah (ナラヤン)	Kurmi (ナラヤン)	Baidya (ループ) Jogi (ライブラ)
地域類型Ⅳ	Barui (スリナガル, ムンシ) Patial (ムンシ, スリナガル) Sankhari (ムンシ) Berua (ムンシ) Patial (ムンシ, スリナガル) Sankhari (ムンシ)	Baniya (スリナガル, ムンシ) Subarnabanik (スリナガル) Sudra (スリナガル, ムンシ) Teli (スリナガル, ムンシ)	Baidya (ムンシ) Brahman (スリナガル, ムンシ) Dhoba (スリナガル, ムンシ) Gandhabanik (ムンシ) Jogi (ムンシ) Muchi (スリナガル)

注 1901 年センサス報告書より。

本的なサービス・技術を広い範囲の住民に提供する職業であるといっ
てであろう。カーヤスタは、地所管理者として働いたと考えられるから、
この中に含めてよい。

IV 就業構造

ここでは、ダッカ県について、前稿と同じく、1901 年センサスから県
内就業構造に関わる基本的な数値を挙げておこう。この年のセンサスでは、
各県の多様な職業をまず 8 部門 (class) に分け、それを更に 24 職層 (or-
der)⁽¹⁷⁾, 79 副職層 (sub-order) にと細分していき、最終的には 520 の職種
(group) に分けられている。8 部門とは、A: 政府, B: 畜産と農業, C:
私的サービス・公衆衛生, D: 物質の加工と供給, E: 商業と輸送と貯蔵,
F: 専門職, G: 非農業未熟練労働, H: 職業以外の生計手段, である。な
お、本項の以下の数値は専業者と農業兼業者との合計値であり、扶養家族

⁽¹⁸⁾
は含まない。

A（「政府」）部門は県行政に関わる人員であり、総数は6,211名（従属人口を加えると23,547名であり、県人口の0.9%）に達する。その内訳を見ると、県行政スタッフとして合計3,172名（内、政府官吏89名、書記・視察官1,054名、巡査・伝達吏・門番2,029名等）がおり、次いで、地方自治体に116名（書記28名、用務員77名等）、村落自治に2,805名（村長38名、村番人2,767名等）、合計6,093名がいる。この県には陸軍118名が駐在するが、海軍はいない。

B（「畜産と農業」）部門は総数576,334名（従属人口を加えると1,799,424名となり、県人口の65.9%）であり、当然ながら県内で最大の部門をなす。その内、畜産人口は総数7,188名であり、そこには博労190名、牧夫6,735名、羊・山羊飼育販売52名、養豚1名等、および、家畜訓練師・獣医188名が含まれた。農業関連総人口569,146名についてみると、地主と農民合わせて535,536名（扶養人口は1,169,570名）であり、その内、地代受取者（地主/中間地主）は13,063名（扶養人口は39,202名）、地代支払者（小作人/農民）は502,473名（扶養人口は1,130,368名）であった。この他に、農業労働者21,819名（農場奉公人1,255名、農場労働者20,563名、焼畑耕作者1名）がいた。ファリドプル県と比べて農場労働者の人数が5倍以上に達することは、この県の郷紳の農業経営形態を示唆するものとして注目されよう。⁽¹⁹⁾更に、前稿で指摘した様に、1901年センサスでG部門に分類されている一般労働者41,580名の大きな部分が実際は農業労働者であった可能性が高い。ここで、農場労働者とは、日雇い/月雇い/出来高払いなどで農業労働に従事する比較的短期の雇用の労働者であり、農場奉公人は農場主の下で長期間雇用され、様々な仕事をする作男である。なお、センサスによれば、更にこの他に、特殊な作物生産者として5,133名（ベテルの葉と実の栽培者4,613名等々）、地主の地所経営

スタッフ 6,656 名 (内上級スタッフ 653 名, 下級スタッフ 6,003 名) がいた。

地主の中には農業以外の副業を持つ 1,736 名⁽²⁰⁾がいる。その兼業職種を見ると、政府役人 77 名, 政府書記 79 名, 民間書記 63 名, 地所代理人 57 名, 弁護士 28 名, 穀物商人 21 名, コントラクター 38 名, 商人・店主 128 名, 教師 77 名, 医者 118 名, 司祭 125 名, 金貸し 336 名, 家主 12 名などである。同様に、農民の中には兼業する者 36,363 名がおり、その職種は、警官 245 名, 村番人 746 名, 一般労働者 6,869 名, 工場労働者 133 名, 精米業 745 名, 漁師・魚売り 1,699 名, 船頭 2,179 名, 博労など 519 名, 散髪師 267 名, 洗濯人 249 名, 店主 3,142 名, 教師 159 名, 搾油業 456 名, 織工 1,112 名, 仕立屋 372 名, 大工 1,095 名, 土器作り 167 名, 鍛冶屋 247 名, バスケット作り 306 名, 皮革職人 326 名, 清掃人 44 名, 穀物商人 1,407 名, 楽師 607 名, 金貸し 910 名, その他の職種 12,372 名である。前稿 (ファリドプル県) と同じく、地主と農民の兼業職種には明らかな違い (前者は専門職が多く, 後者は肉体労働が多い) がある。

C (「私的サービス・公衆衛生」) 部門には 26,934 名 (従属人口を加えると 66,048 名で、県人口の 2.4%) おり、その大部分 (25,905 名) は、私的サービス業者、或いは、家内奉公人 (散髪師 6,344 名, 料理人 1,406 名, 門番 337 名, 家事奉公人 (indoor servant) 7,450 名, 洗濯人 3,419 名など) から成る。その他には、清掃人 (1,635 名) が多い。

D (「物質の加工と供給」) 部門は、いわゆる製造・加工業であり、この県では 11 職層 39 副職層 95 職種 192,133 名 (従属人口を加えると 554,644 名, 県人口の 20.3%) からなる多種多彩かつ人数の多い部門である。最大の階層は食品業であり 87,112 名 (45.3%), ついで、ジュート業, 綿業などの繊維産業 34,794 名 (18.1%), 土器・石器業等が 2,317 名 (12.0%), 商業 14,405 名 (7.5%), 金属・宝石業 10,179 名 (5.3%), 皮革業 7,287 名

(3.8%), 建築業 6,407 名 (3.3%), 輸送業 3,746 名 (1.9%), 各種製造業 3,013 名 (1.6%) と続いている。

副階層、職種にまで降りて就業構成を検討しよう。

食品業中ではファリドプル県と同様に漁業関連職種（漁師 21,766 名、魚屋 12,037 名）が多数にのぼり、次いで、農産物関連職種（穀物・豆類商人 14,129 名、精米業 3,421 名、植物油製造販売 3,875 名、野菜・果物販売 1,433 名、砂糖・粗糖の製造販売 711 名）、牧畜・酪農関連業 9,813 名、そして、嗜好品（タバコ・キンマ・カルダモン）・香辛料・地酒製造販売業 16,555 名となる。

織布業には総数 19,777 名（従属人口を含めると 54,201 名）が従事しており、その内、手織り織工が 18,902 名 (95.6%) を占め、その他は、棉花洗浄業者・紡糸工・染色工などの 760 名であり、この時点のダッカ県の綿業の圧倒的部分が伝統的な手織り織工とそれを支える関連職種からなっており、近代的綿工場はまだなかった。

ジュート産業には 7,685 名が就労したが、その内、ジュート圧搾工場の管理職 329 名、工員 3,368 名、原料ジュート集荷業者 696 名、ジュート綱条・ネット・マット生産 3,173 名であった。

この他に、建築関係業種 6,407 名（レンガ作り 1,384 名、石工 3,041 名、屋根葺き 1,273 名等）、輸送業 3,746 名（内、船乗り、船頭 3,692 名）、各種製造業 1,583 名（腕輪の製造販売業 964 名、首飾り製造業 113 名）、金銀細工師 6,903 名（従属人口を含め 24,595 名）、真鍮・銅細工師 1,321 名、鉄関連業 1,577 名（内、鉄鍛冶 1,466 名）、土壺製造販売業 2,025 名、大工 7,155 名、製材・材木業 1,847 名、籐の籠・マット・箒等製造販売業 3,079 名、製靴 1,259 名、生皮・角・豚毛・骨販売業 5,131 名等々がいた。⁽²¹⁾

この部門には、更に、金融業者 6,901 名（金貸し 4,149 名、銀行の会計係りに 601 名等）等も含まれた。

E (「商業と輸送と貯蔵」) 部門には 28,825 名が属し、そこには鉄道関連 549 名、陸運業 5,364 名 (内、4,831 名は駕籠かき)、水運業 22,285 名 (汽船会社社員、船主、舢舨・船員、ドック業等)、倉庫関連業 627 名が含まれる。ファリドプル県と同じくダッカ県でも、水運関連業従事者が多いことにも注目すべきであろう。

F (「専門職」) 部門には 23,161 名が属したが、そのうちでは僧、司祭、占星術師、在来医学の医師、産婆、楽師・楽団、踊子などの伝統的な専門職が、79.8% を占めていた。しかし、学校教師、校長など近代教育従事者 2,139 名、法曹 1,329 名、近代的医師・調剤師・看護婦等 256 名、技術者 40 名 (建築士、測量士など) など近代的な職業人も、既になんかの規模に達していた。

G (「非農業未熟練労働」) 部門には 48,594 名が属すが、その内、道路工夫など 3,233 名、一般労働者 41,580 名、売春婦 2,164 名などがいた。前稿でも指摘したことだが、この内、一般労働者のカテゴリーの大きな部分が⁽²²⁾ 実⁽²²⁾は農業労働者であった可能性が強い。

H (「職業以外の生計手段」) 部門には 15,743 名が属した。この内、13,769 名は非宗教的な乞食であり、囚人 162 名、恩給生活者 305 名なども含まれた。

V 教育の普及

前項で見た様に、1901 年センサスはダッカ県の教師数を 2,139 名とする。テイラー (1840)、ハンター (1877)、および、ダッカ県地誌 (1912)、そして、ダッカ県地誌 (B. 巻-統計編, 1933) などによって、この県⁽²²⁾の教育体制の概要を知ることが出来る。それらによると、ダッカ県にはじめてヨーロッパ人による学校が開かれたのは 1817 年であり、セランブルのバプティスト伝道師レオナード (O. Leonard) の努力により、1822 年には 23

の学校を経営し、生徒数は1,300名に達した。女学校も1825年に開設されている。ダッカ県に政府学校が開設されたのは1835年であった。1841年には、ダッカ単科大学や教師訓練学校も開かれ、1867年には、学校数は169男子校（生徒数8,213名）、26女子校（452名）となった。

Campbellの教育改革を経て生徒数が飛躍的に増大し、1872年18,086名、1892年78,834名、そして、1906年86,586名に達した。その後、更に拡大が続き、1921年には学校総数3,506、生徒数133,429名（内、ムスリム学生69,203名で、学生数の51.9%）になり、1930年には3,982校181,810名に達した（ムスリム学生は101,917名で56.1%）。

1901年センサスでは、県全体の識字率は12.1%であり、その内で、ヒンドゥ男子24.2%、ムスリム男子4.9%とムスリム人口の教育の立ち遅れが顕著であった。男子就学年代人口総数に対する実際の就学人口の割合を見ると、1922年に県全体で43.7%であった。その内でムスリムのみについてみると、その比率は22.5%であり、1901年当時と比べるとムスリム人口の間の教育の普及率がヒンドゥに追いついてきている。この傾向は1930年までに更に強まり、県全体の男子就学率とムスリムの就学率は59.8%と33.2%とになっている。圧倒的に下層農民、労働者からなるムスリム人口のこの急速な教育の普及は、20世紀に入って加速されたジュート栽培の増大と、つよい相関を示している。実際、1921年から30年にかけて順調に拡大を続けたこの県の就学率や生徒数が初めて下降を記録したのはジュート輸出が陰りを見せた1920年代末ときれいに重なっているのである。

その他にも、教育に関する統計は、ダッカ県の急速な一般教育水準の向上を支えたのは民間学校であり、政府の教育投資による公的教育は上級学校、特に、英語学校に偏重していたことを示し、植民地支配下の教育の展開を考える上で、貴重な示唆を与えている。このことは、例えば、1930

年のこの県の登録された 3,560 学校中、3,321 校（93.3%）が民間学校であり、政府学校の学生 3,984 名中、2,317 名（58.2%）が単科大学と英語学校学生であったことに如実に示されている。

前稿でも述べた様に、20 世紀に入ってから教育の急速な普及には目を見張るものがあったが、中でも、ダッカ県は東ベンガルの中心都市ダッカを擁しており、他県と比べてより早くから、又より深く、教育の浸透がみられたといつてよいだろう。

第 5 章 農 業

I 自然環境

ダッカ県の季節は、農業との関わりで、冬、夏、雨季の 3 つに分けられよう。⁽²³⁾

冬は 11 月末から 2 月中頃までである。マラリア、次いで、コレラが流行の時節である。雨季に水面下に溜まった植物の残骸が腐敗し、又、乾季の為に良い飲料水が不足する。

夏（正確には春と雨季前期と言うべきであろう）は 3 月中頃から 6 月中頃までであり、5 月に気温が最高に達するが、第 II 地域（県北）の森林地帯と県を取り囲む大河の影響で、それほど高温にはならない。地高の高い県北を除いて、農業用水は毎年の氾濫水に頼るが、なお耕耘、播種時には、降雨が重要な意味を持つ。モンスーンは 5 月中頃に始まり、午後になると、強風と豪雨が生じる。雹は 3 月中頃に降り、秋作、冬作用の種子生産にとって脅威である。

雨季（正確には雨季后期）は 6 月中頃に始まり 4 ヶ月間で年間降雨量の 3 分の 2 が降る。大河の水位は 4 月中頃から上昇を始め、7 月初めには最高位に近づく。そして、河岸を越え、一挙に県は一枚の巨大な稲田に変わ

る。水面に出るのはモドゥプル森林と盛り土された村や都市のみである。舟による交通があらゆる方向に可能になり、あちこちに蓮や水生花が群生し、河岸には葦 (kusha) が茂る。9 月中頃から水が退き始める。そして、雨季は 10 月中頃の激しい雨と風で幕を閉じる。氾濫水が去ると、見事な沈泥が残る、そこに豆類、油性種子が散播される。

作物に最も影響を与える降雨は、2 月中頃から 6 月にかけてのものである。その後は、モドゥプル森林や高い河岸などを除けば、氾濫水により作物は育つ。早い降雨が、沼沢地の縁で作る長丈冬 (アマン) 米 (浮稲)、河岸や中洲で作る夏 (アウス) 米、ジュートの栽培に必要である。

異常な早魃でなければ県内の土地は常に十分な水分を保持しており、特別な灌漑は必要ではない。例外は、潮汐の及ばない高みの土地での春米とダッカ市近郊の砂糖きび栽培である。これらの灌漑には、揚水器 (donga) と振りバスケットが用いられる。菜園作物には土壺で水をやる。春の雹は春米、ジュート、マンゴーに被害を与え、過度の或いは早い氾濫はジュートと冬米を傷め、他方、雨不足は県北では低収量を招く。だが、寒暖の異常はあまり生産には影響を与えない。

II 土壌分布

県の土壌は、主なものを見れば、北部の窪地や県内各地の沼沢地で見られる赤いラテライト土 (kunkur)、植生土、そして、河川によって運ばれ沈澱した堆積土という 3 種がある。

県北のモドゥプル森林には赤粘土が多く見られる。それは、固く、鉄分と石灰を大量に含むが、シリカ分 (二酸化珪素：石英・水晶等々) には乏しい。ラテライト土とよく似ており、水分が加わると粘着性がでるが、渾くと固化する。その表面は、腐食物、沈泥などが混じって変質し、多孔性である。地下 1.2～1.5 メートルの土壌は密度がある。農作業は楽ではない

が、非常に肥沃で、砂糖きび、ジュート、棉などの雨季作物はよく育つ。だが、乾季の冬作物には適さない。一般的に言えば、ここでは地高が氾濫水位をはるかに上回るので雨季にも浸水しない。しかし丘陵の麓の窪地の様に植物性堆積物があり棚田により保水がなされているところでは、乾季 (rabi) にも相当な規模で稲が作られるし、森林を南北に横切る河川沿いには低湿地が形成され、春作物を産する (地図 1)。しかし、これら以外の地域では、冬と春は、通常は、芥子菜しか出来ない。乾季にできる果物はベルノキ (bel) だけだが、雨季には、波羅蜜 (jack-fruits)、パイナップルが豊富に取れる。多様な薬用植物があり、樹木がある。中でも、ガザリ樹 (gazari) が重要である。森林が開発されると、稲、乾季作物、ジュートが栽培され、灌漑や肥料の不足で低収量に陥ることがある。

県内の沼沢地の土は、黒土であり、植物腐蝕物と沈泥が混交している。アリアル沼沢地 (地域 IV) では、大量の泥炭があり、乾燥させると燃料になる。沼沢地には草と葦しか出来ないが、開発すると春米がよく取れる。長丈の冬米もよく取れ、夏米も、早すぎる洪水がなければ、よく取れる。

河川による堆積土は、更に、新堆積土と旧堆積土に分かれ、前者は非常に肥沃な粘性砂土 (ローム) であり、県南部に多い。県東部のメグナ河水系の堆積土はきめが細かく、多くの植物腐蝕物を含み肥沃であり、水分の保持力も高いので、この水系で生成した中洲は、地表が水面に現れる以前から春米を作付けることができる。ここでは、作物の出来は、土壤の肥沃度よりも、むしろ、その地域の地高の相対的な高さや排水条件により強く依存している。最も重要な作物は米とジュートである。大河の河岸の新堆積地では、しばしば、肥沃度は下流方向に行くにつれ増大する。パドマ河とダレッシュリ川の上流方向に位置する県西南部 (第 I 地域) の中洲の堆積土は砂土が多く、きめも粗く、植物腐蝕物は少ないので、中洲の地表が水面に出てからかなりの年数が経過しないと、春米などの作物を栽培出

来るほどの粘稠性に達しないとされる。ここの中洲では、まず雑穀類が栽培され、それによって水中の粘土質を保持、沈澱させる。サツマイモは早い時期によく出来るが、ジャートや米が出来るには数年を要する。

III 農業生産

1 諸作物の歴史

ダッカ県における作物構成の変遷には、極めて興味深いものがある。1802年の地租局への報告によると、ダッカ県の価値の高い産物は、棉花、麻(hemp)、砂糖きびである。この他に、藍、紅花などが19世紀前半までの主要な商品作物となろう。1860年代から東ベンガルの農業地図を書き替えたジャートは、1839年のテイラーの時代にはまだ殆ど姿を現していない。

18世紀には、ダッカの棉花栽培は栄えていた。世界的に有名なダッカモスリンは、全て、県北部で栽培された固有の在来種棉花(desi)で織られていた。この棉花の繊維は長く、細く、柔らかい。18世紀末には最上の棉花は、メグナ河、ブラフマプトラ河に面する地域、中でも、バナール(Banar)河とブラフマプトラ河の旧流路に挟まれたラームパル(Rampal)近辺が有名であった。ショナールガオン、カパシア、ジャングルバリ、トケなども主要な産地であった。又、県南のビ克蘭プルとその北のループガンジにかけても上質の棉花が作られた。かつては多くの品種があったが、ダッカ県における綿業の衰退に伴い棉花生産は衰え、テイラーの時代には、既に質が大きく低下し、19世紀末には、この最高級棉花栽培は途絶えていた。

18世紀末に、藍草耕作が始まり、1801年には県内の藍工場は小さな2工場だけだったが、テイラーの時代には、33工場に増えていた。彼は、藍の耕作面積を10万ビガ、産出量は2,500マンと推定し、藍作農民や藍

製造従事者に支払われる投資額は年間 30 万ルピーほどとしている。藍は、主に新中洲や夏米地で作られる。県南部では 10 月に種を播き、藍製造は、5 月末に始まり、7 月初めに終わる。地高が高い県北では、播種は 2~3 月、製造は 6 月末に始まる。

ジュートは 1795 年にすでに有望な輸出品と見なされていたが、1828 年、イギリスのダンディ (Dundee) への輸出はわずか 510 マン (価格は 1 マンあたり 1-3 ルピー) だった。ジュート生産が活発になるのはナラヤンガンジにジュート商社が設立された 1860 年代であり、1873 年にはナラヤンガンジからのジュート輸出は、付近の他県からの集荷分も含めて、100 万マンを超した。そして、アスコリの時期には、ジュートは県内で最も貴重な商品となり、県の農産物価値の実に 3 分の 1 を占めるに至っていた。

紅花 (safflower) は、パドマ河とダレッシェリ河の間、特に、マニクガンジ、ハリランブル、ナワーブガンジのダレッシェリ河岸やダッカ近辺で最高級品が栽培された。1789 年、紅花の全生産はダッカ市の染色業者によって黄色染料として用いられた。1810 年の県内産出量は 2,000 マンとされ、輸出も行われていた。最大の輸出量は 1824-25 年で、カルカッタの関税事務所を通過した紅花は 8,448 マン、290,655 ルピーであった。この内、3 分の 2 は、ダッカ県で産したものである。1830 年代の平均輸出量は 4,000 マンであった。赤と黄色の染料になり、ロンドン市場でダッカの紅花はインド随一の評価を受け、中国産に次ぐ高値を呼んだ。1 マンあたり 16~25 ルピーで売られる。1 ビカ当たり生産費用は 7 ルピーほどで、平均収益は 3.5 ルピーであった。

2 農 具

農具は、ランガル (犁)、モイ (梯子状の整地器)、ビッダ (馬鋤)、チェンタ モゲル (土塊碎き)、カシー (鎌)、コダル (鋤)、クラル (手斧)、

カンタ（穴掘り棒）、ダー（鉞）などであり、テイラーの時代からアスコリの時代までに大きく変化しているとはいえない。

犁は曲がった一本の木材で、一方を耕夫が持ち、他方には鉄の刃がついていて、土を掘り起こす。一對の去勢牛に軛が付けられ、竿で犁と繋がっている。犁の断面は通常は丸いが、ライプラの中洲では、ティッペラ県で普及している、三角形の断面を持つ改良犁が使われている。

犁は2年は保ち、2〜3-8 ルピーする。木材の部分はしばしば農民が自分で作り、鉄の部分は鍛冶屋につけてもらう。伝統的な犁は簡単なものだが、軽く薄い堆積土壌には近代的な重量犁より適している。

県内犁数は220,791台であり、ほぼ、農業従事者（agricultural worker）2名につき1台、耕地1平方マイル当たり109台となる。一台の犁で耕せる面積は、タナ別に偏差があるが、ほぼ4.8〜6.6 エーカーの範囲に入る。

3 役畜と飼料

役畜は、西部諸県より小さく、弱い劣等種である。日の出から昼までが耕耘の時間であり、この間も2組の雄牛（つまり、4頭）を交互に使う。かつては水牛が沢山農耕に使われていたが、沼沢地が塞がり、牧草地が消滅するにつれ、姿を消した。犁、整地器、馬鋤は、ひどく粗末な体軀の去勢牛が牽く。交配に全く配慮が払われていないし、飼料も粗末である。

去勢牛は、現地牛（deshi）と西方牛（paschima）に分かれる。後者は、ガンジス上流から輸入された力強い牛だが、ダッカの気候の下では急速に弱くなり、価格・維持費も高い。この為に、現地牛が多数を占める。地籍事業の時期に、西方牛の価格は1対で100〜200 ルピーであり、現地牛の倍である。牧草地は、県北を除くと、皆無に等しく、道端、村道などで放牧する。飼料は、藁と穀類である。雨季には飼料が少なく、又、土地の多くが水没するので、農民は、損を承知で役牛を売ることが多い。県北では、

雨季には牛小屋（bathan）で飼う。通常の牽牛は一日に 0.33～0.5 エーカーを耕す。ダッカ市内を除くと、去勢牛は県内に 314,484 頭おり、犁一台に対して 1.43 頭である。土壤の固い県北では、より多くの牛が必要な筈だが、その様な統計は見当たらない。

4 圃場と協同耕作

20 世紀初頭の地籍事業によって、ダッカの農民は、平均 1.85 小作権、合計 2.8 エーカーを保有するが、個々の圃場（field）は 0.5 エーカー未満であり、平均 6 圃場を持つ。更に、各圃場が平均して 6 つの地片に分かれている。これでは、とても効率的な農作業を行えない。しかも個々の圃場は分散しているので、圃場間の移動に時間の無駄が生じ、かつ、移動しやすい様に犁は軽量である。ダッカ県では、平均すると、1 人の農民は 0.5 台の犁と、0.75 頭の去勢牛しか持っていない。従って、結の様な伝統的な耕作協同を組んで、隣人と協力して耕耘を行っている。

IV 各種作物

1 ジュート作

既に触れた様に、1860 年代からジュートが世界市場向け商品として台頭し、1870 年代以降、その高収益性を梃子に、急速に栽培面積が拡大した。ここでは、センとアスコリに依拠しながら、ダッカ県におけるジュート栽培の諸問題を考察する。

県内の最大のジュート生産地帯は、西をラッキャ河とブラフマプトラ河の旧流路の下流部に区切られ、北は現在のブラフマプトラ河、東と南をメグナ河に区切られた一帯（ほぼ第 III 地域に相当）である。中でも、ラッキャ川とアリアルカーン河に挟まれた地域で最高品質のジュートが取れる。そして、これに次いで急速に重要なジュート産地になっているのはサ

トゥラ (Satura) の東の平坦な地域であり、更に、モドゥプル森林地帯の高台地、第 I 地域の北部と続く。他方、ジュート栽培の少ない地帯は、第 I 地域の南部ハリランブルの低地、ナワープガンジ、スリナガル、サヴァルの北西部である。最高品質のジュートの産地は、メグナ河の中洲を含めて県東である。

ジュート作付面積について、19 世紀末のセンは農業局刊行の『ジュート予報』(*Jute Forecast*) に拠って 17 万エーカー (253 平方マイル) とし、1910 年代のアスコリは 23.6 万エーカー (369 平方マイル) とする。(Sen, パラ 117)

ジュートは稲に次いで適応力があり、高みの土地では天水により、中洲では地中の水分で育つ。1.2 メートル冠水する低地でも育ち、各種土壌にも適応する。しかし、最適なのは植物腐蝕成分の多いロームであり、高温多湿を好む。

ジュートは、豆類の後に作るのに適している。アリアル カーン河沿いでは、ジュートの後に冬米を植えている。ジュートを連作して、良い結果を得ている村もある。

モドゥプルの森林、ブラフマプトラ旧流路沿いでは、牛糞、牛糞灰をやる。マニクガンジ地区では、ケサリ豆を作り、そこに牛を放牧し、土地に肥料分を与えてから、ジュート耕作を始める。年々、沈泥が更新される地域では肥料は不要である。

播種期は、中洲では増水を警戒して早く (2 月中頃)、モドゥプル森林の高台地では 5 月中頃である。収穫は、播種から 5 ヶ月後であり、直ちに繊維分離作業が始まる。

県の平均的な生産性は、センは平均 1 エーカー当たり 15 マン強とするが、場所によりかなり違う。ブラフマプトラ河中洲 15~30 マン、メグナ河中洲 12~21 マン、ムンシガンジ 12~18 マン、モドゥプルの高台地 9~

18 マンである。アスコリも 1 エーカー当り 7 マンから 30 マンまでの大きな偏差があり、マニクガンジ地区は平均 13 マン、ナワーブガンジ、スリナガル、ムンシガンジの各タナ、ライプラの中洲は平均 15 マン、県内のその他の地域は平均 17 マンであり、県全体の平均収量は 15 マンであるとしており、両者の数値はほぼ重なっている。

収益計算をしよう。耕作費用は、センによれば、エーカー当たりに換算すると、肥料 3 ルピー；耕起（10 回）8 ルピー；種子（2.5 シュール）0.2 ルピー；除草（6 人）4.5 ルピー；間引き（2.5 人）21 ルピー；収穫（8 名）12 ルピー；繊維分離 0.8 ルピー；地代 4.5 ルピー；合計 35 ルピーとなる。アスコリは、耕起・土均し・施肥 15 ルピー；種子（4 シュール）1 ルピー；除草（24 名）15 ルピー；刈入れ・浸水（24 名）15 ルピー；繊維分離、洗浄 4 ルピー；地代（付加課徴を含めて）4 ルピー；合計 65 ルピーとする。（『地籍事業報告書』、パラ 53）

ジュート価格は市場状況で大きく変動する。例えば、1913 年は 1 マン当り 15 ルピーと高騰したが、1914 年には戦争が始まり世界における貿易量が落ち、包装材であるジュートの価格は 2 ルピーに落ち込んだ。1 マンあたり 8 ルピーを平均的な粗収入とすると、アスコリに拠れば、1 エーカーあたり粗収益は、120 ルピーとなる。支出は、労働を全て雇用した時 65 ルピーであったから、純収益は 55 ルピーとなる。しかし、この県のジュート生産の 95% は自作農民が行うから、現金支出は、除草と刈入れ時の追加的な労働のみなので、上記費用中賃金として計上された 40 ルピーは実際には支出されない。従って、犁、役牛、農具の減価償却費用と借入資本への利子を除けば、ジュート耕作者は、副産物（茎）の販売収入 5 ルピーを含めて、1 エーカー当たり 100 ルピーという高収入を得る。ジュートには病害は殆ど生じない。価格変動のリスクが大きくとも、農民にとってジュート耕作が非常に誘引力の強い作物であることが理解されよう。（『地

籍事業報告書』, パラ 53)

県内の重要なジュート輸出市場として, センは 11 ヶ所を挙げるが, その内でナラヤングンジ市が最大であり, そこの取引量の 3 分の 2 は, マイマンシン, スリホット, ティッペラの各県で産したものである.

2 稲作

稲作は, 収益においては, ジュートなど高収益商品作物に及ばないが, 生存の為の最も基本的な食糧であり, 最大の作付面積が当てられている. 又, ジュートと比べれば, 価格変動も小さく, 農民経済に安定を与える作物である. このことは, 後節で見る様に, ベンガル農業が危機に見舞われる度に, 稲作の面積が急増することに良く示されている. 又, ジュート農民が稲作地をジュート地に転換した場合, 彼等は消費の為に市場から米を買うから, ジュート作付けの拡大は市場化米への需要も拡大するのであり, 両者の関係は単純なトレード オフではないことに注意すべきであろう.

(i) 稲の作期と種類

稲作はベンガル農業の基幹であり, それだけに, 古来, 様々な生態環境に対応した多様な稲が開発されてきた. テイラーは, 1830 年代のダッカ県の稲を 6 つに分類している. 冬米 (aman), チョトナ米 (chotna 又は digi), 夏米 (aus), 春米 (boro), セエレー米 (seyele), オウリー米 (ouri 又は jhara) である. このうち, 冬米, 夏米, 春米が主力をなし, 県の穀物作付けの 4 分の 3 を占める. (Taylor, 第 5 章)

(1) 冬米

冬米は, 最重要な作期であり, 多様な耕作形態が見られる. センは, 冬米が, 稲の全作付けの 66.6% を占めるとしているが, アスコリは, それを 76% とする.

センの纏めに依拠して, ダッカ県の冬米の諸形態を見ていこう. (Sen,

パラ 65-75)

(a) 長丈稲 ダッカ県の沼沢地の脇, そして, 雨季に 1.5~4.5 メートルの滞水が生じる低平野などで広範に栽培されている. 増水時には, 穂先を水面に出す様に, 24 時間で 30 cm も成長することがある. ラエンダ, バオア (rayenda, baoa) などの品種は, 3~6 m の長丈になる. しかし, 急激な河川水位の上昇で穂先が冠水したり, 強い流れで根こそぎ流される危険はある. なお, テイラーは, 冬米としてこのタイプのみを記述している.

このタイプの稲に最も適する土壌は, 固い粘土質である.

播種は 4 月中頃に行う. 最も低湿な土地には, 長丈性の強いラエンダ, バオア種を, 増水の始まる前の 2 月中頃に蒔く. 収穫は, 11 月中頃から 1 月であるから, 長茎種は 10 ヶ月間も田を使うことになる. 藁は燃料にしたり, 田で燃やし肥料とする. 収量は, センは, ビガ当たり 3~12 マンで, 平均は 4.5 マンとし, アスコリは, ビガ当たり 3~10 マン (平均 5 マン) だが, 他方で, 急に増水した年には, 2 マン以下に落ちるとして, 収穫の不安定性を示唆している.

(b) 冬米と夏米の混播

この栽培方法は, 県内の多くの土地で行われている. 一方が不作でも他方で取り返しを図れるので, 飢饉等に強い農法である. だが, 収量は単独作付けの場合と比べて夏米は半分, 冬米は 75% となる.

1 月中頃に, 前作の藁を燃やし肥料とする. 播種は 3 月中頃に行い, 夏米 12 シェール, 冬米 6 シェールを同時に蒔く. 除草も 1~2 度行い, 夏米は 6 月中頃に刈る. 雨季に, 野生稲 (jhara) が水面に出てきたら, 竹でそれを水中に沈め, 除去しないと, 田は野生種の稲で覆われてしまう. この作業をダガオ (dagao) という. 冬米は 11 月中頃に刈る.

(c) 冬米と胡麻の混播

第 IV 地域の幾つかの場所で, これが行われている.

耕作方法は、(b)と同様であるが、播種は、3月初めから4月中頃に行い、胡麻を1.5 シェール、冬米10 シェールを蒔く。胡麻は、5月中頃には収穫され、収量は2〜3 マンである。

(d) 冬米、夏米、胡麻の3種混播

これも第IV地域の幾つかの場所で行われている。

耕作は、(b)と同様だが、4月中頃に、胡麻1.5 シェール、夏米10 シェール、冬米6 シェールを同時に蒔く。2回の除草を行い、胡麻は5月中頃、夏米は6月中頃、冬米は11月中頃に刈る。非常によい収穫を得ることがあり、センの観察では、この栽培法は拡大していた。

(e) 移植冬米

移植冬米は、草丈が低く、深く浸水する地域ではよく育たない。従って、県北のモドゥプル森林の溪谷上流部と、ブラフマプトラ河岸とその支流の中洲のやや高みの土地、ナルシングディ (Nursingdi) の北側、ライプラの高台地で行われている。モドゥプル森林の赤土地帯ではサイール稲 (sail dhan) と呼ばれる。移植冬米は、通常の散播冬米より上質である。

苗床は、4月中頃から用意し、苗が30〜40 cm になるまで育てる。モドゥプル森林の溪谷では、まず、谷川の堤を補修し、貯水可能とし、田を整える。8月初め頃に田植えを行う。刈入れは11月中頃から12月で、獣害の生じない内に早く刈る。中洲地帯では、前作（大抵はケジャリ豆）の刈入れが終わるや、直ちに、冬米準備を始めなくてはならない。畦 (ail) を作り、水を田に貯えて、土壌を泥状に保つ。同じ田で夏米と冬米の2期作を行うこともある。早く夏米（後述のシャイタ米が多い）を播き、7月中頃に刈入れ、直ちに耕耘して、冬米を移植する。この様な輪作下の冬米は生産性が落ちる。なお、この夏米の代わりにジュートを入れて、ジュートと冬米という2毛作にすることも出来る。

収量は、サイール米で1 ビガあたり3〜10（平均5 マン強）マン、その

他の移植冬米は3〜7マンである。だが、先に夏米かジャウトが作られていると、収量は3〜4マンに落ちる。

(2) チョトナ米

やや高みの土地に、4〜5月に種子を播き、9〜10月に刈る。冬米より収量で8分の1劣るが、端境期の9〜10月に収穫されるので、農民の生計にとっては貴重である。

(3) 夏 米

夏米は、0.9〜1.05 mの背丈なので、雨季初期に60 cm以上冠水する様な氾濫原では育たない。アウス米の適地は、ジャウトにも最適な土地である為、ジャウト作が拡大するとアウス米作付けは縮小している。この点については、本章VII節で考察する。アウス米は農民の自給米であり、又、家畜の飼料としても優れている。センは、県内稲作付け面積の、18.4%を占めると推定している。

高みの土地で、2月に播き、5〜6月、雨期開始の頃に刈る。

ボアイラ (boaila) とシャイタという種類の夏米は砂土質にも適合する。シャイタ米は60日 (シャイタは60の意味) で生育するという利点を併せ持つ。シャイタ米は、モドゥプル森林の高台地で、サイール米に必要な水が得られないところでも生育し、又、砂土が多く、比較的に高みの河川の中洲でも育つ。農作業は楽である。雨季に夏米としてこれを作った耕地に、冬季に豆か芥子菜を作る2毛作がしばしば行われる。中洲では、増水期前に十分な茎丈を得られる様に、冬作物収穫後直ちに夏米の準備が始まる。この為に、メグナ河の中洲では、2月中頃には種まきをする場所もあるし、他方、マニクガンジの北では、4月初めまで遅らせてもよい。夏米で最も大変なのは除草である。農民は、相互に協力し合うが、時機を逸しない様に雇用労働を利用することもある。刈入れは、7月中頃から8月中頃である。アスコリは、平均収量を13マンとする。

(4) 春 米

(a) 通常の春米

県北のモドゥブル森林の河川沿い、メグナ川とその支流の河岸や中洲、そして、県南西のパドマ河の中洲で主に作られる低湿地の乾季米であり、第Ⅱ地域では稲作付けの3分の1にも達する。隣のマイマンシン県でも大量に作られている。水流や沼沢地に接し、灌漑用水が容易に供給できる低い土地で作る。10月中頃から苗床を用意し、12月中頃～1月中頃、30cmほどになった苗を水田に移植する。その後、灌漑、除草をして、5～6月に刈る。冬米、夏米より、収量が多い。センは、稲総作付け面積(640,000 エーカー)の15% (96,000 エーカー)を占めると推定しているほどであり、夏米(117,760 エーカー)と殆ど並ぶ面積があったことになる(Sen, パラ 65)。彼の時代には決してマイナーな作物ではなかったが、アスコリの時代には、県作付けの1%未満となっていた。

県内最大の春米栽培地帯であるメグナ河の中洲は、有機物を多く含む、きめの細かい砂土質の多いローム土壌であり、かつ、河の潮汐で規則的に冠水するので、乾季であっても灌漑の必要がない。だが、潮汐河川の中洲を除くと、春米には人工灌漑が必要であり、船型揚水器(duni, donga, dun)で行う。

春米は、粗く、品質の劣る米で、自給用である。耕作の費用・労力が少ないが、収量はセンはビガ当たり5～12マン、アスコリは7～13マンと推定する様に豊かである。

(b) 散播春米 (lepi dhan)

春米は通常は移植するが、数種類の散播される春米ある。パドマ河の幾つかの中洲には、引き潮時に現れる土地がある。その様な低地は深い泥沼であり、そこでは春米が散播される。ただ、種子を散播し、泥の上を均す(lepa)だけでよい。筏の様なものに乗りながらこれを行う。レピーとは、

この様に、泥を被せることで潮汐作用による浸水で種子が流出しない様にする栽培方法である。

収量は、ビガ当たり 4~6 マンとされる。

(5) セエレー米 (seyele)

春米と同様な耕作方法だが、移植時期が 6~7 月で、粘土質の高みの土地に植え、1~2 月に刈る。県北に固有の栽培方法で、重い粘土質の土地で、多雨の年に最も良い収量を示す。県内で最高質の米とされる。

(6) オウリー米 (ouri, 又は, jhara)

これも、県北固有の米で、低地に豊かに実る。実離れが良いので、収穫は茎を揺すって実をバスケットに落とす。偶に市場に出るが、品質が素晴らしいので、どの米よりも高価である。なお、ジャラは、野生種の稲の呼び名ともなっている。

4 酪 農

ダッカ県の乳牛は、ベンガルで最上とされる。ダッカ市では、デシュワリ (deswalli) という種が多い。小屋で飼い、県北の水辺から採集した草を与える。水牛は、牛飼いが飼い、凝乳 (dhai) とバター油 (ghi) 作りに使う。チーズも作られ、輸出される。(Taylor, 第 8 章)

Goala は、雨季の飼料不足などから自分の乳牛を持てず、農民から牛乳を買う。最も牛乳が豊富なのは、第 I 地域と、第 III 地域のライパラである。かつては多くの飼料が得られたので、県中に牛小屋があったが、センの時期にはもう見られなかった。同様に、新生の中洲における放牧も見られなくなった。

在来の乳牛は、1 日 2 シェール出せばよい方で、最大でも 4 シェールどまりである。ガンジス上流域から輸入された乳牛は、10 シェールを産する。

牛飼は、凝乳 (dadhi, chhana), バター油 (nani, ghi), バター (ma-khan), 濃縮ミルク (khir), チーズなどの酪農製品を生産する。

5 漁 業

パドマ河, メグナ河には, 多くの食用魚がいる。インド鰹, 鯰 (magur), インド鯪, ヒルシャ (hilsa) 等々である。一部は, 塩漬にし, 他県に輸出する。⁽²⁴⁾

河川や湖沼での漁業を生業とする者は, 漁業権を持つ者(漁場に接する土地の地主)に漁業料 (jalkar) を払わなくてはならない。氾濫原から水が退き出すと, 沼地は季節単位で, 漁場の広さ, 漁師 (jeratti ryot) の数に応じて 5~500 ルピーで賃貸される。大きな漁場は, 通常, 漁師の共同会社 (joint stock company) か, 市場 (bazar) に魚を卸す魚問屋が契約する。漁場からの収入は, 季節により異なるので, 漁師は, 10 月から 5 月は船 1 艘に付き月に 1~5 ルピーあるいはそれ以上を払い, 雨季にはこの率は大幅に下がり, 船 1 艘に付き, 4 アナから 1 ルピーになる。雨季には, 彼等は漁業料を払う場所以外にも船を進め漁をするので, 流れ農民 (bhasanea ryot) と呼ばれ, その地の漁師と同一の税を払う。漁師から魚を仕入れて市場で売る魚屋は, ザミンダールに料金を払う。

大量の干魚が製造され輸出される。海老や蟹も大量に市場で売られる。漁師は, 魚を煮て魚油を取ることもある。

センの時代になると, 豊富な魚類の供給に陰りが見えてきた。その理由として, センは 3 点を挙げている。1. 県西部, 南部の沼沢地が閉塞し, 魚類の供給が大幅に縮小した。2. 毎日, 大量の魚が東ベンガル鉄道 (Eastern Bengal Railway) でカルカッタ市場に送られるようになったことも県内の供給を減らした。3. ダッカ-マイマンシン鉄道の開通も魚類のマイマンシン県への輸出を促進し, 県内の供給を減らしている。この状況下で,

年率 1.4% の人口増加があったから、一人当たり魚消費量はかなり小さくなっている。魚資源は、魚や稚魚の減少と水面積の減少の両者から縮小しているが、中でも後者の影響が強いと思われる。

この需給ギャップを見据えて、魚の供給を拡大する試みとして、第 IV 地域内の巨大なアリアル沼沢地とその近辺・東部低地で、半人工的な養殖が行われている。雨季には沼地の深部にいる魚が、氾濫期に稲田に移り、雨季の終わりに、又、沼の深い所に戻るというサイクルを人工的に模倣するのである。即ち、低地に深い貯水池 (danga) を掘り、そこと川や運河をつなぐ。そして、貯水池の部分には水草の覆いをし、雨季の終わりに魚が戻った頃を見計らって運河への口を塞ぐ。そして、次ぎの雨季に運河への口を開き、魚を氾濫原に放つ。放魚しないと魚は順調に生育しないからである。そして、雨季の終わりには成長した魚がこの貯水池に戻ってくるので、開口部を閉じるのである。こうして、2 年目には、40~100 マンの魚が取れ、150~500 ルピーの収益になる。

なお、漁業を仕事としない一般住民は、沼沢地の漁場では釣り竿で、又、航行可能な川ではこれに加えて罟 (chai) で、自由に魚を取ることができる。

V 農業生産額

ダッカ県は農業県であり、人口の 67% が農業に依存して生活している。

農業からの粗生産額は、アスコリの計算によれば、酪農、森林生産物、果樹園、家庭菜園 (kitchen garden) などを除くと、103,910,000 ルピーと推計される (表 13)。アスコリは、これを 1911 年の県人口 2,960,402 名で除して、一人当たり生産額を 35 ルピーとする。しかし、これは、粗生産額であって、耕作費用 (但し、自家労働の帰属賃金は計算しない) を控除すると、これを 2 割弱下回ると考えられるから、一人当たり純生産額は

約 30 ルピーと推定されよう。

この表を一瞥すると、地籍事業の時点の価格条件では、ジュートが粗生産額において、冬米を上回ってダッカ県の最大の商業作物であることが理解される。但し、先述の様に価格が暴落すれば、この順位は容易に逆転し得ることも又、この表から一目瞭然であろう。

VI 作物構成：時系列的变化と地域的分布

この県の作物構成に関する主要なデータは、『地籍事業報告書』と『季節と作況報告』(Season and Crop Report)である。前者は、実測に基づくタナ別作付統計を与えるので、ベンチマークとして極めて貴重である。他方、『季節と作況報告』は長期間継続された膨大な作業に基づく時系列データ(1891～1945)を与えるが、残念ながら主観的推測であり、かつ、県単位の数値しか公表されず、タナ別の情報は得られない。

我々はまず『地籍事業報告書』に基づき横断面的分布状況を観察し、次いで、『季節と作況報告』に基づいて時系列的な変化を分析することにした。

1 農作物の地域的分布(1910年代前半)

4つの地域タイプの作物構成上の特徴を、表14～16に基づいて述べよう。

第I地域は、米作付け率が県内で最も高く、他方、ジュート作付け率は最も低い。又、表15の集中度から明らかな様に、小麦、大麦、豆類、粟・稗などの雑穀類の作付けが大きく、この結果、作付け率も154.3%と県内で飛び抜けて高い(表14)。米作の中では、冬米の作付けが大きい。

第II地域は、全体としてみると稲作作付け率は県平均を下回るが、その中であって、県全体の春米作付けの87%がここに集中している。特に、サヴァルに全県の春米の69%が集中している(表16)。又、表15より、

植民地支配期ベンガル農業社会の地域構造（III-1）

表 13 ダッカ県農業粗生産額（1910 年前後）

作 物	面 積	産 出	価 格	粗生産額
	エーカー	マン／エーカー	ルピー / マン	ルピー
ジュート	256,201	15	8	30,750,000
冬 米	732,114	15	2-8	27,500,000
菜園作物	122,225			18,250,000
夏 米	220,974	13	2-6	6,750,000
芥子菜	88,608	10	7	6,200,000
雑 穀	103,861	10	3-8	3,750,000
ケサリ豆	113,735	10	3	3,400,000
香辛料	16,015	8	10	1,300,000
ベテル	2,992			870,000
砂糖きび	4,920			750,000
大 麦	29,263	12.5	2	750,000
モスリ豆	16,416	10	4-8	740,000
胡 椒	9,839	9	8	700,000
タバコ	6,709	10	8	660,000
春 米	11,462	20	2-4	510,000
ヒヨコ豆	7,056	12	4	340,000
ジャガイモ	1,460	100	2	290,000
小 麦	4,075	9	5	180,000
各種種子	1,664	8	6	80,000
飼 料	624			70,000
マング豆	2,702	4	5	50,000
亜麻仁	1,338	2	7	20,000
合 計	1,754,253			103,910,000

注 『地籍事業報告書』、バラ 71、原文中の総面積の計算違いを正した。

表 14 各タナの特作付面積における各作物の構成比

タナと地域類型	穀 物 と 豆 類						油 性 種 子										
	米			小麦	大麦	雑穀	レンズ豆	ムング豆	ヒヨコ豆	合計	亜麻仁	胡麻	芥子菜	その他	合計		
	夏米	冬米	春米													合計	
ナワーブガンジ	45	85.1	0.2	89.8	0.3	6.9	8.4	1.2	0.5	0.2	11.7	118.8	0.0	0.3	10.4	0.2	10.9
セ ア ロ	24.3	63.2	0.0	87.5	2.0	6.6	13.7	1.4	0.1	2.6	12.7	126.5	0.7	1.6	3.2	0.1	5.5
マニクガンジ	21.6	68.9	0.1	90.5	0.3	7.2	18.7	1.2	0.0	1.4	19.5	138.8	0.0	0.3	7.3	0.1	7.7
ハリランブル	12.1	74.2	0.0	86.4	2.2	6.7	14.9	4.9	0.0	3.1	5.1	123.2	0.2	0.7	3.9	0.0	4.8
地域類型 I	17.2	71.5	0.1	88.8	1.1	6.9	14.4	1.8	0.2	1.7	13.6	128.5	0.2	0.7	6.2	0.1	7.3
カバシア	22.4	47.2	0.7	70.3	0.0	0.0	1.0	0.3	0.1	0.0	2.6	74.2	0.0	0.6	10.8	0.0	11.4
ケラニガンジ	10.4	61.1	0.6	72.1	0.1	0.8	3.8	0.2	0.1	0.3	4.2	81.6	0.1	1.2	7.8	0.1	9.2
コトワリ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
サザル	14.7	45.9	4.9	65.5	0.0	1.0	8.6	0.3	0.1	0.1	11.4	87.0	0.2	1.9	8.5	0.3	10.9
地域類型 II	16.4	50.7	2.1	69.1	0.0	0.6	4.4	0.3	0.1	0.1	6.0	80.6	0.1	1.2	9.1	0.2	10.6
ナラヤンガンジ	8.1	56.3	0.0	64.4	0.0	1.3	13.9	4.3	0.2	0.4	8.2	92.6	0.0	0.1	3.8	0.1	3.9
ルーブガンジ	15.8	57.9	0.0	73.7	0.0	0.7	9.3	3.1	0.2	0.1	6.7	93.7	0.0	0.2	5.6	0.1	5.8
ライブラ	26.0	48.5	0.0	74.4	0.0	0.0	3.6	0.6	0.8	0.0	4.7	84.1	0.0	0.4	6.4	0.0	6.8
地域類型 III	19.3	53.1	0.0	72.4	0.0	0.5	7.3	2.1	0.5	0.1	6.0	88.9	0.0	0.3	5.6	0.1	6.0
スリナガル	16.8	59.4	0.0	76.1	0.6	3.3	11.1	1.4	0.0	0.4	7.0	99.9	0.0	0.4	5.0	0.3	5.8
ムンシガンジ	6.8	34.0	1.9	42.7	0.1	0.4	17.1	1.2	bb	0.2	7.2	69.0	0.0	0.9	1.2	0.2	2.2
地域類型 IV	12.6	48.7	0.8	62.1	0.4	2.1	13.6	1.3	0.1	0.3	7.0	86.9	0.0	0.6	3.4	0.2	4.3
県合計	16.9	56.1	0.9	73.9	0.3	2.2	8.7	1.3	0.2	0.5	8.0	95.2	0.1	0.8	6.8	0.1	7.8

注 『地籍事業報告書』付表Bより。

表 14 つづき

タナと地域類型	香辛料	砂糖 きび	織 維 植 物				嗜好品	そ の 他					総 計	2 主 作地	純耕 作地
			イン ド麻	ジュ ート	その他	合 計		飼 料	ベテ ル	菜園 作物	食 ボテ	糧 その他			
ナワーブガンジ	2.0	0.1	0.0	4.5	0.0	4.5	0.2	0.0	0.0	5.6	0.5	1.6	145.3	45.3	100.0
セ ア ロ	0.9	0.0	0.0	14.9	0.0	14.9	0.6	0.0	0.0	5.1	0.0	0.0	153.6	53.6	100.0
マニクガンジ	1.3	0.0	0.0	10.8	0.0	10.8	0.5	0.0	0.0	3.9	0.0	0.0	163.1	63.1	100.0
ハリランブル	3.2	0.1	0.0	8.2	0.0	8.2	0.6	0.0	0.3	8.5	0.0	0.0	148.7	48.7	100.0
地域類型 I	1.6	0.1	0.0	10.2	0.0	10.2	0.5	0.0	0.0	5.3	0.1	0.4	154.3	54.3	100.0
カバシ	0.6	0.2	0.1	20.7	0.0	20.7	0.5	0.3	0.1	8.6	0.6	1.3	118.7	18.7	100.0
ケラニガンジ	0.8	0.2	0.0	12.2	0.0	12.2	0.4	0.0	0.0	11.8	0.0	0.0	116.2	16.2	100.0
コトワリ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	88.4	3.8	7.8	100.0	0.0	100.0
サゲアル	1.0	0.1	0.0	20.3	0.0	20.3	0.6	0.0	0.0	13.4	0.0	0.0	133.1	33.1	100.0
地域類型 II	0.8	0.2	0.0	18.1	0.0	18.1	0.5	0.1	0.0	11.2	0.2	0.5	122.9	22.9	100.0
ナラヤンガンジ	1.2	0.6	0.0	29.9	0.0	29.9	0.2	0.0	0.2	6.3	0.0	0.0	134.9	34.9	100.0
ループガンジ	1.6	1.0	0.0	29.0	0.0	29.0	0.5	0.0	0.3	5.3	0.0	0.0	137.2	37.2	100.0
ライブラ	1.2	0.5	0.2	20.4	0.0	20.6	1.1	0.0	0.0	17.0	0.0	0.0	131.3	31.3	100.0
地域類型 III	1.3	0.7	0.1	25.0	0.0	25.1	0.7	0.0	0.1	11.1	0.0	0.0	133.9	33.9	100.0
スリナガル	1.5	0.5	0.1	19.4	0.0	19.5	0.1	0.0	0.4	6.3	0.0	0.0	133.9	33.9	100.0
ムシガンジ	1.5	1.7	0.0	44.6	0.0	45.4	0.2	0.0	2.6	10.2	0.0	0.0	132.0	32.0	100.0
地域類型 IV	1.5	1.0	0.0	30.0	0.0	30.3	0.2	0.0	1.3	7.9	0.0	0.0	133.1	33.1	100.0
県 合 計	1.2	0.4	0.0	19.6	0.0	19.6	0.5	0.0	0.2	9.4	0.1	0.3	134.7	34.7	100.0

表 15 作物のタナ・地域類型への集中度指数

タナと地域類型	穀 物 と 豆 類										油 性 種 子						
	米				小麦	大麦	雑穀	レンズ豆	ムング豆	ヒヨコ豆	その他	合計	亜麻仁	胡麻	芥子菜	その他	合計
	夏米	冬米	春米	合計													
ナワーブガンジ	0.3	1.6	0.3	1.3	0.9	3.3	1.0	1.0	2.3	0.3	1.6	1.3	0.3	0.5	1.6	1.5	1.5
セ ア ロ	1.4	1.1	0.0	1.1	6.0	2.8	1.5	1.1	0.7	4.5	1.5	1.3	6.3	2.1	0.4	0.4	0.7
マニクガンジ	1.3	1.3	0.1	1.3	0.9	3.4	2.3	1.0	0.2	2.8	2.6	1.5	0.2	0.4	1.1	0.9	1.0
ハリランブル	0.7	1.3	0.0	1.2	7.1	3.0	1.7	3.9	0.1	5.8	0.6	1.3	1.9	0.9	0.6	0.2	0.6
地域類型 I	1.0	1.3	0.1	1.2	3.4	3.1	1.7	1.5	0.8	3.3	1.7	1.4	2.4	1.0	0.9	0.8	1.0
カバシア	1.2	0.8	0.7	0.9	0.0	0.0	0.1	0.2	0.3	0.0	0.3	0.7	0.3	0.7	1.5	0.3	1.4
ケラニガンジ	0.6	1.0	0.7	0.9	0.3	0.4	0.4	0.1	0.6	0.5	0.5	0.8	0.7	1.5	1.1	1.0	1.1
コトワリ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
サザル	0.8	0.8	5.3	0.8	0.0	0.4	0.9	0.2	0.3	0.3	1.4	0.9	2.0	2.4	1.2	2.5	1.3
地域類型 II	0.9	0.8	2.2	0.9	0.1	0.2	0.5	0.2	0.4	0.2	0.7	0.8	1.0	1.5	1.3	1.2	1.3
ナラヤンガンジ	0.5	1.1	0.0	0.9	0.1	0.6	1.7	3.6	0.9	0.7	1.1	1.0	0.1	0.1	0.6	0.4	0.5
ルーブガンジ	1.0	1.1	0.0	1.1	0.0	0.3	1.2	2.7	0.9	0.3	0.9	1.1	0.2	0.2	0.9	0.5	0.8
ライブラ	1.8	1.0	0.0	1.2	0.0	0.0	0.5	0.6	4.6	0.0	0.7	1.0	0.2	0.6	1.1	0.4	1.0
地域類型 III	1.3	1.1	0.0	1.1	0.0	0.2	1.0	1.9	2.6	0.2	0.8	1.1	0.2	0.4	0.9	0.4	0.9
スリナガル	1.0	1.1	0.0	1.0	1.9	1.5	1.3	1.1	0.2	0.8	0.9	1.1	0.3	0.5	0.8	2.4	0.7
ムンシガンジ	0.3	0.5	1.8	0.5	0.2	0.1	1.6	0.8	0.5	0.3	0.7	0.6	0.0	0.9	0.1	1.0	0.2
地域類型 IV	0.7	0.8	0.9	0.8	1.1	0.9	1.4	0.9	0.3	0.6	0.8	0.8	0.1	0.7	0.5	1.7	0.5
県 合 計	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0

注 各タナの1平方マイルあたりの各作物の平均面積を、県全体における各作物の面積割合で割ったもの、『地籍事業報告書』、付表Bより。

表 15 つづき

タナと地域類型	香辛料	砂糖 きび	織 維 植 物				嗜好品	そ の 他					総 計	2毛 作地	純耕 作地	面積	
			イン ド麻		ジュ ート	その他		合 計	タバコ	飼 料	ベテル	食 糧					
			菜園 作物	ポテト								その他					非食糧
ナワーブガンジ	1.8	0.3	0.0	0.2	2.9	0.2	0.5	0.3	0.0	0.6	4.6	6.6	20.3	1.1	1.4	1.1	1.0
セ ア ロ	0.7	0.0	0.0	0.7	11.6	0.7	1.2	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	1.1	1.5	1.0	1.0
マニクガンジ	1.1	0.1	0.1	0.6	0.0	0.6	1.1	0.0	0.1	0.4	0.0	0.0	0.1	1.3	1.9	1.1	1.0
ハリランブル	2.7	0.1	0.2	0.4	0.0	0.4	1.1	0.0	1.3	0.9	0.0	0.0	0.0	1.1	1.4	1.0	1.0
地域類型 I	1.4	0.1	0.1	0.5	4.2	0.5	1.0	0.1	0.2	0.6	1.0	1.4	4.2	1.2	1.6	1.0	1.0
カバシア	0.4	0.6	1.8	1.0	0.0	1.0	0.9	6.7	0.4	0.9	5.1	4.5	0.0	0.8	0.5	0.9	1.0
ケラニガンジ	0.6	0.5	0.0	0.6	0.0	0.6	0.7	0.0	0.1	1.2	0.0	0.0	0.0	0.8	0.4	0.9	1.0
コトワリ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.3	4.5	4.0	0.0	0.1	0.0	0.1	1.0
サヴェール	0.8	0.2	0.0	1.0	0.0	1.0	1.0	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.9	0.9	1.0	1.0
地域類型 II	0.6	0.4	0.7	0.9	0.0	0.9	0.9	2.5	0.2	1.1	2.0	1.7	0.0	0.9	0.6	0.9	1.0
ナラヤンガンジ	1.0	1.8	0.0	1.6	0.0	1.6	0.4	0.0	1.1	0.7	0.0	0.0	0.0	1.1	1.1	1.1	1.0
ループガンジ	1.5	2.7	0.0	1.6	0.0	1.6	1.0	0.0	1.3	0.6	0.0	0.0	0.0	1.1	1.2	1.1	1.0
ライブラ	1.2	1.4	5.2	1.2	0.0	1.2	2.5	0.0	0.2	2.1	0.0	0.0	0.0	1.2	1.1	1.2	1.0
地域類型 III	1.2	2.0	2.4	1.4	0.0	1.4	1.6	0.0	0.7	1.3	0.0	0.0	0.0	1.1	1.1	1.1	1.0
スリナガル	1.2	1.3	1.7	1.0	0.0	1.0	0.2	0.0	1.7	0.7	0.0	0.0	0.0	1.0	1.0	1.0	1.0
ムンシガンジ	1.0	3.7	0.1	1.9	0.0	1.9	0.3	0.0	9.5	0.9	0.1	0.0	0.0	0.8	0.8	0.8	1.0
地域類型 IV	1.1	2.4	1.0	1.4	0.0	1.4	0.3	0.0	5.4	0.8	0.1	0.0	0.0	0.9	0.9	0.9	1.0
県 合 計	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0

カバシアにおいて夏米の集中度指数が 1.2 と高い。その他に指数が高い作物は、芥子菜、胡麻、牧草、ポテトである。ジュートもかなり作られているが、県平均にはやや及ばない。

第 III 地域は、表 15 より、稲作集中度指数が 1.3 とかなり高いが、同時にジュートも県内最高の高い作付け率を示し、指数も 1.4 である。その他に、タバコ、砂糖きび、豆類、園地作物、香辛料の集中度指数も高い。こうして、第 III 地域は、収益性の高い商品作物の作付けが多い、豊かな農業地域である。

第 IV 地域は、稲作も豆類も油性植物栽培も県内で最低水準である。だが、ジュート作付けは多く、又、表 16 より、キンマの葉の県内作付けの 70% が集中し、更に、表 15 より、砂糖きび生産の集中度指数も県内で最高 (2.4) である。従って、ここは自給用食糧作物生産はきわめて低い水準にあるが、他方で、高付加価値の商業作物の作付けにおいては、県内で最高の水準にある。

2 時系列変化——個々の作物と作物の組み合わせ——

米、ジュート、果樹・野菜、砂糖きび、油性種子の栽培面積、そして、総栽培面積（純・粗）を手掛かりに、この県の農業の長期的な実績を把握したい。

ここで問題になるのは、『季節と作況報告』の精度である。ファリドブル県を対象とした前稿で『地籍事業報告書』の集計結果によって、『季節と作況報告』の修正を行ったが、ダッカ県についても同様の検討を試みた。ダッカ県とファリドブル県は隣接し、かつ、地籍確定事業は時期的に連続して実施された。しかし、ダッカ県における作付け面積データが集められた 1910～14 年について、『地籍事業報告書』と『季節と作況報告』の数値を比較してみると、幾つかの主要作物について両者は接近するが、他の幾

つかの比較的マイナーな作物についての数値は大きく食い違い、『季節と作況報告』が『地籍事業報告書』を参照して数値を修正した形跡が見られない(表 17)。前稿で提示した、粗い主観的調査に基づく『季節と作況報告』が実測に基づく『地籍事業報告書』の数値で修正されたという仮説は、マイナーな作物については妥当しないことを認めざるを得ない。

両者の数値が接近している(それが修正の結果か、独立に行われた両調査の精度が接近したのかは今は問わない)のは冬米、夏米、ジュート、芥子菜などである。顕著な乖離が見出されるのは春米、小麦、大麦、砂糖きび、胡麻、香辛料、タバコ、野菜・果実、雑作物(miscellaneous crop)などである。後者の内、多様な品種を含む春米、小麦、香辛料、野菜・果実、雑作物では、集計方法の変更がこの乖離の一端を説明すると考えられる。又、春米は丘陵地内の低湿地で栽培されることが多く、無視し得ない集計漏れが存在した可能性が高い。例えば、小麦の作付けは 1901～17 年の期間に『季節と作況報告』ではゼロであるが、突如 1918 年から『地籍事業報告書』に近い数値が出現する。これは、1901～17 年の期間は小麦の数値が「その他の食穀」に含まれていたからであろう。又、『地籍事業報告書』の「砂糖きび」には、『季節と作況報告』では別個に集計されたデート糖(デート椰子の果汁から精製する砂糖)が含まれている可能性が高い。だが、これらのテクニカルな問題だけで、上で指摘したほどの顕著な乖離にいたるとは思われず、前稿で述べた様に、『季節と作況報告』の出発点における情報の精粗や、誤差が蓄積してしまう主観的方法の固有の欠点、そして、マイナー作物であるが故に、行政側に正確なデータを収集する意欲が低いことなどの諸点があるであろう。

以下の作物面積の時系列変化に関する考察では、両系統の数値が比較的に近接している冬米、夏米、ジュート、芥子菜、そして、純耕作面積を取り上げる。

表 16 各作物のタナ・地域類型への分布割合

タナと地域類型	穀 物 と 豆 類						油 性 種 子									
	米			小麦	大麦	雑穀	レンズ豆	ムング豆	ヒヨコ豆	合計	亜麻仁	胡麻	芥子菜	その他	合計	
	夏米	冬米	春米													合計
ナワーブガンジ	1.4	7.8	1.3	6.3	4.2	15.9	5.0	4.7	11.3	1.6	6.4	1.3	2.3	7.9	7.5	7.3
セ ア ロ	10.1	7.9	0.2	8.3	44.5	20.9	11.1	7.9	5.1	33.3	9.4	46.4	15.2	3.3	3.3	5.0
マニクガンジ	10.4	10.0	0.5	10.0	6.9	26.2	17.5	7.7	1.5	21.6	11.9	1.7	2.9	8.7	7.2	8.1
ハリランブル	2.6	4.8	0.0	4.3	25.6	11.0	6.2	14.2	0.3	21.0	4.7	6.7	3.2	2.1	0.6	2.2
地域類型 I	24.5	30.6	1.9	28.9	81.2	73.9	39.8	34.5	18.1	77.5	41.1	56.1	23.6	22.0	18.6	22.6
カバシア	18.1	11.5	10.6	13.0	0.0	0.1	1.5	3.4	4.9	0.6	4.4	10.7	4.5	21.7	4.0	20.1
ケラニガンジ	6.3	11.2	7.2	10.1	3.5	3.9	4.5	1.4	6.1	5.3	8.9	7.2	16.3	11.9	11.1	12.2
コトワリ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
サゲアル	10.7	10.1	69.0	11.0	0.6	5.5	12.2	2.6	3.5	3.3	11.3	25.5	30.7	15.4	32.8	17.3
地域類型 II	35.1	32.9	86.7	34.0	4.1	9.4	18.2	7.5	14.5	9.1	30.8	37.2	57.6	49.0	47.9	49.7
ナラヤンガンジ	2.3	4.8	0.0	4.2	0.3	2.8	7.7	16.4	3.8	3.1	5.0	4.7	0.6	2.7	2.0	2.4
ルーブガンジ	8.8	9.7	0.1	9.4	0.2	2.8	10.0	23.1	7.7	2.5	7.9	9.3	2.1	7.7	4.2	7.1
ライブラ	20.3	11.5	0.0	13.4	0.0	0.0	5.4	6.2	51.5	0.4	7.8	11.7	2.0	6.7	12.5	11.6
地域類型 III	31.4	26.0	0.1	26.9	0.5	5.6	23.2	45.7	63.0	6.1	20.6	25.7	4.7	9.4	22.9	21.1
スリナガル	6.9	7.4	0.2	7.2	13.1	10.3	8.9	7.6	1.2	5.6	6.1	7.4	1.8	3.6	5.2	5.2
ムンシガンジ	2.0	3.1	11.0	2.9	1.2	0.8	9.9	4.8	3.1	1.8	4.5	3.7	0.1	5.8	0.9	1.5
地域類型 IV	9.0	10.5	11.2	10.1	14.3	11.2	18.8	12.4	4.4	7.4	10.7	11.0	1.9	9.4	6.1	6.6
県合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注 『地籍事業報告書』付表 B より。

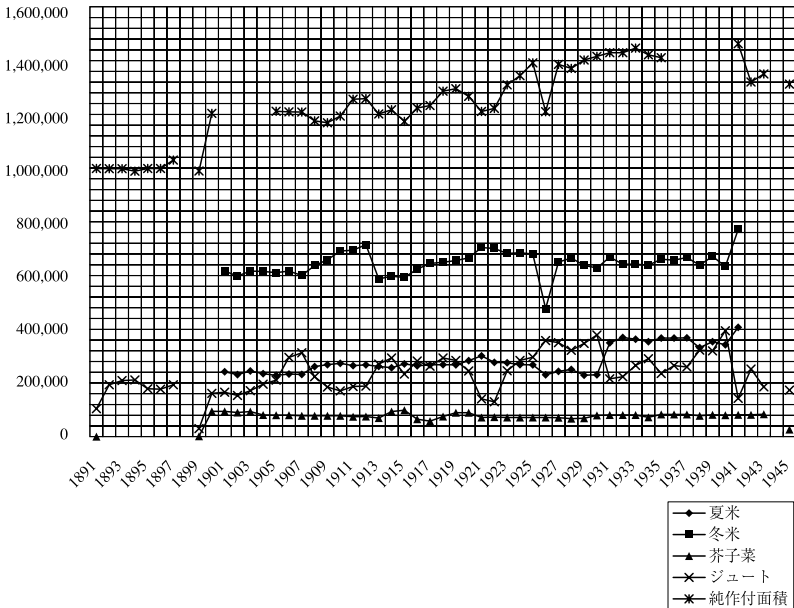
表 16 つづき

タナと地域類型	香辛料	砂糖 きび	織 維 植 物				嗜好品	そ の 他					総 計	2 毛 作地	純耕 作地	面積	
			イン ド麻	ジュ ート	その他	合 計		タバコ	飼 料	ベテル	食 糧						
											菜園 作物	ポテト	その他				非食糧
ナワーブガンジ	8.5	1.5	0.0	1.2	14.3	1.2	2.2	1.4	0.0	3.1	22.5	32.3	99.1	5.6	6.7	5.2	4.9
セ ア ロ	5.4	0.1	0.2	5.4	85.7	5.4	8.7	0.0	0.0	3.8	0.0	0.0	0.0	8.0	10.9	7.1	7.4
マニクガンジ	8.7	1.1	0.4	4.5	0.0	4.5	8.4	0.0	0.5	3.4	0.0	0.0	0.8	9.9	14.9	8.2	7.7
ハリランブル	9.6	0.5	0.9	1.5	0.0	1.5	4.0	0.0	4.7	3.3	0.0	0.1	0.0	4.0	5.1	3.7	3.6
地域類型 I	32.2	3.3	1.6	12.6	100.0	12.5	23.3	1.4	5.2	13.6	22.5	32.4	99.8	27.5	37.6	24.0	23.6
カ バ シ ア	6.5	8.8	26.7	14.4	0.0	14.4	13.1	98.6	5.5	12.6	75.8	66.8	0.2	12.0	7.4	13.7	14.8
ケラニガンジ	6.7	5.2	0.0	6.5	0.0	6.4	7.5	0.0	1.0	13.0	0.0	0.0	0.0	8.9	4.8	10.3	11.0
コ ト ワ リ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.9	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2
サ ヴ ァ ル	10.0	2.9	0.2	12.8	0.0	12.8	13.4	0.0	0.0	17.7	0.0	0.0	0.0	12.2	11.8	12.4	13.0
地域類型 II	23.2	16.9	26.9	33.7	0.0	33.6	34.0	98.6	6.5	43.6	76.6	67.6	0.2	33.2	24.0	36.4	39.0
ナラヤンガンジ	4.6	7.9	0.0	7.4	0.0	7.3	1.9	0.0	5.2	3.2	0.0	0.0	0.0	4.8	4.8	4.8	4.5
ループガンジ	12.6	23.8	0.0	14.0	0.0	13.9	8.9	0.0	10.9	5.3	0.0	0.0	0.0	9.6	10.1	9.4	8.6
ラ イ プ ラ	13.0	16.1	58.6	13.9	0.0	13.9	28.3	0.0	2.1	24.0	0.0	0.0	0.0	12.9	12.0	13.3	11.2
地域類型 III	30.2	47.8	58.6	35.2	0.0	35.2	39.1	0.0	18.1	32.6	0.0	0.0	0.0	27.3	26.9	27.5	24.4
スリナガル	8.4	9.0	12.0	7.0	0.0	7.0	1.7	0.0	11.6	4.7	0.0	0.0	0.0	7.0	6.9	7.0	6.9
ムンシガンジ	6.1	22.9	0.9	11.5	0.0	11.7	1.8	0.0	58.6	5.5	0.9	0.0	0.0	5.0	4.7	5.1	6.1
地域類型 IV	14.4	32.0	12.9	18.5	0.0	18.6	3.6	0.0	70.2	10.2	0.9	0.0	0.0	11.9	11.5	12.1	13.0
県 合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表 17 『地籍事業報告書』と『季節と作況報告』統計の比較

情報源	年度	穀 物 と 豆 類						油 性 種 子																		
		米			小 麦	大 麦	雑 穀	レンズ豆	ムング豆	ヒヨコ豆	その他	合 計	亜麻仁	胡麻	芥子菜	その他	合 計									
		夏 米	冬 米	春 米																						
		合 計	合 計	合 計																						
『地籍事業報告書』	1910-14	220,974	732,114	11,462	964,550	4,075	29,263	113,735	16,416	2,702	7,056	103,861	1,241,658	1,338	9,839	88,608	1,664	101,449								
	1908	260,600	636,600	45,200	942,400	0	7,900	0	0	0	1,000	101,000	1,052,300	4,800	12,700	77,800	30,000	125,300								
	1909	267,700	657,900	45,200	970,800	0	7,900	0	0	0	1,000	101,000	1,080,700	4,800	12,700	77,800	30,000	125,300								
	1910	272,700	691,300	45,200	1,009,200	0	7,900	0	0	0	1,000	101,000	1,119,100	4,800	12,700	77,800	30,000	125,300								
	1911	264,200	694,100	45,200	1,003,500	0	7,900	0	0	0	1,000	101,000	1,113,400	4,000	12,700	74,000	30,000	120,700								
	1912	267,200	714,400	45,200	1,026,800	0	7,900	0	0	0	1,000	86,900	1,122,600	4,500	18,300	74,800	0	97,600								
	1913	261,200	587,300	45,200	893,700	0	7,900	0	0	0	1,000	70,200	972,800	4,200	25,500	69,400	0	99,100								
『季節と作況報告』	1914	256,400	597,200	53,700	907,300	0	8,100	0	0	0	1,000	95,600	1,012,000	4,600	23,900	93,200	0	121,700								
	1915	270,500	592,600	53,700	916,800	0	8,100	0	0	0	1,000	94,400	1,020,300	4,600	27,500	98,400	0	130,500								
	1916	263,600	623,600	53,000	940,200	0	8,100	0	0	0	900	78,200	1,027,400	4,600	25,600	65,000	0	95,200								
	1917	266,900	645,000	52,100	964,000	0	8,100	0	0	0	900	76,700	1,049,700	4,600	27,400	58,000	0	90,000								
情報源	年度	織 維 植 物					嗜好品	飼 料	ベテラ	そ の 他			総 計	2 毛 作 地	純 耕 作 地											
		イン ド 麻	砂糖	きび	香 辛 料	ジュ ート				合 計						茶 園 作物	食 糧	非 食 糧								
																						その他	合計	合計	合計	
																						合計	合計	合計	合計	
『地籍事業報告書』	1910-14	16,015	4,920	449	255,245	7 256,201	6,709	624	2,922	122,225	1,460	3,420	665	1,757,768	452,907	1,304,861										
	1908	17,300	16,200		222,800	0 222,800	10,400			19,800	45,300	43,900	358,300	1,533,500	358,300	1,175,200										
	1909	17,300	16,400		184,600	0 184,600	10,400			19,800	45,300	44,100	356,000	1,524,100	356,000	1,168,100										
	1910	17,300	16,400		170,600	0 170,600	10,400			19,800	45,300	25,200	356,000	1,549,400	356,000	1,193,400										
	1911	17,300	16,100	0	186,600	0 186,600	10,400	1,500		23,600	45,300	42,500	322,400	1,578,200	322,400	1,255,800										
	1912	2,300	15,900	0	188,000	0 188,000	12,000	2,000		23,600	40,100	42,500	289,200	1,547,400	289,200	1,258,200										
	1913	2,300	17,600	0	270,000	0 270,000	12,000	2,000		14,200	31,000	35,500	258,000	1,459,400	258,000	1,201,400										
『季節と作況報告』	1914	3,300	19,500	0	293,100	200 293,300	14,700	2,000		16,000	41,800	7,000	317,500	1,534,200	317,500	1,216,700										
	1915	3,300	21,800	0	233,000	200 233,200	14,700	2,800		18,100	40,000	7,000	320,700	1,493,900	320,700	1,173,200										
	1916	4,800	21,900	0	281,100	800 281,900	12,500	1,800		31,700	40,500	6,200	303,500	1,526,300	303,500	1,222,800										
	1917	3,300	22,100	0	262,100	600 262,700	11,000	1,800		31,600	32,900	6,000	281,200	1,513,500	281,200	1,232,300										

図1 主要作物作付 (1891-1945)



冬米作付けは1901年から1907年にかけて60万エーカー強で推移した。だが図1をよく観察すると、冬米作付けは、ジュート作付けが1903年以降1907年まで急速に増加する中で微減し、1908年から1912年までジュート作付けの急減の中で、1908年から急増し70万エーカー内外に達している。そして、1913～14年のジュート作付けの回復の中で、丁度その増分に匹敵する程の冬米耕作の減少が見られる。興味深いのは、夏米の変動であり、冬と比べて遥かに小さな規模ではあるが、ジュート作付けの変動と逆の方向に、この間の作付面積が変動している。冬、夏米は共に、ジュートの激しく急な変動に対応して動いているが、その動き方はやや遅れ、変動幅も小さい。敢えて単純化して仮説を提出するなら、ジュートの激しく飛び跳

表 18 主要作物相関係数（1891-1945）

相関係数	夏 米	冬 米	芥子菜	ジュート	純作付面積
夏 米	1.000	0.452**	0.094	-0.077	0.667**
冬 米	0.452**	1.000	-0.156	-0.400**	0.174
芥 子 菜	0.094	-0.156	1.000	0.225	0.262
ジュート	-0.077	-0.400	0.225	1.000	0.538**
純作付面積	0.667**	0.174	0.262	0.538**	1.000

注 **の相関係数は1%水準で有意, N=41

ねる様な作付け変動（これは、世界資本主義の論理を反映）に対して、冬米・夏米（危機回避的な地域の論理・生存の論理を反映）が、その変動に対応しつつも、その作付け変動の幅を抑える様に動いたといえるであろう。なお、表18にある様に、ジュート作付けの変動は、純作付面積の変動とかなり高い相関（相関係数 0.538, 1% 水準で有意）を示し、作付け率の変動との相関（相関係数 0.517, 1% 水準で有意）を上回っている。これは、ジュート作付けの拡大は既存の耕地の作付け率の上昇による部分（但し、作付け率に関する数値は、『地籍事業報告書』と『季節と作況報告』とでフィットがあまり良くないので、かなり割り引いて考える必要がある）も小さくないが、それ以上に開発によって拡大している部分が多いことを示唆しているだろう。フェリドプル県で観察された1929年以降の明瞭な生存経済への方向転換（冬米・夏米両者の作付の一貫した増加）は、ダッカ県では冬米については明瞭には表われておらず、生存経済への方向転換は夏米の作付けの増加の中に表現されている。

冬米, 夏米, ジュートの作付け変化の連動を、もう少し、細かく期間を分け、相関係数の推移を見ながら、考察してみよう。既に述べた様に、冬米, 夏米どちらもジュートとの代替関係が見られる。全期間を見るとこれは冬米についてのみ有意であり、夏米については極めて微弱である。期間

を分けることにより、夏米についてももう少しはっきりした代替関係を見出せるかもしれない。更に、芥子菜についても同様の検討を行っておきたい。ここでは、サンプル数などを考えて、1901～45 年を、1913 年、1926 年の二時点に分けて、3つの区間とし、冬米、夏米、ジュート、芥子菜、純作付面積の5変数について相関係数を求めよう。その結果は、表 19 に与えられている。

この表は、1901-45 年を1区間とした場合には隠されてしまった非常に興味深い相関を示している。

第1期(1901-12)には、ダッカ県の作付変動に特徴を与えるのは冬米の展開であり、冬米の作付け面積と夏米のそれとの非常に高い正の相関(0.893, 1% 水準で有意)、芥子菜との間にかかなり高い負の相関(-0.594, 1% 水準で有意)が見られた。冬米と夏米の高い正の相関は、未開地の開発の進行と、2毛作地の拡大との同時進行を示唆する。ジュートに関しては、夏米、冬米、芥子菜のそれぞれと低めの負の相関を示すが、いずれも5% 水準で統計的に有意でない。

第2期(1913-25)で、最も特徴的なことは、ジュート作付けの拡大が夏米からの作付け転換で進行したといえること(両者の間に、-0.764 という高い負の相関が1% 有意水準で見られる)である。純作付け面積と冬米、ジュートが中位の正の相関性を示しているが、残念ながら5% 水準でも統計的には有意でない。冬米と夏米の高い正の相関(0.662, 1% 水準で有意)は、第1期に引き続いて存在する。

第3期(1926-45)を特徴付けるのは、ジュートの作付けが冬米、夏米の両者と高い負の相関(それぞれ、1% 有意水準で、-0.611 と -0.744)を示すことである。この期の前半のジュートの拡大は冬米と夏米の作付けの犠牲の上に進行したのであり、逆に、後半にはジュート作付け地が、冬米地、夏米地一特に後者へーと転換したと推論できる。その他の特徴とし

表 19 主要作物相関係数 (3 期間)

期間 1 (1901-12)

	夏 米	冬 米	芥 子 菜	ジュート	純作付面積
夏 米	1.000	0.893	-0.460	-0.365	0.006
冬 米	0.893**	1.000	-0.594*	-0.307	0.464
芥 子 菜	-0.460	-0.594*	1.000	-0.393	-0.660
ジュート	-0.365	-0.307	-0.393	1.000	-0.092
純作付面積	0.006	0.464	-0.660	-0.092	1.000

期間 2 (1913-25)

	夏 米	冬 米	芥 子 菜	ジュート	純作付面積
夏 米	1.000	0.662**	-0.044	-0.764**	-0.088
冬 米	0.662**	1.000	-0.352	-0.487	0.529
芥 子 菜	-0.044	-0.352	1.000	0.065	-0.205
ジュート	-0.764**	-0.487	0.065	1.000	0.429
純作付面積	-0.088	0.529	-0.205	0.429	1.000

期間 3 (1926-45)

	夏 米	冬 米	芥 子 菜	ジュート	純作付面積
夏 米	1.000	0.568**	0.780**	-0.744**	0.478
冬 米	0.568**	1.000	0.393	-0.611**	0.303
芥 子 菜	0.780**	0.393	1.000	0.106	0.357
ジュート	-0.744**	-0.611**	0.106	1.000	0.229
純作付面積	0.478	0.303	0.357	0.229	1.000

注 **の相関係数は 1% 水準で, * は 5% で有意. 第 1 期間は N=12, 第 2 期間は N=13, 第 3 期間は N=16.

て, 夏米と冬米の正の相関はなお続くが, その相関係数は, 第 1 期の 0.893 から, 第 2 期の 0.662, そして, 第 3 期の 0.568 へと落ちてきている (いずれも 1% 水準で有意).

この様に、ジュート耕作の拡大は、第1期には冬米、夏米、芥子菜からの作付け転換によって推進されたが、その関連性や程度はそれほど強くなかった。第2期になると、夏米の犠牲の上にジュートが拡大するというよく知られた図式が妥当性を獲得し、第3期前半には夏米だけではなく冬米地までジュート栽培地へと転換したが、後半には逆にジュートから夏米への再転換が生じたことが、相当に高い確からしきで推論され得る。

VII 農業労働と賃金

19世紀中頃の農業奉公人と日雇い労働者について、テイラーは、彼等の賃金は貨幣、又は、貨幣と食事で払われており、「犁耕、薪/草取り、農作業などを行う為に農民が雇った奉公人は、食事と賃金を合わせて、月に1ルピーから1.5ルピー、家畜の世話に雇われた少年は、年齢により、月に1〜10アナ、そして、稲の収穫の為に雇われた刈手は、その年の作物の作柄や、労働需要により彼らが刈った稲の7分の1から4分の1（平均的には5分の1）を与えられた」とする。彼は更にマイマンスン県やティッペラ県では、労賃がダッカより安く、刈手の取り分は、収穫の10分の1であり、女性も収穫時には、男と同じほどの稼ぎを得たと述べる。彼によると鎌の扱いの巧みな熟練労働者は1日に100束を刈るから、収穫の10分の1を得たとして、1日15シェールの稲（2アナ相当）を得る。刈手は1日の仕事の終了時に生産物を受け取り、家に戻る。稲刈りの他に、田の除草、紅花の採集、ベテルの実の殻取りなどでも雇用が生じ、除草と紅花採集では、女や子供も雇用を得るとも記している。又、テイラーが、奉公人の雇用主は農民であるとして、郷紳層ではなく富農層に言及していることに、留意すべきであろう。（Taylor, 第10章）

センは、センサス統計を用いて、1872年の農業人口は県人口の53%であり、1881年には58%に上昇したとする。農業人口の割合が増加したの

は、他県（マイマンシンハ、ティッペラ、ノアカリなど）からメグナ河の新生中洲（ライブラ、ムンシガンジ、ナラヤンガンジ）への移住者があったこと、非農業の職種から農業への転職者があったことなどにより説明されている。（Sen, パラ 32）

農業労働者の雇主として、センは郷紳層を重視する。彼等は「常に雇用労働を用いるか、刈分（barga）制を採用した。すなわち一般の農民に彼等の所有地や借地の耕作をさせ、時々は耕作費用の一部を負担し、その代わりに、生産物のある部分（3分の1から半分）を得た。」即ち、ダッカ県には自ら耕作する郷紳農業主は殆どいないのである。

センは、この県の農民の大半は下層ムスリムとナマスードラであると述べ、更に、1882年センサスでは、農業従事者中のムスリムの割合が71%、ヒンドゥは28%であり、両者の県内人口に占める割合（ムスリム59%、ヒンドゥ41%）と比べると、ヒンドゥの割合が明らかに低く、従って、ヒンドゥが非農業へ就業する比率がムスリムに比べて相当に高いことを指摘している。

センは、ムスリム農民とナマスードラ農民を比較して、前者は冒険心に富み、知性も高いが浪費的であり、しばしば、経済的に破滅するが、後者は、ムスリムと比べて知的には遅れをとるが、勤勉かつ儉約的であり、県内で最上の農民を成し経済的にも前進しているとする。特に、ナマスードラには、船頭と農民を兼ねる者が多く、この2つの所得源があるので非常に良い総所得を得るとする。

センによれば、ダッカ県の農業では、雇用労働は非常に少なく、作男も少ない。つまり、自作農が多く、土地なし層が少ないので賃労働の供給が少なく、賃金が高い。この為に、作男は得にくい。雇用労働は、夏米とジュートの除草、収穫などで使われるが、これらも、しばしば農民間の協同で行われる。一般に雇用されるのは、同村又は隣村の者であるが、県北、

県北東では、米の収穫時に県西や他県から労働者が来る。これらの収穫労働者は、収穫物の一部（8～10％）を報酬として受け取る。（Sen, パラ 62）

既に述べた様に、センの観察によれば、この県では、奉公人、日雇いなどとして働く賃労働者が非常に少なく、需要が供給を上回っているので、労賃が高く、労働者は平均的農民と同等の所得を得ている。賃金形態は、テイラーの記述と同様に、貨幣＋食事であった。これを貨幣に換算すると、日給 4～5 アナとなる。

アスコリは、1911 年センサスに拠って、県内の農業労働者（agricultural labor）は 30,965 名（従属人口を含めると 66,670 人）であり、農業従事者（agricultural worker）中、6％を占めるのみであるとし、農業労働者が少ないと論じた。但し、このセンサス調査の精度には彼自身も疑問を抱いている。⁽²⁵⁾

総人口のうち、1,992,667 名（67％）が農業で生活している。地主の手代とその従属者 22,323 名、野菜、花、ベテルの葉生産者 21,988 名、地代徴収従事者 85,811 名、一般耕作者 1,862,545 名（63％）である。地所経営従事人口の過大さは、多数の小地所、小保有権、複雑な上層的中間借地権などによる。

アスコリによると、農民は、耕耘や播種に殆ど雇用労働や賃耕を雇わず、これらの仕事は、自家労働でやるか、共同労働/労働交換/共同耕耘で行った。だが、農民は、除草（特に何度も除草を行わなくてはならないジュート栽培が拡大している地域で）と米の収穫作業とは家族外労働を雇う場合がある。収穫時の雇用労働量は天候により増減する。突然の洪水が生じると、至急に刈入れを終了させねばならないから、短期間の内に大量の労働を必要とする。農業労働者の通常の労賃は、食事付きで月 10 ルピーであるが、除草の季節には、食事付きで 1 日 12 アナから 1 ルピー（月額 22

～30 ルピー相当) にまで上昇する。一般的に言って、賃金率は作物の価値と天候により変動する。春米の収穫時には、労働者は収穫物の 8 分の 1 の現物を与えられる。しかし、農民がこの様に外部労働を雇うのはむしろ例外的であり、除草や収穫作業であっても、上述の協同システムで行うことが多い。カパシアとマナハルディの近隣では、雇用労働に現物報酬を払うやり方が、春米だけでなく、冬米にも適用されている。(『地籍事業報告書』, パラ 47)

1872 年には、農業従事者は、280,688 名とされていたから、1911 年までに、年 1.87% の増加を示した。これは、県の人口増加率 1.54% を上回り、総人口中の農業従事者の比率は、15% から 16% に増えた。アスコリは、この増加は、商業から農業への転職(脱工業化現象)ではなく、県北における耕作の拡大と、農民階級自身の高い人口成長率によって説明すべきであろうとする。

VIII 農産物市場

1 道路と輸送手段

テイラーの描写する 19 世紀前半の道路状況は、陸上輸送が殆ど困難であったことを伝える。ダッカから、県北を通してマイマンシン、ジャマルプル(Jamalpur)へ向かう陸路は通行不可能ではないが整備状態が劣悪で難渋を極め、事実上、往来はない。県南に向かう道路は、ショナールガオン、タルマ(Talma)、クルナへと続く。その他の道路は耕地の間を縫って村々をつなぐ細い道であり、荷車は殆ど通行できず、荷は徒歩か荷牛の背で運ぶしかない。県北では、地高が高い地域では水路まで距離があるので荷牛を使うが、低地では、村と河との距離は精々3～4 マイルなので、農民は小船や徒歩で産物を運ぶ。筏や、土壺を縛り合わせた船も使われる。県内のパドマ、ダレッシュアリ、ブリガンガなどの大河には 32 ヶ所の公営

渡し場があり、船 46 艘、船頭 92 名が営業している。その他の大小の市場付近の河では、乾季には地主が渡し船を維持する。宿駅 (dak) を繋ぐダッカーカルカッタの旅は 11 月から 6 月までは可能である。ルートは、ダッカーファリドプル—ジョシヨール—バラサット—ダムダム—カルカッタであり総距離は 199 マイルで、途中、22 宿駅と 20 ヶ所の渡し船を通過する。チッタゴンへの道路は年間を通して利用可能であるが、コミラから先は悪路である。総距離は 169 マイルで、14 宿駅を経る。ダッカから北へスリハット、南へバカルガンジへの道は、低地を通り多くの湖水面、沼沢があるので、陸路で行くことは殆どない。マイマンシンに行くには、陸路でラッキヤ河沿いにループガンジ村に行き、そこから水運でトケに渡り、残りはブラフマプトラ河沿いの陸路を行く。ダッカからカルカッタに行くルートは、季節により異なる。11 月から 6 月は迂回路だが、雨期には、より直線に行ける。インド西部諸州とはジャファルガンジ (Jaffarganj) を経て、ガンジス河を遡る。(Taylor, 第 4 章)

センの時代になると、国有鉄道の 1 支線が、ナラヤンガンジからダッカ市を経由してマイマンシンへ結んだ。ダッカ県内の鉄道の延長距離は 52 マイルで 8 つの駅を通る。蒸気船航路も数多く開かれたが主なものは、5 本である：1. 急行蒸気船 (Despatch steamer) は、ゴアランドとナラヤンガンジ間を毎日運行、2. スリハット行き郵便蒸気船はナラヤンガンジとフェンチュガンジ (Fenchuganj) から毎日出航、3. ナラヤンガンジとゴアランドの間の貨物船は週 1 便、4. アッサムのカチャルから、ナラヤンガンジを経て、カルカッタに至る貨客船、5. ムンシガンジとナラヤンガンジを結ぶ蒸気フェリー。乗客船は、10 航路があるが、そのうち 9 つは、ダッカ市を起点とする。

ダッカ県の商業ルートについてもセンは詳しい記述を残している。この県の主要な商業網は水上ルートであり、メグナ河、ダレッシュアリ河、ラッ

キャ河、ジャムナ河、パドマ河などにより、各地とつながれている。乾季には、多くの河は航行困難になるが、これら5河川は年間を通して航行できる。

県内最大の商業拠点ナラヤンガンジは、ラッキャ河とダレッシャリ河の合流地点に位置する。市場は河岸3マイルにも及ぶ。ここからダッカ市までは鉄道で10マイルの近さであり、ゴアランド、カルカッタ、アッサム、カッチャル、スリハットと定期蒸気船で結ばれている。ナラヤンガンジ市におけるジュート商売については、前稿で述べた。

アスコリの時代の輸送状況を見よう。

鉄道は、1884年建設のナラヤンガンジーダッカーカオライド(Kao-raido)の52マイルの路線に、1914年建設のタンギ(Tangi)ーヴァイラブバザル(Bhairab Bazar)の39.25マイルの路線が加わり、2路線となったが、その進展は、大きな川の架橋、雨季の洪水がネックとなって、阻まれた。

鉄道建設は、鉄道駅と沿線の各地を結ぶ道路建設を活発化させた。こうして県道(district board road)、村道(local board road)が、鉄道建設に誘発されて整備され充実していったことは、重要である。(『地籍事業報告書』、パラ26, 27)。

農産物輸送の大部分は船で行われる。県北では牛荷車もかなり多いが、県西のマニクガンジでは少ない。県南、県東では、少量輸送にはポニーを使うこともあるが、高台地の多いライブラでは少ない。県北のカパシアでは木材輸送に荷車を利用することが多い。乗客を含めての全輸送量は、船244万マン、ポニー2.2万マン、荷車0.5万マンであり、水上輸送が圧倒的である。

2 市場・商業・製造業

この県の市場と製造業の状況を、センとアスコリ、1901年センサスなどに依拠して述べよう。

(i) 商業活動

センは、19世紀末のダッカ県内の商業活動を、次の様に区分している。

1. 殆ど全ての村々を回る行商 (kabuliwara, bepari, vediya など) がいる。
2. 大きな村に1〜2店は見られる常設店。下級米、豆類、押し米 (chira)、粗糖、食用油、塩など数パイサの単価の生活必需品が並び、又、主に英国産綿布数反も置いてある。
3. 週市 (hat)。大きな村に、週に1〜2日、立つ。常駐商人の店舗が幾つもある市場や、単に屋根を掛けただけの仮設店舗のみがある広場など様々な種類がある。大きな村の仮設店舗には鍛冶屋とアルコール取り扱いのライセンスをもつスリ (酒販売業者) が常に見られる。零細商人は、店舗に沿って列になって座る。市場の中には、野菜売り、魚売り、牛乳売り、布売りなどが集まりそれぞれの一角をなす。これらの市場で、周辺の村の住民は生活必需品を得る。食品、野菜、塩、油、米、豆、その他を次ぎの市場が立つまでの1週間分 (あるいは半週間分) 購入するのだ。農民は又ここで自分の産物を売る。
4. 常設市 (bazar)。毎日市場が立つのは地区長官の在所、下級裁判官 (munshif) の在所、大地主の居館のある場所などである。ここでは、野菜、魚、ミルク、米、豆、その他一般の日用品が供給される。
5. 輸出入市場。定期船が航行可能な河川沿いと、重要な農産物や製造品を産する村の近くに立地する。大きな商社、県内大商人の店がある。中には、カルカッタその他に支店を持つ者もいる。ここでは、週市の日だけでなく、常時、商談が行われる。村の市場で売る為の商品を仕入れに零細商

人もここに集まる。ジュート、油性種子、その他の農産物を村の週市や農家の軒先から買い、輸出を行う大商人に売る小さな仲介商人（bepari）もやってくる。

アスコリも、県内の市場について、「多くの常設市が県中に存在する。そして、小規模な週市は週に1〜3日開き、数マイルごとに存在する。重要な商業は、米、ジュート、木材、布、生皮、家畜である。小さな週市では、殆ど域内の農産物や魚のみが売買される」と述べている。市場の基本構造は、センの時代と同じといえよう。

(ii) 産業と専門職

総人口の32%（959,902名）は、農業を生計手段としていない。この内の11%は、行政、宗教、学芸に従事し、残りは、各種工業、商業に従事している。ダッカ市の人口は108,551名、県内のもう一つの都市ナラヤンガンジの人口は、27,876名である。都市人口は1872年以来年率4%で増加しているのに、農村の工業人口は停滞している。他方で、伝統的工業人口（農村の職人層）はコンスタントに都市に流れている。1881〜1901年のジュート商いの増加は、ナラヤンガンジ市人口を倍増させた。又、一時的ではあれ、ダッカ市が州都になった事により、1901〜1911の市人口は18%も増大した。両都市の人口増加は続いている。織物、漁業などは儲けが少ないが、他の商業は良い儲けを生み、工業従事者は栄えている。

商業従事者は、かつて、もっと多かった。1787年、県の商業は125万ポンド、その内ヨーロッパへの衣料25万ポンド、と推定されている。ダッカ商館の投資は200万ルピーを超えた。しかし、この1787年は、ダッカ市の経済状況の転機となった。大洪水、飢饉、疫病が、主要産業であった織物業に大打撃を及ぼしたのである。洪水が多くの耕作者を奪い、織工は帰農した。更に、産業革命とムガル宮廷の衰退が、ダッカ商業の未来を奪った。綿作は、米、藍、麻にとって代わられた。その後、ジュートが台

頭した。手工業・家内工業の衰退，ダッカの近代工業への移行の失敗により，製造業は原料輸出に道を譲り，ダッカは農業県に留まっている。

- (1) 谷口晋吉 「植民地期ベンガル農業社会の地域構造 (I) & (II)」, 『一橋大学研究年報 経済学研究』, 44 & 45 号, 2002 & 2003.
- (2) F. D. Ascoli, *Final Report on the Survey and Settlement Operations in the District of Dacca, 1910 to 1917*, Calcutta, 1917, pp. ix + 168 + icix; Risley Collection, India Office Records, IOR MSS; James Taylor, *A Sketch of the Geography & Statistics of Dacca*, Vol. I, Calcutta, 1840, pp. vi + 371; A. C. Sen, *Report on the System of Agriculture and Agricultural Statistics of the Dacca District*, Calcutta, 1889, pp. 83 + xi. James Taylor (1840) を閲覧する際に、京都大学安藤和雄助教授のご配慮を得た。同助教授のご厚意に感謝したい。
- (3) F. B. Bradley-Birt, *The Romance of An Eastern Capital*, London, 1906, pp. X + 349; Ahmad Hasan Dani, *Dacca: A Record of Its Changing Fortunes*, Dacca, 1962 (2nd edition), xiv + 274; Abdul Karim, *Dacca: The Mughal Capital*, Dacca, 1964, pp. xii + 514; Sharifuddin Ahmed, *Dacca: A Study in Urban History and Development*, London, 1986, pp. xii + 266; Do. (ed.), *Dhaka: Past, Present, Future*, Dhaka, 1991, pp. 680; Kamal Siddiqui, Sayeda Rowshan Qadar, Sitara Alamgir & Sayeedul Huq (eds.), *Social Formation in Dhaka City: A Study in the Third World Urban Sociology*, Dhaka, 1990, pp. viii + 456; Jogendra Nath Gupta, *Bikrampur Itihas*, Kalikata, 1909, pp. xxiv + 412 + xx; Jatindra Mohan Ray, *Dhakar Itihas*, 2 vols., Kalikata, 1912 & 1915, pp. ilviii + 560 & xvi + 520 + xxxvi; Himangshu-mohan Chattopadhyay, Narayanganj, *Bikrampur*, 3 vols., 1931, 1937 & 1943, pp. vi + 357 + x & xvi + 452 + vii & xx + 512; Rafikul Islam, *Dhakar Katha, 1610-1910*, Dhaka, 1982, pp. 183; Mohammad Manirjjaman (ed.), *Dhakar Lokkahini*, Dhaka, 1992, pp. xxx + 146; Rejaul Karim, *Sonargayer Itihas O Upadan*, Dhaka, 1993, pp. 639; Sharifuddin Ahamed, *Dhaka: Itihas o Nagar Jiban, 1840-1921*, Dhaka, 2001, pp. xvi + 384; Do., *Dhaka Kalej: Iti-*

has O Oitijya, Dhaka, 2002, pp. xx+288.

- (4) Taylor, 第3章;『地籍事業報告書』第1章; B. C. Allen, *Eastern Bengal District Gazetteers*. Dacca, 1912, p. 138.
- (5) 以上, 主に, Taylor, 第3章に拠る.
- (6) テイラーも, ダッカ県を,『地籍事業報告書』と同様に, 4つに分けてい
る (Taylor, 第1章).
- (7) マハラシュトラの Rurban 現象については, Frank Perlin, 'Proto-
industrialization and Precolonial South Asia', *Past & Present*, N. 98, 1983,
p. 78 を参照されたい. 但し, Perlin らによるこの概念は, 都市機能が農村に
分散配置されることをも意味しているが, 本稿でさしあたり非農業人口の特定
農村地帯への集中現象として把握している.
- (8) 『地籍事業報告書』は, 河川と農業, 健康の関係を次の様に説明する. 地
高が氾濫水位以上である県北部を除くと, ダッカ県の農村生活で川が果たす役
割は大きい. 漁業, 飲料水, 排水, 灌漑などは, 河川によって成り立っている.
秋と春の種まき時の数回の降雨を除けば, この県の農業は, 川の氾濫水に依存
している. 氾濫水位が低い年は, 農業の糧となる沈泥が高みの土地に供給され
ず, 又, 地域への十分な水の供給がなされないから, 不作と疫病が生じる. 適
度の氾濫は豊作と適度の健康を与え, 過度の氾濫は, 速すぎる流れが沈泥の堆
積を困難にし, かつ, 作物を押し流したり溺れさせて収穫減をもたらすが, そ
の代わりに, 滞留水が一扫され, 健康がもたらされる. (『地籍事業報告書』,
パラ 17 & 79)
- (9) この議論を固めるには, 国家, 地主階級と農民階級, 金貸し・商人階級
へこの収入がどの様に分配されるかを示す必要があるが, それは, アスコリに
よってはなされていない.
- (10) ダッカ県はマラリアは発生しないが, 毎年の様にコレラがどこかで流行
った. 1881 年, コレラでナラヤングンジ市 (第 III 地域) では人口 1,000 人に
付き 7.24 人が失われた. 翌年被害は更に大きく, この年には, マニクガンジ
市 (第 I 地域) では 1,000 人当たり 9.55 人の住民が失われた. ハリアランブル
(第 I 地域) のコレラの死亡率は, 1884 年には, 8.28 人, ムンシガンジ (第 IV
地域) では 8.27, 全県では 3.85 であった. 県のコレラによる死亡率は, 1885
~89 年の平均 2.11 から, 1890 年には 4.31 になり, この年, ナラヤングンジ市

- では 9.79, サヴァル タナ (第 II 地域) 7.61, ムンシガンジ タナ 5.31 であった。(1891 年センサス, パラ 103)
- (11) “Notes on Mahammadan religion, Dacca”, Note I by Jogendra Kumar Bose, and Note II by Cahndrakar, in *Risley Collection*, Vol. 9, *Religious and Social Divisions amongst the Muhammadans*, pp. 281-338.
- (12) I. T. Raukin’s report on the origin and rank &c. of Sub-Castes in Bengal in *Risley Collection*, Vol. I, pp. 371-392.
- (13) 1911 年ベンガル・センサス報告書の第 XI 章「カースト」は, 20 世紀初頭ベンガル州におけるカースト自治組織 (Caste Government) に焦点をあて幾つかの一般的特徴を示し, かつ, 急速に変化しつつあるその姿を捉えている。ダッカ県についての記述ではないが, 極めて貴重な叙述であり, 広い範囲のカーストが自治組織を持ったことが明示されている。
- (14) チャイタニヤについて, 簡単には, 谷口晋吉「インド史における差別と融合」, 『一橋論叢』114 巻 7 号, 1995 を参照されたい。
- (15) *Census of India, 1901, Vol. VI, The Lower Provinces of Bengal and their feudatories*. Provincial Table III-Caste, pp. 108-109.
- (16) スードラは, 淨カースト一般をさす場合と, 奴隷を指す場合とがある。ここでは, 前稿に記した理由で, 後者と捉える。
- (17) *Census of India, 1901, Vol. VI, The Lower Provinces of Bengal and their feudatories*. Part II. The Imperial Tables, Table XV, Occupation, pp. 309-445.
- (18) センサスの職業人口調査の限界については前稿でも述べたが, 2 点だけ具体的に指摘しておきたい。(1) 職種の合計がそれを束ねた副階層の数値と合致する場合としない場合がある。後者は, 何らかの職種が印刷から省かれたか, 誤植や計算違いによると思われるがその事情は詳らかにしえない。(2) 副階層 (従属人口を含めて) の合計が 2,731,237 人となり, 1901 年センサスが与える県人口 2,649,523 名を 81,714 名も上回る。2 重計算が発生しているのか, 誤植によるものか, これも確かめ得ない。
- (19) 但し, この数値が実態の違いによるのか, センサス実施上の定義を巡る見解や精度の違いに由来するのかを判断する材料は, 残念ながら見当たらない。
- (20) *Census of India, 1901, Vol. VI, The Lower Provinces of Bengal and*

their feudatories. Part II. The Imperial Tables, Table XVD (1), (2), (3), (4), pp. 459-472.

(21) Patters and potpipe bowl makers が 8,618 名いるが、如何なる職業だか判明しない。

(22) *Census of India, 1901, Vol. VI, The Lower Provinces of Bengal and their feudatories*. Part I. The Report, Table XV, para. 926.

(23) 以下、本稿は、Taylor, Sen, Ascoli による。

(24) 以下は、Taylor, Sen による。

(25) センサスに拠れば、農業従事者の 12% (59,604 名) は副業をしており、人口土地圧力の強さを物語る。だが、彼等の内で農業労働者として働くと認めたものは僅か 0.8% (3,780 名) しかいない。このことは、この種の調査の不完全性を示しており、実際には、少なくともこの 10 倍の農民が刈入れ時に他県に農業労働者として出稼ぎに出ていたことが、他の数値で確認される。『地籍事業報告書』、パラ 83。

(付記) 本稿の作成に当り、文部科学省科学研究費(基盤研究(C)(2) 13610087)の助成を得た。